
friend and world!!

日本娘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

f r i e n d a n d w o r l d ! !

【NZコード】

N0341T

【作者名】

日本娘

【あらすじ】

世界を救う人間としてヘタリアの世界に呼ばれたバカでアホな仲良し四人組は同じく世界を救うことができる枢軸・連合の八人と命を狙わながらも平和?な日々を楽しく過ごして行くのだった……

更新が遅い＆駄文＆小説書く才能がまったく言つていいほどない作者が書いています。

どうか生暖かい目で見てください……

ちなみに主人公四人組はバカです
w

主人公達の設定（前書き）

二次元大好き少女、黒須ほのかが大好きな友達を道連れにヘタリアの世界に行つちゃうお話の設定です

作者は夢小説と二次創作の区別がわかりません。
誰か教えてもください；

これって夢小説ですか？

主人公達の設定

はじめましてりやきバーガー！

この小説の主人公その1の黒須ほのかです！
イエイ

まあこの小説の語り？は基本私です！

じゃあこの小説の主人公達を紹介するねー

主人公達

- ・ 黒須ほのか

まあ、さつきも言った通り主人公その1つす。12月15日生まれ
のB型です

大好きなのは一次元と後で出てくる私の友達三人とお餅です。
性格はバカですね、ハイ。夢見がちの
作者によると誰にでも優しい癒されるキャラらしいです。照れるじ
やまいかw

あと人見知りします シャイなんだよ私は

姿はメガネをかけていて肩につくくらいの髪を下の方で一つ結びにしてやす！

身長は155cmくらい？

あ、ちなみに年齢は秘密ですか まあ設定としては中学一年生かな。これで私の説明は終わりです！

次は私の親友！主人公その2でさいほの」と齋藤ほのかに説明してもらうよ！

はじめまして、

齋藤ほのかです。

さつきまで説明してたバカと名前が同じなのは偶然です。

・ 齋藤ほのか

主人公その2です。3月18日生まれのO型です。ニーチクネームはさいほのです。大好きなのはミス ルです。

性格は真面目です。たまに壊れます。作者によると真面目なんだけどみんなを笑わせる事が好きで少々ツンデレらしいです。作者殴りてー

姿はきれいに整ったショートヘアで前髪をピンでとめています。

身長は155cmくらい。黒須と同じくらい

設定としては中二です

これで説明は終わりです

つぎは主人公その3のなつじだ。

はじめましてーー！
なつじこと中島菜摘です！主人公その3です！

・中島菜摘

主人公その3です！

7月1日生まれのB型です！！

大好きなものは「次元とみかんゼリーー！
ニックネームはなつじ！

性格は作者いわく普段は優しいがたまにドSになる……………そんなこ

とないよ？あとで作者殴るか

姿はメガネかけてて下の方で二つ結び！

身長は……………うん……………聞かないで……………

設定では中二だよ！

説明は終わりです！

次はキング・オブ・バカの主人公その4、苑子だよーー！

はじめまして！

薮崎苑子です！

主人公4だっぺ！

・薮崎苑子

主人公その4だつペ！

12月13日生まれのO型！

大好きなのは二次元となつじと桃ゼリー！

性格はなつじが言ってたようにキング・オブ・バカだよ！あと天然？作者いわくこんななのに実は腹黒いだつて！そうなんだあー…？姿はメガネに短い髪を下の方で一つ結び！前髪はない！

身長は157cmくらい？なんかよく黒須と双子みたいっていわれます。そんなに似てるかな？

中二つて設定！

これで全員の説明は終わり！
本編はまた今度！

それではっ！

さよーならーつ！（四人）

主人公達の設定（後書き）

…………こんな感じでやつていきます

グダグダだけどよろしくお願いします！

感想出来たらお願いします人（、＊）

その1 四人の日常（前書き）

私は願っている

四人で一緒にすることを……

b yほのか

この話では主人公たちとヘタリアキャラはまだ出会いません

ちなみにこいつらがやつて出会わせるかまだ考えてません……；

その1 四人の日常

はじめまして！

あれ？ こんなにちはかな…

いやでも設定を読まないで見てる人もたぶんいるだろ？…

まあいいや

改めまして、こんにちは！

黒須ほのかです！

この春、中学一年生になりました

あ、みなさんに戸惑つとくことがあります

私、二次元大好きです。

まあわかりやすく言うとアニメ大好きってことです

一次元行きたいって毎日思つてます

毎日お願いしてるんですよ?

「一次元に行かせてください」「…

あ、今みんなひいたでしょ?ひいたよね?

完全に私をイタイ人って認識しちゃったよね?

私はO・TA・KU っていう奴らの仲間じゃないよ?

え?なんでオタクをローマ字にしたかつて

決まってるじゃないか

カツコイイからだ

え?あんまりかっこよくねーよだつて?

細かいこと気にしてたら将来死ぬよ？

あ、いずれ死ぬか

まあそれより私は日々一次元に行きたいと願ってるわけですよ

ん？いつからそんなことやつてるのかだつて？

ひーふーみー……||年前くらいかな？

そんなに願つても一次元に行けてないんだからもうあきらめたら
つて思つてる人、拳手！

はい、今手を挙げた奴

呪うよ？

信じていれば絶対願いは叶う…はず…！

まあこんな私ですが、受け入れられる心の優しい方は本編を読んで
ください！

え？今まで本編じゃなかつたのかつて？

何言つてるんだよ

本編じゃないに決まつてるじゃないか

てことで本編へレッジゴー！

ほのか「おひさま……」

やっこ「おはよう。朝からウザイトンショングだな」

今は7時40分。私達は毎日、私の家でこの時間に待ち合わせをして学校に行く。

いきなり毒を吐いたのは私の親友、さこほのこと齋藤ほのか。いつもは真面目だけだとすぐに壊れます。気をつけた方がいいよ

ほのか「あとは苑子となつじだね」

れこほの「いわ」

.....

.....

来ねええええーーー

ほのか「…………来ないね」

さいほの「薮崎が事故ったんじゃない?」

ほのか「いやなつじが川に落下したのかも」

さいほの「いやいや一人ともトラックにひかれて即死したんじゃない?」

私とさいほのがとんでもないことを予想していると、向いの橋から一人がのろのろと歩いてくることに気付いた

二人が来たのを確認して私とさいほのは先に話をしながら歩き始めた

昨日のテレビの話、今日の授業の話、ミス ルの話。

こんな中学生の普通の女の子が話している平和な空間はあるキング・オブ・バカによって破壊される……

苑子「くつろぐ……」

ほのか「ぐほつ……」

朝からうるさすぎる声と共に背中に痛みと重みを感じる

なつじ「チャオー！」

さこほの「おー！」

ほのか「苑子！！毎朝のようにハンパない力で私を押すのはやめろ
って昨日言つたばっかりやん！！痛いんだよー？吐きそうになるんだよー？」

苑子「えー、昨日言われたから今日はのしかかつたんだよ？」

ほのか「そういう問題じゃねーんだよ」

この二人は私の友達。

私に飛び掛かってきたのは數崎苑子。

一言で言つとキング・オブ・バカ。

もう一人のほほんとした奴はなつじ」と中島菜摘。毒舌で背が小

二

なんかなつじからめちゃくちゃ睨まれてる気がするけど背
が小さいのは本だから私は気にしません

さいほの「早く行こう。黒須、今日私達の班が日直だよ」

ほのか「あ、忘れてた」

苑子 - 曰直ちよぐちよぐ

なつじ「いぬこよ？」

16

学校

ちなみに私とさいほのは一組。なつじと苑子は四組。

一年生の1Jさんは全員三組で同じクラスだったのに、離れました

学校の先生が憎いです

ほのか「さいほの学級日誌取りに行こう」

さいほの「一人で行けバカ」

ほのか「おめーも旦直だろーが」

苑子「私達も行くべー！」

なつじ「眠い」

苑子となつじは三分钟前にわかれたばっかなのにいつの間に制服からジヤージに着替え、一組のドアの前にいた。

ほのか「着替えんの早つー！」

なつじ「ついでに音楽の教科書貸してくんない？忘れちやつた」

苑子「わっちは英語の教科書ーー！」

ほのか「忘れんなよ。成績下がるよ？あと今日英語の授業ないから持つてないよ。はい、音楽の教科書」

私はなつじに音楽の教科書を渡した

なつじはサンキューと言つて笑つた

さーほの「あ、私英語の教科書持つてるよ。はい」

苑子「おーーーさーほの神ーーー」
ほのか「早く行こー」

苑子「あとでママ見に行つていい？」

そこまでの「おー」

私達一年生は技術の授業でトマトを育てている

私とさいほのトマトは順調に育っている。ちゃんと水とあげて
し、愛情もそこまでいるからね

しかし苑子となつじのはなぜか瀕死状態
瀕死状態にも関わらず苑子はトマトのアシストを一生懸命やっている
そんなにトマトが食べたいか

なんだかんだで学級日誌を取りに行き、トマトの様子を見に行つた

なつじ「親分、元氣?」

ほのか「うん、なつじがいつも仕方がないから元氣じ
やないんだ(裏声)」

さこほの「消え失せてしまえ~(裏声)」

なつじ「いつ死ぬか?」

苑子「黒須とこほのトマト元氣だね」

ほのか「私のトマトの名前、アンティー!まだよ

さこほの「また意味不な名前を」

さつき言つた通り私は一次元が大好き、

その中でもヘタリアが大好きなのです。
苑子となつじもヘタリア好き。

さいほのは一次元に興味はないみたいだけど私達がヘタリアの話を
してばっかだから登場人物の名前は少し覚えているらしい

まあ、私達四人はこんな感じでいつも過ごしている

こんな個性的な私の友達だけど

私はこの三人が大好き
ずっと一緒にいたい
四人で楽しく生きていきたい

だから私は毎日願っている

もし私が一次元の世界に行けるのなら

『私とさいほの、苑子、なつじの四人で行きたい』

と.....

そのころ世界会議場.....

アメリカ「日本、本当にやるのかい?」

日本「はい、私達はこの計画を実行しないと大変なことになります」

イタリア「ウーー....何の話?」

ドイツ「前から会議で話していただろう!」

イギリス「今、世界は危機をむかえている。」

フランス「どんなことになるのかわからないけれどやるしかないんだよなあ」

ロシア「それでその計画はこいつ実行するの?」

日本「今日ですよ?」

全員「今日つーーーーー?」

中国「いきなりすがるあるー心の準備ができてないあるー」

日本「じゃ始めます」

中国「無視すんなあるー」

日本「それでは実行します」

異世界から世界を救つ人間を呼び出す計画を.....

その1 四人の日常（後書き）

なんなんだこのグダグダ感

感想お願いします！

物語 田舎から出立（前編）

ひだりづけ

ちくせのか

第2話です！

楽しく読んでいただけぬといつもしこです！

その2 日常から非日常へ

ここにちは、ほのかです。

やつと6時間目の授業が終わりました

今は掃除の時間

私の担当は教室前の流し

あいかわらずきたねえ

なつじ「黒須、はがぢつてる?」

ちつ、つるとい奴らが来ちまつた

苑子「流しどとか地味な掃除だよね?」

ほのか「トイレ掃除の君達に言われたかないね」

私は苑子となつじと話しながら流しをスポンジでこする

……汚れが落ちん……

なつじ「黒須へ、雑巾ゆすいでー」

ほのか「自分でやったまえ」

なつじ「ケチー」

苑子「なつじ行こう」

なつじ「うむ。じゃーね黒須つーー私達はとおつても田立つ掃除をしてくるよつ」「

ビニがだ

なんか疲れたな……

「」の掃除あきたし……

だつてひたすらスポンジで絶対に綺麗にならない汚い流しを磨いてるだけだよ？

早く掃除終われー

キーんコーンカーンコーン

よし終わった

さあ帰……れないじゃん

部活あるじ

帰宅部になつてー

そして今帰りの会

前から思つてたんだけど帰つてやる意味あんのかな?

くだらないから図書室で借りた本読んでよ

あ、なんかよくわからないけど帰りの会終わった

私は帰りの挨拶をしてから後ろの席のさつまのを見る
ほのか「さつまの部活行こー」

「さつまの、さつまの」

私とさつまのは荷物を持って教室を出た

ほ・せ「いーんにーちばー」

私といほのは音楽室へ入つた

音楽室に入つてる時点でわかると思うけど、私達は吹奏楽部。

入つた理由は私の三つ上のウザい姉が吹奏楽だつたため、何回か演奏会を見に行って素敵だと思ったからだ

いかにも普通の人が吹奏楽に入る理由の一つだ

なつじ「いんにーちばー」

あ、なつじだ

え？ なんでなつじだけだつて？ 苑子はどうしたつて？

説明しよう

私達四人は去年の4月に吹奏楽に入った

しかし入部してから約一ヶ月後……

苑子は退部したのさつ

バカだろ

普通中学生って休みの日も部活に行つて忙しい

しかしあいづは帰宅部

一日中家に閉じこもりパソコン三昧

自分で言つていたが休日は一步も外に出ないそりだ

だから夏休みは大変。

世間から見たら引きこもりだ

だつてあれだよ？

去年の8月の上旬に苑子を含む友達と遊園地に言つたら、苑子は驚きの言葉を発した

「家出るの久しぶりだわー」

私がこの言葉を理解するのにどれだけかかったことか

私達は忙しいのに暇＆めちゃくちゃ暑い外に出てないだあ？

観覧車から突き落とそうかと思つたわ

宣言しようつ

薮崎苑子は将来一ートになる

私の予想はきっと外れないだろう

まあそんなこんなで部活について

この前、新しく一年生を迎える人数が増えて音楽室が狭くなってるんじゃないかと日頃感じる私だが、吹奏楽の一員だから担当の楽器くらいあるわ

当てる？

チューバ？はずれ！

クラリネット？違う

トランペット？朝ドラの主人公じゃあるまいし

一人寂しく手拍子？殺すぞ貴様

聞いて驚くなよ

フルートだ！！

あれ？もしかしてみんな驚いちゃってる感じ？驚くなゆーたやん

確かにバカでメガネでバスでアホでオタ（‘ｒｙ

だけど私はフルートだ

そしてたまにピッコロだ

さこほのはファゴットっていつ長くて大きい低音の木管楽器

なつじはパークッシュヨン

それで練習しよーっと

あ、あそこでなつじとさこほのが話してゐ

私も入れてーーー！

練習する気まったく無し

なつじ「よう黒須。ビーした？」

ほのか「暇だつたからさ 何話してんの？」

さこほの「今度四人で出掛けよつて話をしてたんだ」

ほのか「いーねーつ！私アニメイトに行きたい」

なつじ「賛成」

さいほの「反対」

ほのか「なんでなんでー？ケチウイ～」

さいほの「つまんないもん。お前らはヘタリアのグッズを見て気持
ち悪い笑みを浮かべてるし、なんか来てる人みんなオタクだし」

ほ・な「だつてアニメイトだもん」

さいほの「…………」

その時、私達三人の足元に光る魔法陣が浮かび上がった

なつじ「？何これ」

さいほの「きもひ」

ほのか「うわあつーなんか光が増していくようつー！」

「うそマジ何これ

やだやだまだ死にたくない
パニック状態

さいほの「落ち着け黒ちゃん！」

ほのか「黒つちゃんやーなあああああつーーふつ殺すボー。」

なつじ「まつせーん、殺してみやがれ」

ほのか「…………（黙）でなつじの手をめがけへ強く握る」

なつじ「痛い痛い痛い痛い痛い痛い！」

ウケるー

れこ姫の「ふざかしの場合なこだらつーってあれ？」

気付いたら光はねまつ魔法陣は消えていた

風景はわたり回じ音楽室

ほのか「…………なんだあ、一次元行かると困ったのこ

なつじ「めがけめがけペークつたけどな

なつじは涙田だ

そんなんに痛かったかなあ？

もつー回しゃつてみよつ

なつじ「いだだだだだだだだだだだだだだだだだだ

れこ姫の「やめれ

ほのか「チツ」

私はフルートを持って練習をしに行つた

あ、もう6時だ

楽器片付けよ'

お腹空いた.....

今日の給食くそまずかったし

部活の反省会が終わり、私達三人は音楽室を出た

なつじ「あ」

ほのか「ビーしたのスーパーD少女」

なつじ「んだとゴラ。教室にノート忘れちやつた。一緒に取りに行

こづ

さいほの「一人で行けハイパーD少女」

なつじ「なんでランクアップしてんの? 一人はやだよーーー真っ暗だもん!」

今は5月だが6時だから学校は真っ暗だ

仕方ないついていってやろう

そのかわり……

ほのか「ひざまづけ」

なつじ「誰がするかバカタレ」

私達は今、四組の教室のドアの前に立っている

さこほの「…………早くドア開けるよ」

なつじ「やだ

ほのか「じゃあひざまづけ」

なつじ「お前はまだまつてろ

さこほの「ちう…………仕方ねーなー…………」

そこほのドアを開けた

そこにいたのは……

ほのか「わやああああああつ……幽靈いいいつ……」

なつじ「ひいいいいつ……」さり来んなあああ……」

そこほの「悪靈退散

そこほの、なんでそんなに冷静なの

足はめつちや震えてるナビ

「うわッ……幽靈いっち来た……」

れこほの「うわああああああつ……来るなあああああつ……」

あ、そこほのぶつ壊れた

ガタンッ、ズテッ

ほのか「あ……」

幽靈いっけたあ

ダセH……

なつじ「正体を現せっ！…」

なつじが教室の電気をつけた

私の足元で倒れていたのは……

さいほの「…………藪崎？」

苑子でした。w

ほのか「なんで苑子いんの」

苑子「教科書忘れたw」

さいほの「どうせお前勉強しないからよくな？？」

なつじ「じゃあ久しぶりに四人で帰ろっか」

ほのか「ていうかなんで苑子制服?」

ジャージで来ればいいのに

苑子「お腹が空いたから」

なつじ「答えになつてねーよ」

さこほの「あ、信号青だ。渡ろ」

なつじ「あ、待つて」

苑子「じゃあねー黒須!」

ほのか「うん」

三人はここでの信号で渡る。だから帰りはここで別れてる

まあ道路をはさんで向こう側にいるけど

私は真っ直ぐのびた道を走って家の門を開けた

「ただいまーー。」

「世界会議場」

日本は丸くて赤いボタンを押した

モニターに映る三人の少女の足元に魔法陣が浮かぶ

アメリカ「あれ? 確か四人じゃなかつたかい?」

日本「別にバラバラに連れて来てもたぶん問題はないかと」

中国「あ! - 日本! 魔法陣消えちゃつたある! -!」

日本「えつ! -!?

確かに少女達の足元には魔法陣がなくなっていた

イギリス「やっぱり四人まとめてじゃなきゃダメなんじゃないか?」

日本「そのようですね」

ロシア「確かにこの機械は五回までしか使えないんだよね」

日本「その通りです。だから失敗は四回までしかできません」

ドイツ「慎重に」と「

イタリア「でもあの四人は世界を救うんでしょう？そしたら敵は四人を襲つて来るんじやないかなー？」

日本「まだ敵には知られていないので大丈夫です。しかし知つてしまつたら可能性は大です」

ロシア「ねーねー日本くん。上、上」

日本「はい？」

全員が上を見ると、天井に何かがはりついていた

フランスへ敵だな」

中国「敵あるね」

イタリア「敵だねー」

アメリカ「敵なんだぞ！今の話、聞かれたんじゃないかい！？」

日本「あわわわわビッシュましょー！」

ドイツ「あ、逃げた！…」

イギリス「逃がすかあつ！…」

イギリスは敵を追つたが……

コケた

フランス「お前ダサすぎるだろ！…」

イギリス「うるせええつ！…」

全員笑いを必死にこらえてくる

中国「お前らのせいで逃げちゃったある！…」

日本「あああどうしましようつ！…四人に危険が…早くこらえ
の世界に…しかし現在四人一緒にではないし…」

フランス「日本！…今、四人そろつてるぞ！」

日本「はいっ！…？」

日本はモニターを見た。
確かに四人そろっていた。

しかし信号で別れてしまった

中国「一人…………突つ走つて家に帰つちゃつたある…………」

日本「あああああああああ…………！」

ドイツ「落ち着け日本！」

イタリア「どうか四人無事でありますよつこ…………」

イタリアは心の底からそう願つた

その2 日常から非日常に（後書き）

これからこの話の後書きに主人公達の細かい設定をのせよつとします。w

暇な人は見てください

主人公達の細かい設定？

（定期テスト（勉強）の成績）

ほのか……中くらい。でもちゃんと真面目に勉強すればいい点がとれる。一年生の一学期の中間テストで英語で100点を取ったことがあるため英語は得意科目

さいほの……上方。でも数学がめちゃくちゃ苦手。真面目だからちゃんと勉強する。

得意科目は数学以外なら大体は……

なつじ……中くらいでほのかと同じくらい。さいほのと同様数学がめちゃくちゃ苦手。一応勉強する。

得意科目は社会

苑子……キング・オブ・バカなため中くらいの下らくん。でもがんばれば出来る子。自分ではちゃんと勉強していると言っているが、じゃあ夏休みの宿題を8月がもうすぐで終わるくらいまで手をつけないのはやめる。いつもがヒヤヒヤする。

得意科目は特に無し。

次の話でも書いつつ思っています。

感想・意見がある方はじゃんじゃん書いてください

読んでくださいありがとうございました！

その3 出来のいい姉と微妙な妹（前書き）

この人達も…………苦労してんな…………

b y 枠軸 & a m p ; 連合

先程更新したものは少し手違いがあり、おかしくなつていたので治しました

これももしかしたら間違つてるとこがあるとおもこますがよろしくです：

その3 出来のいい姉と微妙な妹

ほのか「ただいまー」

祖母「お見えりー。いつもみたいにおもち食べるのかい?」

ほのか「当たり前です。じゃ出来たら呼んでください」

祖母「はいはい」

氣付いた方はたぶんいないと思うが、何故か私はおばあちゃんには
敬語

理由は自分でもわからない……

私は階段を駆け上がった

途中でコケて足がジンジンするががんばってのぼりきった

リビングに入ると私が関わりたくない人物ベスト3に入る嫌な奴が
ソファーに座っていた

「おひ、ほーちゃん!…おかえりー!」

ほのか「…………お姉ちゃん…………」

ほのか「なんでお前帰ってきてんの？」

姉「テスト前だからねー一緒にいれてくれしい？」

ほのか「近づいてくんna 気持ち悪い」

この気持ち悪いのはこの前も言ったけど三歳年上の高校一年生の姉。
こんななんだけど頭はよくて偏差値が私にとつては高すぎる高校に通
つている

あと高校でも吹奏楽を続けている。中学ではサックスをやっていた
が、今ではクラリネットをやっている。
悔しいけどうまい

しかしコイツ、中身が大変。
妄想大好きで下ネタを連発しまくる。
正直ウザい。

勉強面とかでは負けてるけど実は私の方が背がちょっと高い。ふふ
……勝つた……

妄想大好きなくせに私がアニメ好きなのが気にくわないらしく、私

がベタリアの話とかあるとこつも可哀相なものを見る皿で見てやる

がる

殴りたくなる

チクシヨー…………こつか追に抜いてやる…………—!

れこせの「ただこま。」

私は玄関を開けて自分の部屋に行く

スクバを置き、ミス ルのロードも覗ようかとコンビングへ行つたり

弟がお菓子食べながらイ ズマイ ブン見てやがつた

弟「お姉ちゃんおかえつーーもぐもぐ。あのわもぐもぐ今日わもぐ
もぐ」

れこせの「食べるか喋るかどつかないし」

弟「うん。 もぐもぐもぐもぐもぐ……」

食うんかい

セレオラルツリヌトリツ

私の弟は小学四年生。
休日は野球をやっています。
たまにバカ過ぎてウザい

なつじ「お母さん、 今日の(ノ)飯な(ニ)?」

母「カレー」

なつじ「ラッシー」

まあやつさも言つたように今日はカレーだ

ちよつとカレー食べたかったんだよねー

「菜摘ー」

「何?」

「カレーのお肉、ちょうどいい？」

「あげるわけねーだろ」

「お姉ちゃん、お願い？」

「お姉ちゃんって書いてもダメ」

「イツは妹。

小学四年生

いつも菜摘とかバカとか書いてくれたまにお姉ちゃんに変化する

あ、私の方が背は高いよ！？
勘違いしないでね！？

妹の方が小さいからね！？

「つるさいよ菜摘」

なつじ「大事なことだからな」

苑子「お兄ちゃんお兄ちゃん」

下兄「何？」

苑子「お金プリーズ」

下兄「あげるかバカタレ」

このウザーい男はわっちの一人いる兄貴の下の方

中学三年生で卓球部部長

受験生のくせに勉強をまったくやらないとしない
人のこと言えない

もう一人の兄は……

上兄「ぐふふふ……」

苑子「…………」

下兄「…………」

どうしよう、近づきたくない

苑子「お兄ちゃん…………あいつ何してんの?」

下兄「たぶん…………AK 48だらうな…………」

上の兄は19歳。就職してるよ?

さつかも言つたけどAK 48が大好き

……キモいよ兄ちゃん

「世界会議場」

全員「…………」

八人はモニターで四人の少女の様子を見ていた

一人は姉にからまれ、一人は弟にテレビをとられ、一人は妹と睨みあつていて、最後の一人は下の方の兄と陰に隠れて怪しく微笑んでいるもう一人の兄を可哀相な目で見ていた

全員「この人達も…………苦労してんな…………」

なぜかこの四人も自分達と同じなんじやないかと嬉しく思つてしまふ國達だつたとさ

その3 出来のいい姉と微妙な妹（後書き）

主人公達の家族と家

ほのか……父、母、祖母、父の妹、姉の六人で一軒家に住んでいる
さいほの……母、弟の三人でほのかの家の近くに出来ためちゃくち
やでかいマンションに住んでいる。父とは別々に暮らしている
なつじ……父、母、妹の四人で一軒家に住んでいる

苑子……母、兄二人の四人で一軒家に住んでいる。父は単身赴任でいない。でもたまに帰つてくる

なんかあつたら言つてくださいませ！！

その4 動く歯車（複数形）

「うわあ、やがてやがて、まつしてねーで、早く行くが? あ、あ?

b y 苑子

今回は最初の方ちょっとシリアルス

ついに運命の歯車が動き出す……

その4 動き出す歯車

私はある夢を見た

ほのか「ぬ?」「うう?」

私は何もない荒野に立っていた

空は曇つており雨が今にも降りそつだ。

地面上には雑草しか生えておらず綺麗な花なんか一輪も咲いてない
からいつか

苑子「呼んだ?」

ほのか「苑子いたああああつ!?

なぜに苑子いるん!?

苑子は自分から一十メートルくらい離れたところから走つてくる

苑子……走つてる時の顔がまじウケるんだけど

やべえ、笑いこらえるの辛い…………W

私が笑いを必死にこらえて苑子の方を見た瞬間、

地面が大きく揺れた

ほのか「うわあつ！？ 地震！？」

苑子「黒須う——！」

苑子は地震が起きたのにも関わらず笑顔で走っている

あの笑顔が少しムカつくのは私だけだろうか

ほのか「…………あれ？」

私はあることに気付いた

苑子の後ろに黒い何かがいる？

最初はただの苑子の腹黒いオーラだと思つたが、黒いのはだんだん大きくなり人の形となつた。

人となつた黒いのは手に剣を持っていて、苑子に向かつて振り下ろ

そうとしていた

ほのか「苑……………つ！！」

私は苑子の名前を呼んだ

しかし、

遅かつた

剣は苑子に向かつて振り下ろされ、背中をきりつけた

苑子の背中からは大量の血がふきだし苑子は崩れ落ちるように倒れた

ほのか「ひつ……………！」

私は少し怖いが苑子に駆け寄る。

苑子の倒れているところは血の海となっていた

私は怖くなり、誰かいなか回りを見渡した

人がいないかと思ったがいた。

死体が

ほのか「つ…………！」

しかも死体の顔は自分の親友の

さいほのだった

さいほの死体の近くにはまた血だらけの死体があつた。

ほのか「ま…………とか…………」

私の嫌な予感は悲しくも的中した

死体の顔はやはり

なつじだった

ほのか「…………はは、なんてリアルな夢なんだろうか…………こんなシリアスな小説じゃなかつたはず…………」

そうだこれは夢だ。

私は死体から離れるために荒野を走った

走って、走って、恐ろしくてたまらない気持ちをなくすために走った

ほのか「あっ…………！」

私は何かにつまづいて、地面に倒れた

体を起こし何かの違和感を感じ手を見てみた

自分の手は汚れていた。

真っ赤な血で

私は恐る恐る後ろを見た

そこにたおれていたのは、

屍と化したもう一人の自分の姿だった

ほのか「うわああああああっ……」

ほのか「うわあああああっ！…？」

そこまでの「ぬおつーー！」

私は飛び起きた

近くには先程、死体として見たそこまでの。

場所も荒野じゃなくて、自分は白いベッドの上にいた

ほのか「…………」

そこまでの「…………」

あひ…………

『氣まずいよおおおおお…！

だつてあれだよ…？

私、叫び声を上げて飛び起きたんだよ…？

漫画のワンシーンかああああ…？

恥ずかしいだろーがあつ…！

ほのか「…………あの…」

さこほの「なんだい、中一病」

ほのか「違エよ…誤解すんな…つか俺は今中一だああああつ…！」

さこほの「で、なんなの」

ほのか「ココハドコテスカ？」

さこほの「なんでカタコト？迷子の外国人か君は」

ほのか「で、ビニ…」

さこほの「地球かな」

ほのか「真面目に答えるアホンダリ」

さーほの「保健室だよ。お前、4時間目の体育の間に倒れたんだよ?」

ほのか「マジか

あ、思い出した

体育で持久走をやつていて持久力がまったくない私は二周目あたりでぶつ倒れたんだった

ほのか「で、今何時?」

さーほの「昼休みだ

ほのか「うそつー給食はー?」

さーほの「やつを食べた

ほのか「オーマイガツ!..」

嘘だああああ!

今日は私が大好きな肉じゃがだったのに……!

そこまでの「…………なんで泣いてるか」

ほのか「泣いてないっ……」

どひしてだらりへ、

涙がとまらない

なつじ「黒須、倒れたんだって?」

苑子「ダセH ≪」

なつじ「空氣読もつよお前。思こやつて知つてる?」

保健室に入ってきたのはなつじと……

ほのか「そ……苑子……」

そこまでの「ほお、そんな夢見たんだ。だからあんな…………」
ほのか「忘れてくだわー」

苑子「なんで私がそう簡単に殺されなあかんねん」

なつじ「一番簡単に殺されそつなお前が何言ひとんねん」

私はさつきの夢を二人に話した（苑子が途中から思いつきり嫌な顔をしていたが見なかつたことにしよう）

ほのか「マジで怖かつたんよー……」

さ・な・そ「ふうん。」

.....

ほのか「つて、終わりかよつーーー！」

やこはの「うん。黒須、今日4時間授業だからこれから帰りの会だよ。早く教室行け！」

ほのか「.....」

私は無言で頭を、ベッドから降りた

「うお、いやあ、うーー。今日は部活なしじゃあ、うーー。」

さいほの「そうだな」

なつじ「黒須一、せこほの一、一緒に帰るー」

苑子「あと、トマト見に行いつ。」

「たてば御アサト、あゝかのぬ

なつじ「何?」

ほのか「苑子のトマトの名前は子分。 さいほのはロヴィーノって名前にしたから」

さいほの「勝手に名前つけんな」

వీర

さいほの「黙れやメガネ」

ほのか「んだと」の「スチル好き」

苑子「どうやがりやがり言つてねーで、早く行くぞ?あ、あ?」

せ・ほ「すいません」

苑子「やあ、子分ーー。」

そこほの「黒須、アントニオ元氣?」

ほのか「アントニー?」

そこほの「朝のアマタの窓前だよ。確かアントニオじやなかつた?」

ほのか「アントニー君じやボケ」

なつじ「うふふ……親分は元氣だなあ……」

なつじはもう可哀想なことになつていてるトマト 親分に話しかけてくる

ほ・わ・わ『なつじ、『愁傷様』……』

なつじ「あ、苑子。じょうに水いれこいつ」

苑子「おつーー。」

苑子はなつじの隣へ言った

『トキハキタ.....』

四人「！.....！」

うわっ、何今の声！！

気持ち悪つ！！

その直接、なつじと苑子の足元に大きな穴が空いた

な・そ「さやああああああああ.....」

そこほの「なつじいいい！.....數崎いいい！.....」

ほのか「これは.....」

そして、私とさいほの足元にも穴が空いた

ほ・せ「ぬおわあああああああ.....」

私達は真っ逆さまに下へと落ちていった。

私の意識はそこで途絶えた……

（世界会議場）

八人はモニターで四人の少女が穴に落ちていくのを見ていた

日本「しまった！！敵に…………！」

アメリカ「このままじゃ四人共殺されちゃうんだぞ…………」

フランス「世界が…………地球が終わっちゃう…………」

日本「…………大丈夫です、まだ可能性はあります…………」

そういう日本は真っ直ぐな眼をしていた

その4 動き出す歯車（後書き）

主人公達の体力

ほのか……本文の通り持久力がまったくないため駆伝とかめちゃくちゃ苦手。でも短距離は速い。あと握力が結構ある。体力テストでは立ち幅飛びが一番得意。そして体がかたい

さいほの……持久力はほのかよりない。でもさすがに倒れはしない。体は微妙にやわらかい。体力テストでは長座体前屈が一番得意

なつじ……見た目でわかるが握力が全然ない。微妙にやわらかい。持久力はちょっとある。長距離は割と得意なため持久走が得意

苑子……握力がハンパない……；でも運動は苦手で体育は嫌い。体力テストではやっぱり握力が得意

相変わらずの駄文で申し訳ありません……

感想、お願いします！

その5 夢は現実? (前書き)

「これはお前の墓場だまああつー！」

b yなつじ&a m p.; 苑子

今日は最後へんがめちやくちやシリアルス

あとカタカナが多いので読みにくいくと思われますがよろしくお願ひします

その5 夢は現実に？

ほのか「うー……いた……」

私は目を覚ました

周りを見ると曇った空、雑草しかない地面、夢で見た荒れ地とまつたく同じ風景だった

ほのか「えーっとお……確かに変な声が聞こえた瞬間、苑子となつじが穴に落ちて私とさいほのも違つ穴に落ちたんだっけ？」

私はそつだ、さいほの探そうーーな感じで荒れ地を歩きはじめた

ブニユッ

私は踏んでしまった

さいほのを

ほのか「ああああああああーーー？」

やべえっ……やこほの顔踏んじやつたよ……

やこほの近くにいたんだ……まつたく『づかなかつた……

影つすつ……

顔踏んだくせこひどい奴

んー……なんか殴られそうだから……

逃げよつ

ガシツ

ほのか「…………く？」

後ろを見ると……やこほのがじす黒く微笑みながら私の足をすん
ごい力で掘んでいた

やこほの「うらら…………ほのかわやん、お・は・よ」

ああああああああああ

何もない荒れ地に少女の悲痛な叫びが響いた……

なんか黒須が言つてた夢の舞台にさつへんなよーなそつへつじゅな

それにしてもうひるがいへ。

なつじ「つまれつきつまれつきつまれつきつまれつきつまれつき

苑子「使つてなつよ

なつじ「

なつじ「つまれつきー? 小わこ頃からそんなにペッペッペ使つて

苑子「つまれつきだつペー?..」

なつじ「お前は語りもひくできないのか

なんか気付いたらこじこじいたんだつべ

苑子「わっち! ?
私は今、なつじと行動して

なつじ「苑子の心の叫び声」

苑子「ぬ? 何今の叫び声」

いよーな

なつじ「…………苑子」

苑子「何ー？」

なつじ「なんか黒いのがいる」

苑子「黒いの？黒須の」と？」

私はなつじの指さす方向を見てみる

ホントに黒いのがいた

ほのか「…………ひどこよれこほの

れこほの「前たり前の」とやつただけじや」

私はあの後、れこほのこ…………やあああーー思い出しただけで
も感心しーーー！

れこぼの「あんなことよつ黒須くん」

ほのか「私にとつてはそんな」とで済む! ジヤないんだよれこぼ
のくん」

れこぼの「あれ? に黒いのがいるの、ビックリ!」

ほのか「なつじ?」

私はきょろきょろと周りを見渡してみる

確かにいた。黒いのが

ほのか「れこぼの、あんなの見ちやいけません!」

れこぼの「え? のお母さんだ君は。でもあこつ、うひひに向かって
くねよ

ほのか「へ?」

私は黒いのを見る。

うわあ! へへへめよつ十メートルくらい進んでる一步へのはやつ
! !

あと黒いのが人の形をしてこめるのがだんだん見えてくる

あー……「ん

ほのか「怖あああああああつ……？」

私はさいほの手を掴んで逃げた

さいほの「痛い痛い痛い！！黒須！腕！とつても痛いです……あいだだだだ！！」

ほのか「今は逃げる方が大事じゃあああ……腕くらい取れたって生活できんだろーが！！」

さいほの「できねーよ……思いつきり不便だろーが……」

ほのか「とりあえず早く逃げるぞ！！なんかあいつ、私達を殺しこ来たみたいでめちゃくちゃ怖いいいいい！！！」

さいほの「んなわけ……」

『ヨク氣付イタナ』

ほのか「ぬおつ……？」

私達の後ろにいた黒いのはいつのまにか前に立つている

瞬間移動でもしたのかコイツは……

ほのか「もしや瞬間移動されましたか？」

さいほの「なんで敬語？」

『ピーンポーン！セイカーライ。』

ほのか「当たっちゃったよーーー！」

さじほの「しかもコイツ、めちゃくちゃフレンドリーじゃねーか！」

「！」

『ハジメマシテ。私ノ名前ハ、キリハヂス。アナタタチヲ殺シニ来
マシタ』

ほのか「そーかあ、キリハっていうんだー…………って、え？」

さじほの「今、聞いちやいけないキーワードを言つていたよつな」

『ソレデハ、計画ヲ実行シマス。』

キリハと名乗る黒いのが言つた瞬間、夢のように地面が大きく揺れ
だした

さじほの「わああーーー！」

ほのか「おわわわーーー！」

やがて揺れはおさまった

『ジユンビカンリョウ』

さじほの「何…………を……」

私達は言葉を詰まらせた。

キリハの後ろには

怪物がいた

苑子「…………は？今、殺し来たって言った？」

『ソウ。アナタタチハ邪魔。ダカラ殺ス』

なつじ「上等だゴラア」

苑子「なつじ！..挑発しないで！」

『残リノ一人ハキリハガモウ殺シテイルダロウ』

なつじ「！..！..残りの一人つて……」

苑子「Wほのかのこと？」

なつじ「もうちょっと緊張感をもとつよ」

『…………オマエラトイルト調子ガクルウ。早メニヤツテシマオウ』

苑子「ちょい待ち！…君さ、なんて名前？」

『キリカ』

なつじ「なんで名前聞いたの苑子？」

苑子「なんとなく」

なつじ「とにかくキリカさん。私達、死ぬ気などまったくありません」

『ホウ。ワタシカラ逃ゲラレルトデモ？ソレハ無理ダ。ココハ才前ラノ墓場ダカラナ！…』

な・そ「いや、」

なつじと私は戦う姿勢をとり、敵をするぞく睨んだ

な・そ「ここはお前の墓場だあああああ…」

そして、なつじと同時に地面を蹴りキリカへと突進していった

そこほの「さやああああああ…」

ほのか「そこほのああねむつ……」

「わあああ……じつじゆつ……なんか怪物こそほのが捕まつひや
つたよおつ……」

そこほの「ぐれつ……腹がしめつけられ……」

『サア、ドウスル?』

ほのか「いりまする」

私はバックに入っていた理科の教科書をキリハに向かつて思いつき
り投げた

そして見事命 中

『イッダアアアアアアアアアーーー?』

そこほの「…………（。○。）」

ほのか「正義は勝つ……」

『キツ…………キサマア…………痛イジャナイカーーウチドロロガ悪イ
ト死ヌンダゾーー?』

ほのか「殺すつもつでやつたんだけど」

『オイイイツ……オ前本当に中学生イイイーー?』

ほのか「さて……ほかに武器は~

さこの「…………お前、死ぬよ?」

『ハアア！？』

ほのか「あ、あつたあつた 小刀」

ほのか - しゃーこの前お姉ちゃんの引きだしあれでたらあー

さいほの「お前の姉ちゃんヤバくないか！？」

ほのか「ま、殺す前に聞いとくか。なんで私達みたいな普通の中学生を殺そうとしたの？」

『『お前のどじが普通の中学生だーー..』』

ほのか「あ、さいほのー！」

私はさいほのに向かつて投げた

はやみを

「あれ、何の『アーチ』ですかねえ？」

はさみはさいほのに巻き付いてる怪物の太いツルに刺さった

さこほの「ためり…………危ねえだらおおおおーー！」

ほのか「それでツル切って自分で脱出してね。私は『イツを殺るから』

『（田ガマジナンテスケド……）』

さこほのは、はさみで頑張つてツルを切りつつしていた

私は小刀を構えキリハに突進した

私が小刀を振つたのと同時にキリハは空高く飛んだ。

キリハは怪物の頭の上に着地した

ほのか「チツ、クソが

『ナンナノオ前！？』

ほのか「あとわつせから氣になつてたんだけどお前が、会話がカタ
カナじやん？はつきり言つて読みずらい」

『ソレハ作者ガ……』

ほのか「じゃあ作者ー、会話文普通にしてー」

作者「ラジャーーー！」

『作者出てきたーー？って普通になつてないやつーー。』

ほのか「よしこれで読者様も読みやすいだらう。それで、じゃあ私達を殺す理由を教える」

『囁つわけ』

グサツー！

『…………』

キリハは足元を見た。

つま先から一々くびりの所にするどこハサミが刺さつていた

怪物はとても痛そうにしてくる（頭に刺さつてゐる）

そこほの「こいから話せ。あとハサミをいつかに投げてくれると嬉しいです」

『じゃあ投げんなーー。』

キリハは怒りながらハサミを投げた

キリハは一息ついて話はじめた

『ふう……俺は一つ端だから詳しいことはわからないが、今俺の組織はある計画を実行しようとしている』

ほのか「世界征服的な？」

『まあそんな感じだ』

ほのか「当たつちゃったよーーー。」

嘘のつもりで言つたのに…

『で、その計画を実行しようとしたのはいいが、問題が起きたんだ』

れいほの「問題？」

『組織はある日、この計画の邪魔となる存在がいることに気が付いた。それがお前らだ』

ほのか「なんかわくわくすっごーーー。」

れいほの「だまつとけや

『その存在がいると計画の成功はない。だから組織は邪魔者を殺そうとした。』

ほのか「よく私達が気付いたね」

『まあな。ちなみに邪魔な存在はお前達だけじゃない。あと8人ほどいる』

さいほの「大変じやん」

『俺はこの前、その8人を殺そつと奴らの秘密基地に行つた。そこでお前の存在を知つた』

ほのか「なあむせびお…………つてふざけんなああつーー」「

そこほの「それ思いつきつけその8人のせいで私達命狙われてんじやんーーぶつ殺してやるーー」

ほのか「おうよーーへタリアキャラなら許すけど」「

私は怪物の体を昇つていって、頭にいるキリハの所にたどり着いた

ほのか「とつあえずお前先に死ねえええーー」「

私は小刀をキリハに振り下ろした

その時、耳が痛いほど鋭い音が目の前から聞こえた

その音はテレビドラマとかで聞いたことがある銃の音に似ていた。
てこづかそれだつた

キリハは銃を構えていた

私は、いきなり肩に激しい痛みを感じた

肩を見ると真っ赤な液体が大量に出でていた

ほのか「……………？」

そこほの「黒須……！」

私は何も考えられなくなつた。

そしてよろけて、何ともトコにある地面へと落とした

体全体に激しい痛みが襲つ

声も出ないほど苦しかつた

そこほの「黒須……！」

私は仰向けになつてそこほのを見た

そこほの顔は青ざめていた

いきなり田の前に黒いのが現れた

『死ぬのはお前だな』

キリハは一やりと笑い私に銃口を向けて引き金を引こうとした

「あここの「黒須うううううひひひひ……」

私は瞼をおろした

「ちよっと待ったああああああ……」「

聞き覚えのあるまぬけな声が頭に響いた

私は瞼を開けた

ほのか「…………なつ！」

『お前らなんで……』

「「バカでアホでうざいけど大切な友達を助けにきたんだよ……」

なつじと苑子は声を合わせていった

（世界会議場）

ドイツ「…………日本」

日本「…………はい？」

アメリカ「俺達…………敵に殺される前にあの子達に殺されるごじや
ないかい？」

日本「…………善処します」

その5 夢は現実に？（後書き）

主人公達の出身地 ちなみに主人公達が住んでるところは埼玉県 作者が埼玉に住んでるんで

ほのか……千葉生まれ埼玉育ち。小さい頃からずっと今の家に住んでる。

さいほの……埼玉生まれ埼玉育ち。小学校四年生の時にほのかの小学校に転校して来る

なつじ……埼玉生まれ埼玉育ち。小学校五年生の時に転校して来る

苑子……埼玉生まれ埼玉育ち。小学校一年生の時に転校して来る

ほのかだけ千葉生まれのはお母さんがそこに住んでいたからです

!!

ほのか以外みんな転校してきましたw

意見・感想がある方はよろしくお願ひしますーー！

作者は感想とかあるとめちゃくちゃテンションがあがりますのでw

その6 長年の夢は現実に（前書き）

逃げるが勝ちいいいい！！！

b yほのか・さいほの・なつじ・苑子

久しぶりの投稿w

これからは一日一回を目標そいつと思ひます

ちなみにユーザー名を変えましたw

その6 長年の夢は現実に

ほのか「なつじー?苑子!-?」

なつじ「やつ 黒須、なんかす」とことになつてない?」

苑子「黒須は血で真っ赤……ふふふ…」

わこまの「じゃーよー!…ブラック苑子出すなー!」

苑子「あはは」

『あの……存在忘れてませんか?』

ほのか「忘れてますが何か?」

『何か?じゃねーよー!…つかそこのチビとでかいのー!…キリカはどうした!…』

なつじ「おー、今チビつった?苑子のことはでかいって言ったのに私のことはチビつったよね?言つたよね?よーし、黒須。刀貸せ!」

ほのか「あいわ」

私は肩の傷を押さえて小刀を渡した

『いやいやちよつと待てええええ！…そんな細かい所までいちいち
… ひつかキリカ……』

なつじ「細かくないんじゃ ボケエエエエー！」

『人の話を聞けええええ…』

さこほの「んで、なんて言おうとしたの？」

そういうのはいつの間にか怪物から脱出していった

『あれ、なんでいつの間にか脱出してんの？』

苑子「いやあ、鞄あさってたらちよづ彫刻刀とカッターがあつて
さあー！いやあ、切れ味いいねー！彫刻刀とカッター」

『お前らもほや中学生じゃねーよ！じゃなくてキリカは！？』

苑子「キリカつてあそこで息切れてる黒いの？」

苑子は少し離れたところにいるキリハに似た黒いのを指差した

『せえつ…………せえつ…………お前り…………』

『キリカ！…大丈夫か！？何があつた！』

なつじ「といつわけで時は約10分前にさかのぼります』

（約10分前）

な・そ「！」はお前の墓場だあああああつ！…」

『くつ……！…？』

キリカは身構えた

しかしいつまでたつてもなつじと苑子は来ない

キリカが周りを見ると全速力で逃亡している一人を見つけた

『おいいいいい！…あんだけカッコつけといて逃げんのかよ！…』

キリカは一人を追つたのであつた……

苑子「そして今にいたる」

ほのか「何やつてんだおまこらは」

さいほの「頭大丈夫?」

なつじ「黙れや」

苑子「それより二人は恋人ですか?」

ほ・さ・な「話そらすな」

『恋人なわけないだろう馬鹿が』

苑子「ん?今バカつつた?さりげなくバカつて言ったよね?」

『私達は双子の姉弟だ。私が姉、キリハが弟』

ほのか「あ、そーいえば双子って先に出てきた方が弟か妹って知ってる?」

さいほの「なんでいきなり豆知識。つか誰でも知ってるだろ」

なつじ「つかキリハって男だったのあおおおお!?」

苑子「いまさら?」

『…………キリハ、なんか全然話も進まないし早く帰らないと上司に怒られるからもうやつてしまおつ』

『そうだね。さつと殺ろうか』

ほのか「…………ねえさーほの、」

さーほの「…………なんだい黒須」

ほのか「私ね、さつき後ろから殺りつっていつ不吉な言葉が聞こえた気がするんだ」

なつじ「偶然だな、私もだよ。」

苑子「うん。なんか嫌な予感がするよね。」

さーほの「だな。ま、じつこいつとあせ……」

四人「逃げるが勝ちいいいい！！！」

私達は四人一斉に何もない荒野を駆け出した

『ははははっ、もう遅いよ』

ほのか「ぬおつ！…？」

さーほの「またかよつ！？」

なつじ「わやああああつーーキモーいーいつーー！」

苑子「おー」

私達は地面から出てきた怪物のツルに捕まってしまった

つて、うわっ……高っ！

ほのか「あやああああつ……高いいい……怖い……」

れこぼの「あれ、まさかの高所恐怖症？」

『あーあ、こんな雑魚共のせいで余計な時間使つたよ

なつじ「余計な時間を大幅に使つたのは君達だと思つんだが

『黙れ。じゃあ早速やるか』

私達は一力所に集められた

足がぶらんぶらんしててなんか嫌なんだけど

苑子「うほああああ……死にたくないよおおおおお……」

なつじ「黙つとけや、イタリア第2号」

怪物は何本もあるツルをめりやへりやでかいナイフに変えた

なつじ「あやああああつ……まだ死にたくない……せめて
160cmをこえるまでああああああ……」

れこぼの「お前もひとと態度全然違うよ？」

ほのか「でもあれで斬られたくはないなあ」

れこ姫の「黒須、お前片腕は自由だ。小刀でツルを早く切つてよ
ほのか「わざ逃げるときに小刀放り投げちやつた。てへつ
れこ姫の「」の役立たずが

「わづかめの田がめわづかめの田がめわづかめの田がめ
うわづかめの田がめわづかめの田がめわづかめの田がめ

『むづいにかしらへ』

なつじ「よくないよくないよくないよくない」

苑子「なつじ、落ち着いて…」

『んじや、バイバイ』

怪物はナイフを振り下ろした

れこ姫の「わやああああああ…」

苑子「れこ姫の…わづかめの冷蔵わづかめ」へーへー

なつじ「来世は大きくなつてるかなあ…」

ほのか「諦めないでええつ…」

ナイフはすぐ近くせまつてきていた

私以外の三人は完全にパニクつてたし……

うわああんっ！…どうすればいいのぉおっ！…？

その時、私の近くが突然光りだした

光はとても温かく私達を包んだ

私は光の中で呆然としていると光から白くて綺麗な手が出てきた

もう大丈夫です。あなたたちは絶対に私達が守ります

私の耳に響いた声は、聞き覚えのある落ち着いていてとても安心できる声だった

私は光から出てきた手を握った

その手は、周りの光のようにとても温かい手だった

その6 長年の夢は現実に（後書き）

今回は黒い人達の紹介をします。黒い人達つていつても黒いマントを着て、フードをかぶっているだけです。外見は普通の人間です。w

オリジナルキャラ紹介

・キリハ

謎の集団の下っぱの黒い 男。キリカの双子の弟。 肩に
つくれりの青い髪 に蒼い瞳をもつた17歳 くらいの青年

・キリカ

謎の集団の下っぱの黒い 女。キリハの双子の姉。 長く
て綺麗な青い髪に蒼 い瞳をもつ17歳くらい の美女

感想、意見がありましたらどんどん書いてくださいーーー。

その7　主人公は大変興奮されたようですが（前書き）

ほのか チョップ!!

b y ほのか

今日はちょっと短めです

その7　主人公は大変興奮されたようです

ほのか「…………ぬ？」

私は目を覚ました

自分がいるのは見ず知らずの部屋。

私が寝ていたベッドではさいほのとなつじと苑子がまぬけな顔で寝ている

セーヒト、

ほのか「起きる」

私は三人の頭にほのかチョップをお見舞いした

セーヒトの「あこだつ……」

なつじ「ぐわい……」

苑子「ふ」

ほのか「おはよう諸君　いい朝だね　」

さいほの「黙れ。バカ」

ほのか「ほのかチヨップ！…」

さいほの「いだだつ…」

なつじ「黒須、痛い。」

ほのか「何年も改良したからね」

さいほの「改良する暇あんなら勉強しろ」
ほのか「ほのかチヨップ！…」

さいほの「いだだつ…！」

なつじ「うーん、……？」

さいほの「つか藪崎だけ起きてないね」

苑子「ん~……むにゃ むにゃ……」

ほのか「ムカついてきたわ。もつかいやひ、ほのかチヨップ！…」

私はもう一回ほのかチヨップをした

さいほのこ

さいほの「なんで私なんだよつ…」

「…」

ほのか「なんでって…………うざがつたから」

さじほの「理由になつてねーよ」

その時、いきなり部屋の扉が開いた

私達三人はびっくりして硬直した

その後に私となつじは入つてきた人物を見てさらに驚いた

ほ・な「…………日本?」

さじほの「…………は?」

日本「おや、私の名前を『存知のようですね』

入ってきた人物は私が大大大大大好きな日本だったのだ

ほのか「に…………日本さんで』ぞいますか?」

日本「はい。貴方は黒須ほのかさんですよね?」

ほのか「ぐはつ……!」

私はベッドに倒れ伏した

なつじ「黒須ううううう！」

さこほの「なんなのコイツ」

日本「うわっ！？大丈夫ですか！？」

さこほの「いつも」なんなので大丈夫です

なつじ「黒須ううううああああ！」

ほのか「だつて……大好きな日本がいるし……しかもその日本に名前を呼んでもらえるなんて……」

今なら興奮しそぎて鼻血が出そうな気がする

日本「それより、まだ寝ている方がいらっしゃるんですが……」

日本はちらつと爆睡してゐる苑子を見た

苑子は口を開けてよだれが出ていて本当に元コイツは女のかつてくらいの顔だった

なつじ「苑子、起きる。日本がいるよ」

苑子「んー……んなわけねーだろチビガキ……」

なつじ「あれ？ 今本当に寝言？ 起きてるよね？ 完全に起きてるよね？」

なつじは「ラックオーラ」をめちゃくちゃ出している

日本「は……はは……」

イギリス「おい日本、四人は日本で覚ましたか?」

はい、イギリスキタ——————!

やべえよ、マジ、アニメや漫画で見るよりかっこいいよ。あと眉毛が立派だよ

日本「イギリスさん、一人だけなかなか起きなくて……」

日本はまたちらりと苑子を見た

そういうえば苑子ってイギリスが大好きだったよーな……

ほのか「おい、苑子、イギリスがいる」

苑子「…………んー、黙つとけやクソ須」

ほのか「誰がクソ須だ??あ、あ?」

さいほの「落ち着けエロ須」

ほのか「なんでエロ!!?私なんも問題発言してないよね!!?」

中国「にぎやかあるねー、どうしたあるか?」

中国もキター—————！」

ヤバい、めひやくひや女に見える

確か苑子、中国も大好きだったよーな

さいほの「薮崎、チャイナが来たよ」

苑子「…………んー、うつせーょミス ルオタク」

さいほの「ありがと!!」

どんだけ冷静なんだコイツは、しかもちよつと嬉しそうなんだけど。
なんで？

イタリア「うわあーーかわいい女の子達だあーー！」

ドイツ「うるやこーーお前らーー！」

イタリアとドイツまでキター—————！

イタリアのくるん引つ張りてえええ！！

あとドイツちよークミムキなんだけど

アメリカ「騒がしいんだぞーー！」

フランス「女の子の取り合いか？」

ロシア「うふつ 楽しそうだね」

AKYとナルシとマフラーさんキタ――――――――!

AKYはなんかめりやくちや姫でさえーーー

ナルシはなんかうぜえ

マフラーさん、めひやくひやでかいっす

苑子「んー? 何ー? 騒がし……」

苑子は長い眠りから目覚めて部屋の状況を見た

取つ組み合つてゐるイギリスとフランス、お菓子を配る中国、大声で笑うアメリカ、パスタを食べはじめようとするイタリア、そのパスタを取り上げるドイツ、その様子を困つたように苦笑いする日本、ずっとニコニコ笑つてゐるロシア、……あと自分を完全にガン見している三人

苑子「ああ、これは夢か。よしーもっかい寝よ」

全員「寝るなボケええええーー」苑子はみんなに飛びげりをされ氣絶した

その7 主人公は大変興奮されたようです（後書き）

主人公達の趣味

ほのか…」うみえて本を読むのが大好き。暇さえあれば本を読む。あと絵も描くのが好き。絵の才能はそこそこ?

さいほの... ミス ルオタクなのでそのCD聞いたりDVD見たりするのが好き

なつじ…なつじも読書好き。この人も絵を描く。絵の才能はめちゃくちゃある。あと苑子をいじめる」と。

苑子…部活に所属していなかったため家にいる時間はほとんどパソコンいじり。妄想大好き。

感想・意見等がありましたらじゅんじゅん書いちやつしてください。」
!!

その8 初対面では自己紹介（前書き）

最初はグー！…ジャンケンポン！…

b ↗全員

短いです！
あと馴文です

その8 初対面では自己紹介

苑子「うう……ひどいよみんなして……」

苑子は涙目だ

なつじ「はははっ、わまあ」

アメリカ「よーしー!といひことで小説お馴染みの自己紹介をするんだぞーー!」

シーン…………

イギリス「いきなりなんだお前・」

アメリカ「この四人と俺達8人はこれから親交を深めなきゃいけないからなー!だから最初は自己紹介なんだぞーー!」

イタリア「あ、俺もそー思ーー!」

ほのか「あれ?今これから親交を深めると聞いていましたよね?」

アメリカ「うん。君達はこれからここで生活するんだぞーー!」

四人「はあああああつーー?」

さこほの「ほなつ…………生活するつて…………ミス ルのCDとDVD
なしでどうやって生活しろといつんだ……」

苑子「そこがみ……」

日本「心配ありませんよ。ほのかさん達の荷物はイギリスさんの魔
法でここに世界に来てます」

イギリス「魔法じゃない、魔術だ……！」

フランス「変わんねーだろ

なつじ「さすがイギリスだね。私達の服まである

なつじが部屋のすみに置いてある大量の荷物の中を見て言った

ほのか「それよつ自己紹介すんぢやないの？せひつま……」

ドイツ「そうだな

苑子「最初誰から？」

.....

全員「最初はグーッ――ジャンケンポン――」

全員はそろって手を出した

ほのか「…………私がよつ――」

負けたのはただ一人、私だつた

イタリア「じゃあ最初は君達四人からねー」

さいほの「わかつた。早くしろ黒須」

ほのか「ちえつ…………えと、黒須ほのかです。好きな物は二次元と本と餅です。ちなみにメガネを外すと美少女って設定はありません。メガネとってもブスです。よろしくお願ひします」

私はペコリとお辞儀をした

イタリア「かわいー！」

ほのか「は？」

イタリアー だつて…………かわいーーーー

ほのか「理由になつてませんか……」

さいほの「次は私ね。齊藤ほのかです。あだ名はさいほの。」にいるメガネと同じ名前です。好きな物はミスルです。よろしくお願いします」

フランス「ミス
ル?」

さいほの「はつ、ミス ルを知らないとはクソか」

日本「フランスさん、ミスルというのは我が国で有名なアーティストです」

わいほの「おつ、よく知ってるな！」

日本
—はい

なつじ「次は私！！中島菜摘です！あだ名はなつじです！私のこと
をチビとこうやつはあの世行きなので気をつけてくださいね よろ
しくお願ひします」

全員『ええええええええええええええ！－！－！』

苑子「私の番だね！！數崎苑子！永遠の14歳です！！好きなのは
二次元とパソコンと妄想と…………」

なつじ「つぎあああいいつーーー」

なつじは苑子にアイアンクローバーをかました

わー痛そー

さいほの「永遠の14歳つて…………お前まだ誕生日きてないから13歳だろ」

苑子「細かい」とは『氣にしない』のやつ」

ほのか「細かくねーよ」

そこまでの「あー、じゃあ貴方達の自己紹介を……」

イタリア「あー、えと……」

ほのか「必要ないよ?」

全員「…………は?」

みんなびっくりして私を見ている

ほのか「私、全員の名前知ってるもん。左からイタリア、ドイツ、日本、イギリス、アメリカ、フランス、中国、ロシアでしょ?」

日本「あ…………当たつてます……」

中国「なんで……我達の名前を…………?」

ほのか「いろいろわけがあつてね?」

ロシア「へー、面白そうだね」

そこほの「やうだ、質問がある」

イタリア「何何~?」

なつじ「私達はなんでこの世界に来たの?」

苑子「あ、確かに気になる！！なんで私達はここに来たの？なんで私達は殺されそうになったの？」

ドイツ「…………それは…………」

枢・連「次回に続きます」

四人「…………」

その8 初対面では自己紹介（後書き）

主人公達が苦手な物

ほのか……虫、見た目がグロい食べ物、姉、B

さいほの……アイドル、魚介類

なつじ……自分よりはるかに大きい物、変態、子供

苑子……勉強、めんどくさい事、他は不明

感想・意見があつまましたらじゅんじゅん書きこちやつてください……

その9 説明は手短い（前書き）

まつせかー！……本気に決まつてるじゃん

べやなつじ

結構放置してました……

その9 説明は手短に

なつじ「さて、説明してもうひつか」

苑子「何気に時間がかかったね」

さこほの「まさか作者が一週間くらい小説を放置するとは」

ほのか「疲れてたんだってわ」

なつじ「どーでもいいから早く説明」

日本「はい。えーと……ど」今まで知っていますか?」

苑子「説明しないのかよ」

ロシア「知ってる」と説明しても時間＆文章の無駄だからね」

さいほの「小説ならではのこと」と言つた。確かに、私達が邪魔な存在とかその存在はあと8人いるとか……」んくらいまでは知ってるな

苑子「そんなん言つとつたつけ?」

ほのか「人の話ちゃんと聞く」と「つか

イギリス「そこまで知ってるんだな」

苑子「ふつ、す」」だらう……」

なつじ「お前知らなかつただろ」

日本「では説明します。世界は今、とても危険な状態に陥っています」

ほのか「なぬ!?」

さいほの「ぬ?」

日本「ある組織が世界征服を企んでいるのです。組織は簡単に世界を征服できると思っていました。しかし計画は思いどおりに進まなかつたのです」

なつじ「予算こえたから?」

ドイツ「それはない」

苑子「お腹空いたから?」

中国「それは絶対にないある」

イギリス「組織は原因を必死になつて探した。時間はかかったが組織は原因をつきとめた。」

フランス「それが君達四人と」

イタリア「俺達八人だよ」

さいほの「残りの八人はお前らだったのか!?」

アメリカ「そ、うなんだぞ！－！だから俺達は大事な話しあわないと
きは秘密基地に集まつてゐるんだぞ！」

ドイツ「お前らの様子も秘密基地で見ていた」

なつじ「見、たの－？」

さこみの「じやあお前らなんだな

枢・連「え？」

さこみの「私達が邪魔な存在だと氣付かれたのはお前らのせい、つ
てことだよなあ？」

さこみの周りにはどす黒いオーラが出ている

日本「え、いや、その…………」

忘れたかった現実

さくやああああああああ……

辺りには男達の悲痛な叫びが響いた……

ほのか「みんな大丈夫？」

なつじ「黒須はなんでやらなかつたの？」

フランスだけボコつた

苑子「確かに、なんで？」 フランスの顔をボコつた

ほのか「ヘタリアキャラだからね」

日本「で……では、説明の続きをさせていただきます……」

ほのか「ホントに大丈夫？？」

日本「大丈夫です……で、敵は8人の国の存在はみつけたのですが残りの4人の存在を見つけることはできなかつた」

中国「だから我達は敵よりも早くその4人を探したある。で、この前やつと見つけたある」

苑子「わっち達を？」

ロシア「うん だから異世界にいる君達をヒツヂに呼び出やうとしたんだ」

なつじ「なんでヒツヂの世界に？」

なつじはいつの間にかみかんを食べている
つまり話に飽きてきている

苑子はなつじからみかんを奪おうとしたがなつじに顔面を殴られて

半泣きになつた

ドイツ「12人全員そろわないと世界は救えないしな。それに敵に存在を知られてしまつたら危険だ」

イタリア「だから俺達は日本が作ったよくわかんないけどす」とい機械で君達をこつちの世界に連れて来ようとしたんだよ…」「

フランス「一回田は三人いたところで機械を発動させたんだが、どうも四人一緒にやなきゃ無理らしくてな。失敗しちまつたw」「

さいほの「じゃああの魔法陣はよくわかんないけどす」とい機械を発動したんだな」

ほのか「なんか機械の名前が『よくわかんないけどす』とい機械』で確定しちやつてるんだけど」

アメリカ「だからモニターで君達のこと監視してたんだぞ!」

さいほの「ほー、そのせいで私達の存在がばれて殺されかけたわけねー」

8人は一斉にそっぽを向いた

さいほの「おーい無視すんな

イギリス「い……以上で説明は終わりだ。次はお前らだ」

ほのか「私達?」

イギリス「なんでお前達は俺達の名前を知ってるんだ?」

なつじ「ああ、そこか」

苑子「そりや疑問に思つよねー」

ドイツ「どうなんだ?」

ほのか「うーんと……私達の世界にヘタリアっていつ漫画があるのね。」

なつじ「その漫画の登場人物が君達だよ」

8人「…………え?」

日本「といふことは…………あなたたちにとつてはこの世界は一次元とこづ」とですか?」

苑子「あ、確かにそうなるね」

イタリア「うーんなんかびっくりだあ…………」

れいほの「信じるのか?」

ドイツ「嘘だつたら名前を知らないだろ?」

日本「ここが一次元…………」

イギリス「日本がなんか感動してるぞ」

アメリカ「そりや嬉しいだらうね！…」

ロシア「うん。まあこれで説明は終わりだね」

中国「そつある……もつ夜遅いから休むある。」

なつじ そういえば私達、寝る場所ない

日本一に泊まるんですよ?」

苑子
.....
What?

「アーティストのためのアートセミナー」

ほのか
一回言わなくていいれ亦ケ

なんがお兄さん扱いひとくない

三一七

イギリス ははこ もも

「さすがムキムキ」「なつじ」「じやあ荷物は部屋に運んでくな」

苑子「失礼だなオイ」

ほのか「んじゃ、お先に失礼するわ。おやすみー」

日本「はい、ゆっくりお休みください」
バタン

四人は部屋を出ていった

イギリス「フランス、お前変なこと考えてないよな?」

フランス「えつ……? ななな何言つてるんだよ……」

イギリス「考えてるな……」

中国「完全に考えてるある」

日本「フランスさん」

フランス「ん?」

日本「彼女達に手を出したらどうなるかわかつてますよね?」

日本は刀を出し笑顔で微笑んでいる

全員『あ…………恐ろしい…………』

全員は日本を見て顔を青くしたといつ

なつじ「なつじ、一緒に寝よー。」

なつじ「は？お前は床で寝てる？」

苑子「うう、ひどい……」

ほのか「あ」

れこめの「ビした」

ほのかは何かを思い出したようにドライシが運んできた荷物をあわつ
はじめた

なつじ「何やつてんのクソメガネ？」

ほのか「黙れチビMEGANE」

なつじ「なんでイングリッシュ？」

苑子「なんかロボットみたいでかっこいいからじゃね？」

なつじ「チビとてる時点で全然強そりじゃなによ」

ほのか「あつた！」

さこめの「何が……あ、それ捨てた小刀じゃん」

なつじ「そんなに探して……大事な物なの？」

ほのか「うん。家の家宝」

苑子「家宝！！？」

さいほの「普通家宝を無断で学校に持つてきたり、放り投げたりし
ねーだろ」

ほのか「おじいちゃんが死ぬ前に必要な時に使いなさいって……」

なつじ「捨てるとは言ってないだろ」「

ほのか「あればノリというやつだよ」

わいほの 一ノリで家宝捨てる奴かしるか！！！」

ほのか、それより瞬しでここでケンガイッ!!

ほのかは、口は机のところがて緑の（税後は爆睡していた

死子はヤミ

死子はヘッドにねこJINがいた瞬間 爆睡たった

やうせの「お前は早すぎなんだよ……のび太くんが君は……」

なつじ「床で寝ろ」つつただろうが「

そこほの「え、あれ[冗談じやないの?]

なつじ「まつやかー……本氣に決まつてゐじやん」

れこせの「お前ホントひどいな」

れこせのとなつじはベッドに横たわつ、そのまま眠つた

その9 説明は手短い（後書き）

なんも書くことがないどす……

感想等がありましたらお願ひします！！

その10 私の家において（前書き）

ゴルバチョフ！！

「ゴルバチョフ！！？」

by 苑子・なつじ

久しぶりですなー

一日一回の日標はどうにいったんでしょうか……

その10 私の家において

や二四の「ふあーあ…………もつ朝か…………」

私は窓の外を見る。

とてもいい天気で太陽が眩しい

とりあえず私はアホ面で寝ている數崎とベッドから落ちてるなつじを起こす

苑子「ん……眠い……」

なつじ「なんか体全体が痛い…………」

「なぜか。」と云ふのであるが、これは、

苑・なーえつ!!?

数崎となつじはなんとか手を出した

苑子「あ、なんだかよくわかんないけど負けた……」

さいほの「残念だったな」と「うー」と黒須起いして

なつじ「なんかよくわかんないけど頑張つてー」

苑子「黒須ぐらこ普通に起いせんじやん…………おこクソ須、起き

……」

ド」「オツ……

な・わ「…………」

敷崎が黒須にぶたれただけで飛んだ……

敷崎をぶつた黒須はムクリと起き上がる

ほのか「…………朝からひつせーんだよ。黙つてひき

なつじ「…………（。。）」

そこほの「相変わらず寝起き悪いな…………」

黒須は寝起きがとても悪いのだった

ほのか「あ、あん？」

れいほの「読者にガンとばすな。」

苑子「おつせよーーー。」

中国「おー、おはよ…………してどうしたあるかー・傷だらけあるー。」

苑子「黒須にぶたれただけだよ」

イギリス「ぶたれただけでそんなに何力所も怪我するか?」

なつじ「飛んだからね」

フランス「どんだ!?」

ほのか「…………」

アメリカ「…………なんかほのかがめちゃくちゃ機嫌悪そうなんだぞ
…………」

ほのか「黙れメタボ」

アメリカ「…………」

アメリカは部屋のすみに体育座りしてしくしくと泣いている

ドンマイ

日本「大丈夫ですか?低血圧なんですね…………」

ほのか「…………ん」

なつじ「お、さすが日本だな。」

苑子「黒須の機嫌が少し直った」

日本「ほのかさん、朝食の用意手伝ってくれますか?」

ほのか「ん……」

イギリス「あ、じゃあ俺も……」

全員「お前は絶対に行くな」

イギリス「……」

じぱいしくして日本と黒須が作った朝食ができる

テーブルに乗せて手を合わせる

全員「いただきまーす!」

全員は朝食を食べはじめた

イタリア「あ、この玉玉焼きおいしいねーーー!」

日本「それはほのかさんが作つたんですよ」

ドイツ「ふむ、確かに美味しいな

ほのか「いやあ……」

そこほの「（完全に機嫌が直つてゐる……）」

ロシア「…………日本くんの塩鮭、なんかす”べ塩の量多くない？」

うわっ、確かに

日本「そうですか？普通だと細つのですが……」

ドイツ「没収だ」

日本「ああっ！…返して貰いたい。ドイツさん、お年寄りの幸せを奪
わないでください…！」

中国「日本、さすがにあれはダメある…………」

れこぼの「うん。やめた方がいいだ」

日本「ああ…………私は…………塩がなきや…………」

ほのか「ドンマイツ」

苑子「ゴルバチョフ！」

なつじ「ノーノルバチョフ！…？」

苑子「間違えた。」ちがひやがた……」

ほのか「ゴルバチョフとさわぎをはじめたら間違えんだよ
そこほの「まあ、おなかいっぽこだ」

日本「あ、少しいいですか?」

なつじ「うへ。」

日本「ほのかさん達、私の家に住みませんか?」

苑子「…………え?」

日本「あ、いやならいいんですけれど……ずっとここに住むってい
うのも上司に怒られてしまったんですよ」

ほのか「え、なんで?」

イタリア「……は世界会議場だからねー」

そこほの「や、そうだったのかー?」

ドイツ「ああ、上司に頼んで貸してもらつた

苑子「初耳なんだが

アメリカ「言つてなかつたからなー。」

なつじ「ウザいんだけどマイクのテンション。一回殴つてこいがこ

のメタボ」

アメリカ「やめてくれええ！！」

「イギリス」といかぐ、廻へていでゐるといふ。

さいほの「す.....住んでもると.....?」

中国「金を取られるあるー！」

ほ・さ・な――

苑子——なつ——なんだつてええええええ！！？」

なーじ- 菅子さんおのね、その反応うさー」

フランス「そういうことで長くはここで住んでちゃいけない、ってことだ。ということで俺の家に……」

日本「フランスさん」

日本は刀をフランスの首筋に当たた

日本、顔が恐すぎます

つーかそれ見て黒須がめちゃくちゃ興奮してんだけど

フランス「に、日本！！『冗談』『冗談！！刀おろして！』」

日本「フランスさん、次は冗談でも斬りますよ」

ほのか「日本マジかう」ええ……」

イタリア「あ、じゃあ俺の家に……」

ロシア「僕の家でもいいよ?」

イギリス「仕方ないから俺の家でも……」

日本「いえ、ぜひ私の家に……」

中国「私の家に来るよひこ……」

ドイツ「俺の家でも……」

アメリカ「ヒーローの家はすうまい!」く樂しそんだぞ……」

そこまでの「え……あ……」

全員「えいの家にするんだ……?」

ほのか「断固日本の家でつ」

そこほの「決断早すぎなんだ」

なつじ「どんだけ好きなんだよ」

苑子「日本に一票だね。なつじとれこせのせじあるへ。」

れこせの「私はえいでも」

なつじ「私も一。フランス以外ならつ
」

イギリス「フランス拒絶されたから脱落だな」

フランス「お兄さん悲しいつ！！」

苑子「うーん、どうしよう……」

さいほの「じゃあ私、黒須と一緒にいい」

なつじ「じやあ私も」

ドイツ「決まりだな」

イタリア「ヴェー……残念……」

ほのか「あ、じゃあたまにみんなの家に泊まりに行つていい?」

アメリカーもちろん、いいんだぞ！」

「田本一じま、行きましょうか」

セイリヤ

なつじ「苑子、お前荷物係な」

苑子「えつ！？」

ほのか「日本と一緒に住めるなんて……夢みたい……」

私達は重い荷物を持って日本の家へと向かった

その10 私の家において（後書き）

おまけ なつじと苑子

なつじ「あ、苑子ー」

苑子「何?」

なつじ「手、出して」

苑子「うい」

なつじ「プレゼント」

苑子「マジー? 何か…………な…………」

苑子の手には黒光りする……

苑子「す……スコーン……」

なつじ「ま、がんばれ」

苑子「いやいやいや……死んじゃうー。」これ食べたら死んじゃうー。」

なつじ「大好きなイギリスが作ったんだよ? 食べないの?」

苑子「うぐう……」

苑子は手の上有るスコーンを見る

はつきり言つて

食べたくない……

苑子「でも……大好きなイギリスのためならあああああっ……」

苑子はイギリスのスコーンを頬張つた

直後、苑子は地面に倒れた

苑子は一週間近く、下痢に悩まされたという

感想・意見、よろしくお願ひします（人、　、）

その一一 やつぱり和風な家は落ち着くわぁ（前書き）

ビ、ビビッてねーっしゅーーー！

かわいほの

なんかめっちゃ久しふりの投稿

話の展開が早すぎる＆イタリアとかが出でこない

その11 やつぱ和風な家は落ち着くわあ

前回までのあらすじつ！

苑子「なんだかんだで日本の家に住むことになりました！…」

さいほの「なんだかんだつて……」

苑子「日本一、まだ？」

日本「もう少しで着きますよ。よろしければ荷物をお持ちしますが
……」

ほのか「大丈夫大丈夫！…苑子、丈夫だから…！」

なつじ「ほら、さつさと歩け」

苑子「ふえー…」

さいほの「アイスうまい」

苑子「あ、アイスだ。いーなあー」

さいほの「あげねえからな」

苑子ケチ

日本「着きましたよ」

日本の家は和風でなんていうか……とても大きかった

なつじ「お邪魔しまーす」

さいほの「中も綺麗だな」

苑子「日本、つて感じがするつペ」

日本一じゃ案内しますね」

日本は私達を広い部屋に案内した

ほのかーおーこ

田本：お茶持ってきてるんでぐうすんでぐたわー

さいほの「お構いなく」

日本は部屋を出でいつた

苑子は、「うと床に寝転がり思いつくりへつりへだ

苑子「んー、ひるーい！…」

さこほの「はしたないぞ」
ほのか「…………あ！」

なつじ「どうしたクソ須」

ほのか「だまれもやし」

なつじ「もつ…………！？」

ほのか「それよつと、この家探検してみない？」

さこほの「探検？」

苑子「苑子は賛成でありますっーー！」

苑子は手を挙げた

なつじ「探検してどうすんのぞ」

ほのか「ちよつと確かめたいことがあつてねーーまあ暇だから行こ
うよーー！」

なつじ「んー、私は別にいいよ？」

さこほの「えつー勝手にするのはちよつと…………」

ほのか「大丈夫つーー日本には皆でトイレ行くつとへからー。」

わこぼの「んー……まあ暇だし……」

ほのか「よしつーではレッシゴーーー。」

日本「丸聞こえですよ」

四人「ぬおわあああああつーーー?」

部屋を出でていひと襖を開けたらそこには呆れ顔の日本が立っていた

ほのか「え、いや、その…………み、みんなでトイレ…………」

日本「だから丸聞こえでしたよ…………」

苑子「だ、ダメかなあ…………?」

日本「申し訳ありませんが許可は出来ませんね。しかもこの家には
悪霊がたくさんいるらしいので危険だそうです。イギリスさんいわ
く」

わこぼの「あのシンデレ眉毛のことは気にしないといいんじゃない
か?じゃあ日本と一緒にまわる、っていう条件でどうだ?」

日本「そうですねえ……まあそれなら大丈夫ですね。」

なつじ「やつたつーー。」

日本「私から離れなによつてじへださいね？」

ほのか「ほーい」

日本「ここのがお風呂場です」

セコロの「お風呂場って…………露天風呂じゃないか…………」

日本「露天風呂が好きなのです……」

ほのか「うひょーっ……でけえ……」

なつじ「黒須、叫び声がつぎー」

苑子「あ、河童だ」

ほ・せ・な・日『何が見えてるんだ…………』

さいほの「外見がでかいからわかつてたけど広いな、この家」

日本「イギリスさんとかの家はもっと大きいですよ」

苑子「今度忍びこんでみよ」

なつじ「せんでいい、せんでいい」

ほのか「日本、私お願いがあるんだけどー」

日本「はい? 何でしょう?」

ほのか「私の日本の部屋が見たいナー」

日本「ダメです」

ほのか「即答かいな」

日本「私の部屋はダメです。散らかっているので……」

ほのか「私そういうの別に気にしないからレッテルゴー……」

さいほの「えつ、ちよつ、わあああああ……」

私はさいほの手を握り廊下を走っていった

日本「あつ……」

苑子「今のうちにレッテルゴー……」

なつじ「いかねえよお前となんか

苑子「…………（ト・ト）」

苑子は私達の後をついていりうつなつじの手を握つたがなつじに振り払われてしまつたそな

ほのか「セーで、出てこい悪靈！」

さこほの「田的は悪靈だつたのか？」

ほのか「んなわけないよー私の田的はただ一つ！大好きな日本の部屋を見ることわつ」

大体部屋の中は想像できるけどね……

さこほのと歩いていくとなんかこの先行つたら死にますよ的なオーラが出てこる廊下があつた

さこほの「なあ、これ以上進むのはやめないか？一応人の家だし……」

ほのか「えー、でもこれから住む家だし大丈夫じゃね？」

さこほの「でも……」

れこせのせの先の廊下を見て青ざむてこる

せのか「…………せりせーん」

れこせの「な、なんだよ…………」

ほのか「れこせの、もしかして……

怖いんでしょ?」

私が言ひとひこせのは顔を赤くして

れこせの「は、はあつーへ向かってんの一?アホじやない?」

なんかめちゃくちがあつておわてこせの。

ぶつりやがけむる

ほのか「こせ、あひへがへせりふつよ」

れこせの「は、かんでねーしー今のがれとじー。」

ほのか「かんでぬ」

れこせの「か、かんでねーしー今のがれとじー。」

せのか「シンドーぬ

とにかく行ぐや、と私がたこせの手を握んだ引つ張ぬとれこせの

は絶対やーだーーーと私の手を振りほどけにして二つの

ひとつ、もう素が出てんな

苑子「ぐーろすー！！」

そんなとき、突如出てきた苑子は

「やがれ！」？」

さいほのの体を力こぶし押し
私とさいほのの体はそのまま前に進んだ

日本「あ」

私とさいほのは進んだ先にあつた深く暗い穴に落ちてしまつた

苑子「」

「うわー、めっちゃうれしい。おめでとう！」
喜んで抱き合った二人の顔が、ほんの少し離れていた。

日本「この先には穴があつたんですね」……メモメモ」

なつじ「しなくていいから。」

な・苑「つか知らなかつたんかい」

その一一 やつぱ和風な家は落ち着くわあ（後書き）

なんも書くじとがありませんわ

感想よろしくお願いします！

番外編 日本とは何か――心の壁（前書き）

この人の腹はブラックホールですかつ！？

by日本

ほのかと日本メインでほのぼの？

恋愛とかは全然意識してません

だつてこの小説はギャグ中心だからつ

こんじちは、日本です

今田はほのかさんと一緒に一人で最近できたおいしいと評判の「うどん屋」に来ています

ほかの三人も誘つたのですが用事があるみたいだったので一人できました

聞いたところほのかさんはうどんが大好きらしくとても楽しみなよう

とここのうどん屋につきました

ここのはうどん屋はお店の人にお文すればすぐその場で注文したもののが受け取れるというなんとも便利な店なのです

ほのか「うわあーーー日本、おいしそうだねーーー！」

日本「そうですね。好きな物を好きなだけ食べていいですよ。」

ほのか「えっ、悪いよー……だつて日本がお金出すんでしょ？」

日本「いえ、大丈夫です。」このお店で……

ほのか「やつかあ…………じゃあねー…………」

ほのかさんはおぼんを持ってどれにするか迷っています

まあほのかさんは女子ですし、やつとみんなに食べないはず……

ほのか「えーと、じゃあかけうどんの大でつーー！」

えつ？

日本「け、結構食べられるのですね」

ほのか「んー？普通だよーー！」

え、かけうどんの大って結構量が……

「はい、かけうどんの大だよつ

ほのか「あ、あじがどうぞこまーすー！」

「やつちの彼氏さんは何にするんだい？」

日本「えつーーー、違うますつーーー！」

ほのか「私は光栄だけどなあ

日本「はつー？」

「で、何にするんだい？」

田本「あ、じゃあかけうどんの並で……」

「あいよひ」

田本「ありがとひ」やむこめゆ

ほのかさんを見ると天ぷらが売つて居るコーナーでさつまこも天を
三つ……

み、三つ……？

田本「三つも食べんですか！？」

ほのか「え、うん。ダメ？」

田本「いや大丈夫ですが……そんなに食べて大丈夫なんですか？」

ほのか「全つ然」

田本「す……す」いですね……」

私はえび天を皿に乗せて先へ進む

レジでお金を払つてほのかさんその後を追いつ

ホント」の店「おもむす

ほのか「あ、日本。はい箸」

日本「ありがと」、「やるこまく」

ほのか「じゃいただもーあーーー！」

日本「いただきます」

ほのかわんぱくめわんと一本ずつビンを食べてくれ

日本「一気に食べないんですか？」

ほのか「だつて熱いしね…………」

ま、まさかの猫舌……

ほのかわんぱくにさつまにも天をサクサクと食べはじめる

実際にいい音です

私がずっと見てくるとほのかさんは私に気づいた

ほのか「日本もこも天食べるへー。」

日本「えつ、でも…………」

ほのか「ここのつ……細い体してんだからちゃんと食べなさい。」

！」

日本「むうう……」

ほのかさんはじきなり私の口にさつまにも天を突っ込みました

ほのか「ね？ おいしそうしょ？」

日本「…………はい」

確かにサクサクしていておいしかったです

うーん、結構並でも量が多いですね……

ほのか「うわあ、もうまつ……」

早う……

なんであんなに多い量をゆっくり食べてて10分近くで食べ終わる
んですか……

ほのか「うーん、かけうどんの大より大きいやつはないのかなあ
？」

まだ食えるとつ……？

この人の顔はブラックホールですか！？

ほのか「うーん…おいしかったあつ…！」

や、やつと食べ終わりました……

ほのか「日本、」

日本「は、はい」

ほのか「今日はありがとうねっ…！…楽しかったぜ…！」

ほのかさんは飛びつきりの笑顔を私に向けた

その笑顔を見て、また一人で来たいなあとと思いました

…………作文？

終
わり
つ

番外編　日本とほのか「ニコニコ」の壁（後書き）

おまけ

ほのか「たつだいまあーーー！」

わこほの「おかえり」

なつじ「どうだつたあ？」

ほのか「うふ、すくおこしかつたつーーー！」

苑子「ヨカツタネー」

ほのか「なんでカタ」「ト、あ、日本ー」

田本「はい？」

ほのか「おもか、食べていい？」

田本「…………」

今日学んだ」と、

ほのかさんのお腹はハンパない

おしまい；

感想・意見がありましたらよろしくお願いします！

その12 レッジRPGー? (前書き)

れいつらばー

b yなつじ

関係ありませんがアナログ放送終わっちゃいましたね
.....

少し寂しいです：

その12 レッジRPG!?

なつじ「なんだかんだで黒須とさいほのが死にました」

ほのか「死んでないよ!?」

れいほの「お前も説明テキトーだな」

なつじ「日本一、エリック君。苑子が黒須とさいほの殺しちゃった
あ」

苑子「殺しちらんよ!?」

なつじ「えー、だつて黒須とさいほの声が全然聞こえないしー」

苑子「…………エリック君の日本…………」

日本「私に聞かないでください…………泣きそつた顔でこっち見な
いでください」

なつじ「つか！」日本のかただろ？なんでここにでつかい穴があるつて」と知らなかつたんだ？」

田本「この先にはなんもないのあまり行かないし、イギリスさんここには近付くなと言われていたので……」

苑子「ラッキー やな」

なつじ「お前のせいで黒須とさほのは全然ラッキーじゃないけどな」

田本「菜摘さん、苑子さん結構気にしてるので傷を広げるよくなとはやめてください……」

なつじ「大丈夫っす。コイツあんま傷付かないタイプなんで」

苑子「う、うん！グスン、全然、グスン、気にしてないよ……」

田本「いやめちゃくちゃ 気にしてるじゃないですか」

苑子「グスン…………それよりさ、黒須とさほのビーフするへ」

なつじ「ほつといでよくね？」

苑子「ダメだろ……」

なつじ「えー、でもこの穴が深くなけりやはい上がれるんじゃね？」

苑子「えつ結構深そうだよ？黒須ううつ……そこほのあおつ……」

苑子は穴に向かつて叫んでみる

日本「返事……きませんね」

なつじ「死んだんじゃね？」

苑子「こいつひでえつ……」

なつじ「誰かさんのせいだ」

苑子はそっぽをむいた

日本「それより助けに行つた方がよろしくよつですね」

なつじ「うーん、めんどくさいけど行くか。骨だけは拾つてやる」

苑子「あれー？なんかいつのまにか死んだことになつてるよー？」

なつじ「まあ、問題はどうやっていくかだな」

苑子「え？この穴に飛び込めばいいじゃん」

なつじ「よし、お前最初に行け。そして死ね」

日本「この穴、見たところ結構深そうですねやみに飛び込むのは危険かと……」

「頭から落ちなきや大丈夫じやね？」

なつじ「ホントお前いつぺん死ね」

苑子一さつきから死ね死ねうるさいよ！しまぐよ！？」

なーじ・わざなーじ・みわざわ

死子あんた三、なめてんしゃれーそこ

なめられ
ハ力にじてんか

卷之三

二人ともやめてください！死子さんはキャラ崩壊してますよ！？」

苑子「いつもと変わんないと思うんだけどなー」

田本：夢ねりす毛ですか？今はやれど「ぬじゅな」こんですむ！？」「

なつじ 確かに、早くしないと骨が

苑子一だから勝手に殺すな；

日本一仕方なしてすね。危険ですか穴に飛び込みましょー」

死子

苑子「わっちー？」には一番背が小さいなつじから……」

なつじ「れつづらう」

苑子「やあやああああああああ」

苑子はなつじに背中を蹴られ暗い穴の中に落ちていった

なつじーさーて次は日本行く?』

田本一秀 お先に失礼します

なつじに突き落とされることを恐れた日本は自ら穴に落ちていった

一人になつたなつじは小さな木箱（こつ……骨壺！？）を持って穴に入つていった

苑子「ふごつ！！」

苑子は水の中に落ちた

どうやらあの穴の下は水らしい

苑子「つーか今回の語り、誰がやつてんだろ……」

作者です

いつもの語りが不在なので

苑子「へー そうなん…。で、こには…」

日本「うわあああああ…！」

苑子「ぶ（）」

バツシャーン！！

突然降ってきた日本は苑子の頭の上に落ちた

日本「げほつ…………み、水でしたか…………でもなんかいたよう……な
…………」

そういう日本の近くには苑子が浮いていた

日本「うわあああ！？そ、苑子さん！？大丈夫ですか！？」

浮かんでいる苑子は手を出し親指をつきあげてグッジョップをしてる

日本「いや意味わかりませんよ！－何がしたいんですかあなたは！」

苑子「ボケです」

日本「自分で言っちゃいましたよこの人！！」

苑子「いやー、それにしても死ぬかと思つた」

日本「真顔で言わいでください」

なつじ「なつじアタ――ツク――」

苑子「ひでぶつ――」

日本とコントをして『』いる苑子の上に満面の笑顔のなつじが落ちてきた

日本「苑子さああんつ――」

なつじ「あ、苑子いたの？ 邪魔だよ？」

日本「な、なんてひどいんですかあなたは・」

なつじ「さつきから思つてたんだけど日本、ツツツツの才能あるよ

「

日本「嬉しくないです。いつもツツツツんでくれるほのかさんとおほのせんがいなから……」

苑子「Wほのかいないと大変だね。結構」

なつじ「チツ、生きてたか

苑子「ひでえ――」

日本「さて、とりあえず水から上がりますか。今氣づいたんですけど

この水、地下に流れてる汚い水です」

日本の言葉を聞いて、苑子となつじは硬直した

なつじ「うわわくせつ」

苑子「くしゃい」

日本「仕方ありませんよ。早く一人を見つけてお風呂に入りたいです……」

苑子「…………ん? 日本、何あれ」

苑子が指差した方を見ると……

なつじ「…………何あれ」

日本「まさかの悪靈じゃないですか?」

悪靈はじつと三人を見ている

日本「菜摘さん、苑子さん」

なつじ「ん?」

日本「これからやる」と、わかつてますか?」

苑子「うん。じゃ今から3秒後にこくみ?」

なつじ「1、2、3……」

な・そ・日「逃げるが勝ちいいいい!—!—!」

三人は一斉に駆け出した

ほのか「そこほの一、お腹空いたよー」

さいほの「仕方ないだろ。だいたいこんなことになつたのは誰のせいだと思つてるんだ」

ほのか「苑子」

さいほの「…………もう一えばそつだつた」

私達は暗い道?に座り込んでいた

れつき汚い水に落ちたせいで服は臭いし……

お腹は空いたし……

ほのか「どうしたの。」そのまま机から出られなくて餓死してそのまま骨だけに……」

そこほの「ネガティブだなおい……諦めんなー。どこかに出口があるかもしれないだろー。ほら、立て」

ほのか「やだ疲れた。おんぶ」

そこほの「うう……」

そこほのは私をおぶった

そこほの「……黒須」

ほのか「ん?」

そこほの「太った?」

ほのか「黙れ。首切られたくなかったらな」

私は手に持つてた小刀の刃をあてる

そこほの「はい」

そこほのせ歩きはじめる

そこほの「無理。重い、自分で歩いて」

ほのか「お前後で覚えてるよ」

私は仕方なくさこほのから降りて歩く

さこほの「…………ん？」

ほのか「どうしたの？」

さこほの「あれ、何だろ」

さこほのが見ている方を見るとなんか黒くてモヤモヤしてる大きい
物体がいた

ほのか「うわっキモ。まさか悪霊？」

さこほの「やうやくはないか？」

黒くてモヤモヤした物体は赤く光る瞳を私達に向けた

さこほの「…………なんかやばくないか？」

ほのか「え、そう？」

黒くてモヤモヤした物体はいきなり私達に向かつて突進してきた

その12 レッツRPGー? (後書き)

主人公達のくせ

ほのか……爪を噛む、気がつけば笑ってる

さこほの……気がつけばミスチルの話

なつじ……パニックになるとその場でぐるぐる回る、よく口ケル

苑子……いつもの表情が笑顔、暇だと寝る

感想・意見お願いします

ルのー三 もう逃がすが勝ち（前編）

くせだよーー

直せ今すぐーー！

ヶ月のか・そこまでの

夏休みだからなるべく早く投稿したかったんですが……

部活とかの影響で遅れてしまいました；

でもそれかわりにしてです！

その13 やつぱり逃げるが勝ち

なつじ「なんだかんだで黒須といほの骨を拾いに行くべく私と日本とカスは穴に飛び込むのだった……」

ほ・さ「勝手に殺すな！！」

苑子「カツ……………カス！！？」

こんには、黒須です。

え？なぜ叫び声を上げてるかつて？

人間、叫びたい時だってありますよ

すいません、嘘です

まあなんで叫んだのかってことじゃねーからです

ん? もうひとつ組かく? めんどくさいなー……

声が出るからです

え、なになに? あんまりわけがへりとしませんでってへー。それでなん
かいやせんぜ。本題のことを書つたままで

そこほの「黒須、何ぶつぶつ書つてんの?」

ほのか「え、そこほの私の心の中読んだー? テレパシー! ?」

そこほの「思いつきり言葉にしてたが。今は逃げる」と集中して死にたくなかつたらな

はい、私達は今逃げています

え、なんでかつて?

前の話を見りアホ。

そこほの「おい、読者減らす気か

ほのか「どうせ誰も見てねーだろ。あれ?」

さいほの「どうした?」

ほのか「追い掛けて来てないよ？」

後ろを見るといつも“じい勢いで追い掛けて来ていた悪霊はいなかつた

わこの一歩が危機一髪だ。やがて「かう用ゐる」

はのか・おひ・わで五口とひがな・ひ

私が足を踏み出したその時だ

エホエホエホン---

ほのか「（。。）！」「

さいほの「（ノ。）ノ。」

私とさいほの前にいきなりさしきの悪霊が現れた

赤い光を放つ瞳が私達を見る

モードの「な」

私は無意識にそこほの腕を掴み全速力で駆け出していた

ほのか「ちゅっ……なんでいるんだよおおおーーまるでホラーじゃねーかーー！」

そこほの「知らねーよーーつかなんでお前は逃げるとき必ず私の腕を握るんだよーーしかもめっちゃ強い力でーー！」

ほのか「くせだよーー！」

そこほの「直せ今すぐーー！」

ほのか「とつあえず走れええええーー！」

私達は迷路みたいな地下を全速力で走る

私達が角を曲がった瞬間、目の前に悪霊が現れた

そこほの「うわあつーー！来たー！」

ほのか「も、戻ろうー！」

私とさいほのはじターンしてまた走り出した

が、地面が濡れていたから私はすべった

そこほの「お前ダセヒな」

ほのか「ひでえつ！助けるよーほら、今にも襲い掛かってきたそだ
よー！」

れこの「やがて、君のことが忘れないよって、やがて…。」

私は走りうとしたさいほの足を掴み転ばした

ほのか「お前も道連れじゃ」

さいほの「なつ、離せええええええ！」

ほのか「誰が離すか！！私が死んでお前が生きてるなんて納得でき
るか！！」

やこほの「なんだよその理由……いいから離せ……は・な・せ」

ほのか「道連れ言つとるやうー」

私達が「じじや」「ぢぢや」言ひてゐる間に悪靈は黒くモヤモヤした手と思われるものを私達の間に置いてくる

さいほの「わ、わー死ぬ！たぶん死ぬ！絶対死ぬ！」

ほのか「は、やめよ！」

さいほの「お前も死ぬだろ」

悪霊の手が私の体に触れようとした瞬間

悪靈の前に突然人が現れて銀色に光る武器で悪靈を真っ一いつに斬った

悪靈は斬つた所から消えていった

ほのか「…………く？」

わいせつの「…………ほ？」

日本「おー人共、大丈夫ですか？」

そこに立っていたのは片手に刀を持つた日本だつた

さいほの「に、日本！？ なんで！」」「…………ー？」

なつじ「どつかの誰かさんがほのかとさいほのを落としかやつたら追つてきたんだよ？」

ほのか「なつじ……と苑子」

苑子「え、何その付け加えられた感じ」

日本「さて、全員揃いましたしここから出ましょうか

ほのか「え、でもどつかって？」

日本「歩き回つてれば着きますよ、わひと」

わこぼの「曖昧だな……」

苑子「隊長！また悪靈が来ました！」

なつじ「隊長誰だよ」

日本「やはりそつ簡単には出られませんか……」

日本はまた刀を構える

うん、カッコイイ

なつじ「顔がキモいよ」

ほのか「黙つてよつか」

日本は目の前に来た悪靈を簡単に切り落つた

わこぼの「強つ！でも進むたびに襲われちゃ大変だよな」

日本「仕方ありませんね。みなさん、走りますよ」

苑子「え、日本は大丈夫なの？」

日本「爺だつてやるときはやりますよ」

日本はこつこつと笑う

ほのか「うわっ、また来た……」

田本「行きましたよーー。」

なつじ「おーいえー」

私達は床がぬけているのですべりながら矢をつけながら走った

全速力で走ったが悪靈はどんどん私達との距離を縮めている

そこまでの「うつせ…………追いつかれるぞーー。」

苑子「え、えうあんのぞ日本ーー。」

なつじ「なんか除靈とか出来ないのーー。」

田本「あ、その手があつましたかーー。」

ほのか「できるんかー」

田本「はー、イギリスさんから一応除靈するためのethodなどは教わっています。」

なつじ「イギリス、出番ねーくせに陰で活躍してるね」

ほのかの「よし、じゃあ今すぐやれ」

日本「唐突ですね。やりたいのはやまやまのですが除霊をするにはかなりの時間と広い場所が必要です」
ほのか「それは難しいね……」

苑子「え、普通にできんじやん」

なつじ「バカ。お前はホントにバカ。キングオブバカ！」

苑子「そんなにバカバカ言わないでよー！……傷つくんだけど……」

さいほの「いや普通にバカだろ。この状況で出来ると思つか？」

苑子「うん、思つ」

ほのか「こいつバカじゃない、大バカだ」

日本「でも除霊することによってこの地下にいる全部の悪霊を掃うことができると思われます」

なつじ「な、なんて便利なんざまじょう……」

さいほの「どつかの主婦か、君は」

ほのか「あ、日本……なんか扉見つけたよ……」

苑子「で、出口！？」

日本「とりあえず中に入りましょーう……」

日本が扉を開け私達は中に入り込んですぐに扉を閉めて鍵もかける

ほのか「いじは……部屋？」

中は地下にまかわらす普通のつす暗い部屋だった

れいほの「地下なのに部屋？日本の家って複雑怪奇だな」

日本「私にとつては欧米文化の方が複雑怪奇なのですが……」

苑子「そんな」となり日本、いじなりでもあるんじゃない？除靈

なつじ「あ、れつれまでバカだった苑子がまともな意見を……
！？」

苑子「そろそろ怒るよ？」

日本「確かにまともな意見ですね……。やつてみますか？」

苑子「こ、日本まで……。」

日本はお札のようなものをとりだした

そしてぶつぶつと呪文のようなものを囁こさじめる

ドンドンシ——！

セコボの「ちつ、来たか！…」

苑子「わわわ、ジツシヨウ日本…」

日本「…………」

日本は苑子の言葉を無視した

苑子「シカトつすか！？」

なつじ「違うよ大バカ野郎…日本、集中してるからお前の声なんて聞こえないんだよ！」

確かに日本は目を閉じてずっと呪文を唱えている
かなり集中しているようだ

苑子「…………よしつ！」

セコボの「敷崎？」

苑子「日本ががんばってるんだから、ちゃんとそれに集中できるよう私達もがんばりますか？」

なつじ「苑子…………お前、ただのバカだと思つてたがちゃんと頭も使えるみたいだな」

苑子「ふふつ、私だつて本氣だせばこんなの朝飯前だよ」

さいほの「私も同感だぞ、數崎」

ほのか「私もつ」

苑子を先頭に私達は扉の前に並ぶ

私は小刀、さいほのははさみ、なつじはのじきり（なんで持つてんの！？）
（さいほの）、苑子は彫刻刀を手に持ち準備を整える

苑子がドアノブに手をかけ私達に田で合図をする

全員の了解を得た苑子は力いっぱいドアノブを回した

そして壊した

「 「 「 「 「 「 」

苑子「えへつ、やつちつた」

ほ・わ・な「お前ホントにいつべん死ねえええ……」

苑子、リンチ状態

苑子「わよ、やめ………… もやあああああ……」

～三分後～

苑子「ぐすん、ひどいよ………… 女の子の顔をなぐるなんて…………」

なつじ「残念ながら私、苑子を女だと思つてないから」

苑子「私の扱い、ホントにひどくない？」

わこほの「氣のせに氣のせ………… うわあつー!?」

ほのか「どうしたのさいほの?」

わこほの「あ、あれ…………」

わこほのは壁を指差す

わらひと見たらわからなこがよく見ると黒くモヤモヤした……

ほのか「つて悪靈ー？」

なつじ「この部屋に入らうとしたみたいだね、さすが悪靈」

ほのか「感心してゐ場合ですかー？」

苑子「日本ー。」

日本はまだ呪文を唱えていた

わらひも「たぶんもう少しで除靈できるかもしれないー私達もでき
てこられるかきつてゐるわーー。」

わこまの「ははあで壁からでてきている悪靈の手を刺す

悪靈は手を激しく動かしてほのをはらひ

わこまのはその勢いで壁にたたきつけられた

わこまの「ぐーー。」

ほのか「わこまのーー。」

そこはのせじめりへは動けそうしない

そこはのせじめりへは顔を歪める

それなのに悪靈はあっさつと部屋の中に入ってきた
苑子「えええつー? なんてあつたつとーー!」

悪靈はとても素早い動きで日本に突進していった

なつじ「日本つーー!」

しかし悪靈が日本に攻撃する瞬間、日本から凄まじい風が吹き暗い
部屋が一気に明るくなつた

悪靈はそのせいで日本に近寄れなくなつてゐる

日本「去れ、悪じき靈達よ…………」

日本が呟いた瞬間、目の前にいた悪靈は消え渡り一面を白い光りが

包み込んだ

ほのか「ほえ？」

光りが消えたと思つて、やうやくわざと変わらない暗い部屋だった

部屋の真ん中には日本が立つてゐる

私の近くではやうやくの達もこる

日本「ふう、除霊完了」です

苑子「マジかー？ すげえー！」

やうやくの「じゃあもう出でないんだな

日本「はー、もうこないはずです」

なつじ「よかつたー……」

ほのか「さすが日本だねー！」

日本「あつがヒーリー」れこめす。た、早へ家こもどりましちゃつか」

日本はドアの方に歩いていや、ドアノブを握りのりとする

日本「…………え?」

なつじ「どしたの日本?」

日本「ドアノブが…………あつません」

四人「…………あ」

セツ、セツの苑子のばか力でドアノブは壊れてしまったのだ

つまり

「…………出られない…………」

いろんな意味でピンチなのだった

やこ姫の「や、やつと連れられた……」

ほのか「なにもかも全部苑子のせいだよ」

苑子「え…へたりやつよー…」

なつじ「こや、お前だら」

日本「出口がすぐ見つかってよかったですね……」

私達はなんだかんだあの部屋を出て、そしてまたなんだかんだで出口を見つけて家に戻って来れたのだ

日本「みなさん、お先にお風呂びりや。私は着替えてきます」

ほのか「わ、あつがとう…」

苑子「行ひなつじ…」

なつじ「こや」

苑子「え!?

やこ姫の「早く行け」

四人は風呂場に走つていった

さいほの「…………なんだこれは」

苑子「いい湯だーなー」

なつじ「古つ」

ほのか「気持ちいいー！」

さいほの「広いな。泳げるよ」

ほのか「泳ぐな」

日本『着替え、置いときますねーーー』

なつじ「あ、はーいー！」

苑子「そろそろ出よつか

ほのか「え？ 何が？」

先に出たさいほのが置いてあつた着替えを見て言つた

なつじ「何つて…………うわっ！」

なつじもそれを見てすぐ嫌な顔をした

苑子「何々ー？…………え」

あの苑子まで驚いている

なんだか知りたかったので三人の所に行つた

ほのか「…………ええ……」

そして驚いた

日本がわつき着替えと行つて置いてつたものは

四人「メイド服…………？」

あの人は私達にコスプレさせるらしい.....

私達、日本の家でうまくやつてけるかなあ.....

やのへこ やつぱり逃げるが勝ち（後輩や）

おまけ ほのかとなつじ

ほのか「やつぱり逃げなつじ、なんかいつのまに私のこと世のかつて呼ぶようになったよね?なんで?確かに前まで黒須つづ呼んでたよね?」

なつじ「んー?成り行きだよ?」

ほのか「な、成り行きだよ?」

せこぼの「じゃ私も名前呼びこして!」

なつじ「ほのかとかふるかわいダメ」

せこぼの「…………」

おまけがほのか

あだ名を変えてもらえないかわいそつなせこぼのであった

感想・意見があつましたらよろしくお願ひします!

質問とかがあつたらどんどん聞いてくださいー。

その14 夏は暑いのや（前編）

くたばれHロジジ、いいいいー！

びよほのか、さこほの、なつじ、苑子

夏休み編です！

一応、長編の予定です

その14 夏は暑いのや

私達は日本の家でダラダラしていた

今は夏でとても暑いから扇風機をまわしてそれぞれ好きなことをやつていてる

しかしそんな平和な空間はほどなくしてある人物にぶつ壊されるのであつた

アメリカ「みんなーつ！…夏なんだぞーつ！…」

なつじ「知ってるよ消え失せろカス」

アメリカ「…………」

苑子「なつじの毒舌が夏になつてパワーアップしてるみたい」

ほのか「暑さのせいでイライラしてるからね」

さこほの「今敵にまわすのは危険だね」

なつじのパワーアップした毒舌をあびせられたアメリカは太陽の下で立ち去ります

日本「みなさんスイカ切つてきた……ってアメリカさん？」

日本は自分の庭で立ちぬくしていの汗ダラダラのアメリカを見て驚く

苑子「スイカスイカー」

苑子は日本が持っている皿の上からスイカを一つとつてかぶりつく

日本「ア、アメリカさん? 何やつてるんですかそんなどいろで……」

…

アメリカ「ああ、日本…………俺つて死んだ方がいいのかな…………？」

日本「何があつたんですかアメリカさああん！？」

ほのか「なつじがやつたんだよ」

日本「なつじ」「違つじ、なつじとお話をただけだし

なここの「お話をただけであんなのになるか?」

なつじ「なるなる」

苑子「ならねーだろ」

日本「と、とにかく中に入つてください。」

アメリカ「いいんだ……」そのまま立ち続けて倒れて死んじゃつて
も俺は別にいいんだ……」

日本「菜摘さん、あなたホント何したんですか。アメリカさん精神的に大ダメージくらつちゃつてますよ」

苑子「イギリスのスコーンなみに攻撃力がぱねえ」

なつじ「だからホントにちょっとからかつただけだってば」

さいほの「もういいから引きずつて中いれるぞ」

ほのか「うん、よいしょ」

苑子「汗ダラダラじやんつ！！ぬれてるよ！」

さいほの「我慢しろ」

アメリカは私と苑子が無事、回収しました

アメリカ「うはー、涼しいんだぞーーー！」

ほのか「なんでクーラーつけてんの? 節電……」

日本「その話はなしの方向で……」

苑子「東北、早く復興できるといいねー…………」

さいほの「そうだな、原発もなんとかしてほしいな

なつじ「というわけで私達は東北地方の方々を心から応援しています。」

ほのか「クーラーがんがんの部屋にいる人達が言えることじゃないよね」

日本「やつこえればアメリカさんは何故私の家に？」

アメリカ「スイカうまうま」

日本「アメリカさん、話聞いてます？」

アメリカ「スイカうまうま」

日本「…………… そろそろ斬りますよ？」

アメリカ「でや、今は夏真っ盛りじゃないか！」

ほのか「うわ、めっちゃ早口なんだけど！ 聞き取れなかつたんだけどー！」

なつじ「スイカの種がめっちゃ飛んできたわ。苑子、アメリカから飛んできた種もう受けてるし」

さいほの「もう一回言つてくれない？」

アメリカ「こんな暑い中だとイライラして頭もおかしくなつちゃうだろー？」

苑子「ダメだコイツ人の話聞いてねえ」

ほのか「私のイラマの原因、ほとんどアメリカなんだけど」

さ・な・苑・田「同感」

アメリカ「だからみんなで夏らしい……」

なつじ「ゆうべつしゃべんなかつたらハンバーガー没収な」

アメリカ「だ〜か〜ら〜み〜ん〜な〜で〜……」

さいほの「ねえコイツ殴つていい?」

アメリカ「だ、か、ら、み、ん、な、で」

苑子「うん、次ふざけたらぶつ飛ばすから」

アメリカ「で、だからみんなで夏らしい」とをじょひじやないか!」

田本「やつとまとも!」……

ほのか「最初からそういうよ」

アメリカ「つてことでみんなで海に行くんだぞ!」

そこほの「あー、海か!……」

全員「つて、海!?」

アメリカ「うん、海。輝く海なんだぞ」

なつじ「それはわかるけどさ、なんで海? ほかにも夏りしことあるつしょ。祭とか」

アメリカ「だつてフランスが『夏は海しかねーだろー』って……」

さこまの「あいついつか殺す」

苑子「絶対なんかたぐらんでるよね」

ほのか「ありえる。でも海、いいかもね!」
さ・な・そ「え」

ほのか「だつて家でダラダラするよりさ、みんなで遊びに行つた方が楽しいと思わない?」

苑子「まーそうだけど……」

さこまの「海に行く」と反対はしていながら私達、水着持つてないぞ?」

ほのか「…………あ

なつじ「でも荷物の中に学校のスクール水着が入つてたよ

ほのか「ま、それでいつか

フランス「断固反対いいいいいいいい」

日本「わあつ！？」

やこの「お湯がかかる日もあんだけよ」

フランスはいきなり庭にある池から飛び出してきた

なーじーーかなんて格好してんだよお前!!」「

しかも全裸で

ほのか「うわっ！！お前そんなに自分の肌を他人に見せたいのかよ
！！変態だ、こいつ変態だよ！！！」

死子！おまわりをああん！！」には変な
しゃ変態かしめます……

フランス「警察呼ばないでよー。」

日本「なんでフランスさん全裸なんですか」

「フランス - お尻せんスタイルたかじかな」

日本で一度病院に行かれた方がよしと思します」

アメリカ、日本、いつものハッ橋どろかいでをやみてるんだぞ」

フランス「とにかく、お兄さんはスクール水着は断固反対です！！」

さいほの「なんでだよ」

フランス「だつてスクール水着とかはポロリとかが……」

ほ・さ・な・苑「くたばれエロジジいいいい！……」

フランス「ぐはっ！……」

フランスは四人に撃退されて、池に沈められたとさ

続く

ルの14 夏は暑いのや (後編)

～おまけ～

イタリア「…………デイジ」

デイジ「なんだ?」

イタリア「あんまり言いたくないんだだけビ……」

デイジ「…………」

イタリア「…………出番欲しこよーー。」

デイジ「それはみんなもだ」

イギリス「なんでフランスが出て俺は出ないんだよばかあつ……」

ロシド「フランスぐく、あれ出たつてこえるの? 最後死んでたよね?[?]」

中国「フランスはああこいつキャラある。オチ担当のキャラある」

とこのわけでお番のなこキャラの雑談でした

その15 水着選びは大事（前書き）

釘バットが一番しつくらくる

b yなつじ

いやあ……夏ですねえ…

宿題…………終わんねえよ

その15 水着選びは大事

アメリカ「でも、スクール水着で海つて恥ずかしくないかい？」

さいほの「んーまあ確かに……」

なつじ「まあ小学校の水着みたいに名前が堂々と書いてないのはいいけどね」

苑子「でもぶつちやけ地味だよね」

ほのか「ちう、めんどくさいけど買いに行くか」

私は立ち上がり、池に浮かんでいる死体を「死んでないよ！？」（フランス）「見る

ほのか「アメリカ」

アメリカ「ん? なんだい?」

ほのか「フランスを鎌でぐるぐる巻きにしてあと」のお清めの札を
フランスに張つて庭にある蔵の奥深くにある古い箱にいれてしま
り鍵をかけてきて

アメリカ「任せるんだぞ！！」

苑子「了解しちゃうのかよー！」

アメリカは池に浮かんでる死体とこの辺のフランクスを抱き藏へと走つて行つた

ほのか「よしひ、邪魔者もこなくなつた」とだし置こうと「行くか……」

れこ姉の「こなくなつたつてこいつが封じたよね」

ほのか「あこつせ封印あるぐもなんだよ。わかつてくれ」

なつじ「封印つーか完全に死ぬだろ」

ほのか「氣にしない、氣にしない」

田本「氣にしないでや……」

ほのか「ヤー、行ぐルー リード田本、マリード ブラウント」

田本「当たり前のよひでやわないでくだやこ……」

苑子「うーん、やつはショッピングモールとか涼しーねー」

私達はなんだかんだで近くの大きいショッピングモールに到着し、水着売場に来ている

なつじ「や、やつやと選んで帰つぞ」

なつじは大人の水着を見始める

苑子「あれ? なつじは子供用の水着売場を見るべきなんじゃない?」

なつじ「ぶつ殺すぞ」

ほのか「さいほの、これ似合つんじゃない?」

そう言つて私はさいほのに水色のフリフリワンピースの水着を見せる
さいほの「えー……ちょっと子供みたいじゃないか? なつじならま
だしも……」

なつじ「みんなそろつて殺されたいの?」

釘バットを握るなつじ

日本「菜摘さん、釘バットって古い?」

なつじ「釘バットが一番しつくりくる」

日本「答えになつてませんよ……」

アメリカ「お腹空いたんだぞ……」

ほのか「アメリカは水着買わないの?」

私はお腹が空いて少し元気がないアメリカに聞く

アメリカ「俺かい？俺は去年とかので大丈夫……」

「なーにが大丈夫だ」

苑子「わ、イギリスじゃん」

アメリカの隣には久々の登場、ツンデレ眉毛のイギリスがいた

イギリス「ツンデレ眉毛ってなんだばかあ！…」

ほのか「語りに文句つけないでよー。私あんま国語得意じゃないから…」

イギリス「苦手とか得意じゃないの問題じやないだろー。」

なつじ「なんでいんのイギリス？」

イギリス「水着を買いにな……つかお前、物騒なもん持つてんなあ……」

なつじが持つ釘バットに軽く引くイギリス

さいほの「太つて入らなくなつたか？」

イギリス「ちげーよ、もつそろそろ変えた方がいいと思つただけだ。んでアメリカ、お前去年の水着が着れると思つてんじゃねーぞ……」

アメリカ「ど、どうこいつ」とだい？

イギリス「そのまんまの意味だ。お前去年と比べて結構太つただろ」

アメリカ「そういえばお腹が出てきたよつた……」

アメリカは自分の腹を見て少し不安そうに言った

イギリス「だから買い替えた方がいいぞ」

アメリカ「イギリスのおじりがいいんだぞ」

イギリス「誰がおじるかバカ」

イギリスとアメリカは二人で男性用の水着売場に歩いていった

ほのか「日本は買わなくて大丈夫?」

日本「私は泳がないので……」

さいほの「えー、なんでだよー。せっかくの海なんだから泳げりうぜ
つ」

なつじ「や、さいほのがめずらしく マークを……」

苑子「明日は雪が降るね」

さいほの「そんなにダメか?ダメなのか?」

さいほのは少し落ち込む

ほのか「みんなで泳いだ方が楽しいでしょ?ほら、買った買った!」

私は日本の背中をおす

日本「え、でも今貯めてるお金は夏口//のための…………」

ほのか「はよ行け」

日本「…………はい」

日本は渋々アメリカ達の所へ歩いていった

しつかし水着種類いつぱいあんなあ…………
迷う…………

なつじ「水着、ワンピース系のやつで大丈夫だよね?」

苑子「うん、まあそりゃだよね」

アメリカ「買つてきたんだぞーーー!」

さこほの「早つ……」

アメリカが袋を持って笑顔で帰ってきた

ほのか「イギリスト日本は?」

アメリカ「まだ買つてなかつたから置いてきたんだぞーーー!」

ほのか「ほー」

なつじ「苑子、これいいと思わない?」

苑子「あ、いいねーーー!それでいいんじゃない?」

なつじ「やーだね。置いてくれる」

なつじは黄色のワンピースの水着を持ってレジへと走る

しかしそのなつじの前に

フランス「ワンピース断固反対いいいい！」
なつじ「わやあああああああ！」

変態が現れた

や二世の「なんだお前いんだよ、ちやんと勘定したはずじゃ……

イギリス「お前ら、コイツ封印したのか…………」

苑子「わあお、いつの間に」

いきなり現れたイギリス＆日本。

「おー、買物の邪魔にならない野次だ」

フランス「今、お兄さんす」へ傷ついたんだけど.....」

ちょっと涙目になつたフランス

アメリカ「それにしてよく抜け出せたねー！！！」

フランス「お兄さんに出来ない」とはないからね」「

ほのか「次はもつと頑丈にするか」

フランス「やめてやめて…！」

そこほの「お前ワノペース断固反対つてじやあドキニ」にしゅつてか
？」

フランス「その通り！！」

なつじ「やだよー、私ワンピースがいい」

フランスでダメだあつ！！ワンピースもボロリがない.....

ほ・さ・な・そーくたばれええええええ!!

フランスはまた四人にボコボコにされたとさ

その15 水着選びは大事（後書き）

～おまけ～

中国「なんであへんに出番があつて我にはないあるかあああああ
！！」

ドイツ「落ち着け中国！！」

ロシア「中国くん、君だけじゃないんだよ？出番がないのは」

イタリア「ヴン……」

またまた出番がない人のトーク

イギリスは無事脱出できたようですが

その16 目的地まで行く時が一番楽しい（前書き）

なんか……………周りがすゞく綺麗に見える……………!!

bソイギリス

気付いたら8月の後半になっていた……………

し、宿題……………！

その16 目的地まで行く時が一番楽しい

さこほの「もつ集合時間だぞ……」

ほのか「苑子が起きないから……」

なつじ「やうだよー」

苑子「だつて眠かったんだもん……」

日本「は、はあ……はあ……」

私達は走っていた。

本当は8時に駅に集合（どこの？）といふ質問はなしで（のはず）だったのだが、家を出たのは集合時間の3分前。家から駅まで行くのにかかる時間は約15分。つまり完ぺきに間に合わないのだ。

遅刻したら絶対ドイツに怒られるよ……

ほのか「つ、疲れた……」

さこほの「朝はん食べないし……」

苑子「なんでこんなこと……」

なつじ「お前のせいだろ」

日本「ゼベ……はあ……」

てこうか日本わしきからしゃべってないよね?しゃべってるみたいになつてゐるけど」「の中、息の音だよね?」

そこほの「あ、駅がみえてきた!—!」

なつじ「家から駅まで走れば8分かけひとつ」と

苑子「メモせんでええわ」

ほのか「とにかく走るぞーっ!—!」

私達は体力に限界が近付いている日本の手を引き、駅まで全速力で走つて行つた。

イタリア「ヴハ……来ないね……」

イタリアは駅前に立つてゐる銅像の台に座つて心配そうに呟く

ドイツ「ああ……もつ集合時間から5分たつてこるのでが……」

ドイツも腕時計を見て言つ

イギリス「寝坊か?」

アメリカ「俺は楽しみで眠れなかつたんだぞー！」

フランス「ホントお前は子供だなあ」

中国「それよりフランス、お前なんでそんなに傷だらけあるか」

ロシア「中国くん、それはふれちゃいけない所だよ。」

フランス「大丈夫さー！ いざれ消えるのさ」

イギリス「漫画とかだといつの間に傷とかが治つてるよな」

アメリカ「お決まりなんだぞー！」

イタリア「ウー……？ あ、あれ日本達じや……」

イタリアは指を差して問う

イタリアが指差した方向を見ると全速力で走る少女四人とその少女達に腕を引かれながら苦しそうだが必死に走っている青年がいた

中国「ほのか達ある！」

ロシア「あの五人、かなり汗だく……」

ほのか「ゼエ…………遅れて…………はあ……『メ…ゲホツ』『ホツ…』」

ドイツ「と、とつあえず息を整えてから話せー。」

私達はとつあえず深呼吸をする

ある程度、落ち着いたので私は話しあじめた
(日本はまだつらそうだが)

ほのか「いやあ遅れてゴメン。苑子が昨日の夜に遅くまでアニメ見てたから朝起きれなくて私達四人で必死に苑子を起こしたんだけど苑子がやつと起きたのは7時50分。そこから準備やらなんやかんやをして、家を出たのが7時57分なんですぜ、旦那」

中国「つまり原因は苑子あるね?」

苑子「録画をする機械が壊れちゃつてリアルタイムで見るしかなかつたんだよ…………」

ほのか「私も見たかったよ…………夏 友人帳。どーだった?」

苑子「お腹が痛くてトイレずっと入つてたら見過(こ)した」

ほのか「意味ねーじゃん。つかどんだけトイレいたんだよ」

ドイツ「まあ行くか」

なつじ「あれ? 説教とかしないの? よかつ…………」

ドイツ「してほしいか?」

「ヤコと笑うドイツ

不気味すがめすぜ隊長

なつじ「滅相もいわこませと」

ドーナツドイツになつじも恐れてしまつたのだった

そして私達は切符を買ひ、電車に乗り込む

セコモの「何分ぐらいで着く?」

フランス「2時間りよつとかな?」

長いなオイ。

まあ暇なので――

ほのか「なんかよくわからんゲームウ――」

苑子「イエーイツ――」

苑子だけのつてくれた

ありがとう苑子。

日本「なんかよくわからないゲーム……と言こまると。」

よくぞ聞いてくれた日本

私はどこからか箱を取り出し説明を始める

ほのか「まず『』に箱があります。この中には様々な罰ゲームが書かれた紙が大量に入っています。じゃんけんで負けた人はこの箱の中の紙を一枚ひき、紙に書かれている罰ゲームに従つてもらうというゲームです。ちなみにじゃんけんに負けた人に拒否権はありませんのでそこらへんは理解してくださいまし」

なつじ「ほう、なんかおもしろそうだな。やるか！」

なつじはやる気満々だ

イギリス「でも俺は……」「最初はグーッ！じゃーんけーんポイッ！話聞けよ！！」

全員が手を出す

イギリスがグー、それ以外の人はパーだった。

ほのか「さあイギリス、ひきなさい！」

イギリス「俺かよ……」

イギリスは嫌そうに箱に手を突っ込み、三角に折られた髪を一枚取り出す

それを私は受け取つて内容を読み上げた

ほのか「『右隣の人を10分間見つめ続ける』だつてさ」

イギリスは反射的に右隣を見る。

イギリスの右隣に座っているのは……

イギリス「…………フランス…………」

イギリスは思いつきり嫌そうな顔をする

フランス「うふふ、お兄さん、キデキシナモウ」

イギリス「気持ち悪いんだよ……嫌だ」こんな……

ほのか「拒否権はないのよイギリス?」

私はイギリスの耳元でることを囁いた

聞き終わった途端イギリスの顔がどんどん青ざめていく

ほのか「これをばらされたくないから従つ」とね

イギリスは涙目になりながらフランスを見つめ始めた。
(とこりか睨んでいる)

ほのか「やー、始めましょー」

全員「(マイツはイギリスに向ひたんだ……)」

イギリス「つてお」、俺はフランスを見たままじゃんけんすんのか
?」

ほのか「 もちのうん」

イギリス「 ビ、 ビウやれと.....」

ほのか「 はーい、 ジャーんけーん」 「だから話聞け....」 「 ポイッ....」

イギリス、 チヨキ

それ以外、 グー

イギリス「 またかよ....」

アメリカ「 運悪すぎなんだぞ」

なつじ「 あ引け」

イギリス「 チッ.....」

イギリスは紙を引き、 私に手渡す。

ほのか「 えーと.....『 最高のキメ顔をする』 だつて」

イギリス「 なんで俺が引くやつは恥ずかしいのはばかりなんだよ....！」

顔を真っ赤にしてキレるイギリス。

イタリア「 イギリス、 罰ゲームっていうのは大体恥ずかしいことなんじゃないかな」

イギリス「つーか俺、フランス見たままキメ顔すんのか！？」

苑子「じゃあ30秒だけ見ないでいいよ」

イギリスはフランスから眼を放す

イギリス「なんか……周りがすげ〜く綺麗に見える……」

フランス「どういへんとだ」「！」

ロシア「じゃ、最高のキメ顔をどーぞ」

イギリスは困惑つつも自分では最高のつまつたキメ顔をした

イギリス「…………何笑いこらえてんだよ……」

全員、必死に笑いをこらえていた

ドイツ「いや、笑になど……こらえてないぞ…………ククッ……」

加拿大的の「フフッ……」

ほのか「…………ブッ」

イギリス「…………やらなきやよかつた…………」

イギリスはかなり後悔したらしく

ほのか「じゃーんけーんポイッ！！」

負け……苑子、イタリア

苑子「つあー、負けちつたー」

ほのか「複数の時は誰か一人がくじを引いてそれに従つてね」

苑子「よし、引けイタリア！！」

イタリア「お、俺！？」

苑子「うん、わっち運悪いんだもん」

イタリア「それ俺もなんだけど…………」

イタリアはくじを引く

ほのか「えーと……『前にいる人に愛の告白』だつて」

苑子「なんじゃそら……」

苑子は前を見る

苑子の前の人はなつじだ

苑子「（よかつた女で……、しかもなつじだし）」

イタリアの前はドイツだからイタリアはなんのためらにもなくドーベルツに愛の告白をする

イタリア「ドイツ、世界で君が一番好きだよー。」

ほのか「どうしよう、」の一人なのにBさんに見えてしまった…………

B「嫌いなんだけどなあ……」

ロシア「苑子ちゃん、言わないの？」

苑子「あ、うん」

苑子はなつじを見る

なつじはそれを睨み返す

さこほの「睨み返すな…………」

ほのか「苑子ちょっとビビッてるよ」

苑子「えと…………よしぃ」

苑子は決心して口を開く

苑子「君は道端に咲く名前も知らない小さい花のよひ…………」

なつじ「喧嘩売つてんのかてめえはあああああ…………」

なつじが苑子にアイアンクロールをする

苑子は綺麗に宙に舞い頭から床に落下する

アメリカ「よく飛んだんだぞ…………」

アメリカが動かない苑子を見て顔を青くして言つ

イギリス「眞面目に考へても結局そつなるのか…………」

中国「ある意味天才ある」

ほのか「背が小さいなつじにとつては最高の侮辱だね」

なつじ「てめえも死にてえか?」

ほのか「は、はは……」

なつじ、超機嫌悪い……

フランス「苑子ちゃん動かないけど大丈夫かい?」

さいほの「ほつとけば大丈夫だろ」

ほのか「大丈夫じゃないよ…………」

『次は 駅)、次は 』

電車にアナウンスが流れた

もうすぐ目的地だから私達は荷物をまとめる

そしてちびつと窓を見ると.....

ほのか「おおっーーー」

れこほの「ビした.....ってわあ.....」

なつじ「海だああーーー」

窓の外は綺麗な青い海が広がっていた

苑子「海ーーー?」

ほのか「起きたーーー！」

そこほの「だからほつとけば起きるひついたら

私達の叫び声で死んでた苑子が飛び起きる

田本「綺麗ですね.....」

イタリア「ヴーー.....」

私達は駅につくまでずっと窓の外を眺めていた

その16 目的地まで行く時が一番楽しい（後書き）

ほのかがイギリスに何を囁いたのかはみなさんのご想像にお任せします

その17 海に行つたりおゆ泳げー（前書き）

仕方ないので斬つちやいました

b よ日本

夏休みもひつ終わつかけや「ひじやねーか！－

しかし夏休みが終わつても夏休み編は続きますぜ

あの人達が久々の登場です！－

その17 海に行つたりおゆ泳げ！

苑子「海だああああああああ…」

なつじ「黙れウザいくたばれ苑子」

苑子「…………ぐすり」

「んにちは、ほのかです

とこつわけで海です
やつと着きました

青い海、白い砂浜、そして砂浜につちあげられた大量の海藻が私達
を迎えてくれました

さこほの「しつかし暑いね、水着に着替えて早く泳ごう」

ほのか「おっしゃああ…まつかしとけええー…」

私と苑子は更衣室に直行した

イギリスト「元気だなあこひら…」

日本「フランスさん、またか更衣室をのぞいていつなんて考えてません
よね？」

フランス「か…考えてねーよ…」

中国「考へてたあるな……」

わこぼの「マジかよ、近づくな変態。行くよなつじ

なつじ」「うこーす」

ロシア「今のわこぼのちゃんの旦、思につきつフランスくんを軽蔑した日だつたね」

フランス「うう……」

アメリカ「とにかく早く着替えて早く泳ぐんだぞ……」

男性陣も更衣室に歩いて行つた

なつじ「あれ、中国は女子更衣室じゃないの?」

中国「我は男あるーー」

『やつと見つけたわ。我々の計画の邪魔な存在』

『あの時は手間がかかったからね。』

『ええ、でも今回は前みたいにはいかないわ。』

『全員まとめて排除してやる!』

『失敗は許されないわよ、キリハ』

『わかつてゐるが、キリカ』

黒いマントに身を包んだ蒼い髪の男と女は怪しく笑った

苑子「うーみーはー広いーなーおおーつきーなー」

なつじ「黙れ読みにくい」

苑子「さーせん」

さいほの「男性陣の方が着替えるのが遅い」とはビーゆう!」とだ

ほのか「人数多いからね」

イタリア「おまたせー!」

ドイツ「遅くなつてすまない。フランスが女子更衣室をのぞいて
…………」

さいほの「まだ諦めてなかつたんかいな」

日本「仕方ないので斬つちやいました」

ほのか「いやそんな『やつちやいました』的なテンションで言わ
れても……」

フランス「痛かつた…………」

苑子「痛かつたで済む」とじやなくね?」

私達は砂浜にビーチパラソルをさし、その下に休み場所を作り海に
飛び込んだ

アメリカ「イエーイッ」

なつじ「ちょ、アメリカ! 水! 水飛ぶ! しおばーーー!」

各自好き勝手に遊ぶ

しかし日本だけビーチパラソルの下で休んでた

日本「若いいついでですね…………」

「日本、泳がないの?」

日本「はい……ってえ？」

日本の前にいたのは知らない顔の少女だった

日本「えと……どなたですか？」

「はあ？ 何言つてんの日本。私だよ私」

その人物は眼鏡をかけた

日本「ほのかさん！？」

そう、正体は私でした

ほのか「そーだよ！」

日本「ぜ、全然違つ……」

ほのか「よく言われるぜ」

私は眼鏡を外す

ほのか「さ、早く泳ぐ！――！」

日本「えつ、ちよ……」

私は日本の背中をおした

日本、顔から海にザブーン！――

ほのか「あ、「メン...しょっぱ」よね、水

田本「いえ、ちゅうじこ塩加減です」

ほのか「え.....」

苑子「なつじー、浮輪外しなよー」

なつじ「やだ。泳げないから」

なつじは浮輪をしてプカプカ浮いている

苑子「泳げないんじゃなくて底に足がつかないだけじゃないの？」

なつじ「死ね」

なつじは苑子を沈めた

さいほの「あ、なんか藪崎が沈められてる」

ほのか「ホントだ」

日本「よく冷静に言えますね.....」

アメリカ「H A H A H A」

私達の遠くでアメリカが大声で笑いながら泳いでいる

さいほの「元気だね」

ほのか「やうだね」

日本「若いいついですね」

中国「三人ともじじいみたいある.....」

ほのか「あ、中国。いたの？」

中国「わざわからいたある.....。それより匂にくるあるよ」

さいほの「おう、今田の匂は何かなー」

日本「私が作つてきた弁当です」

中国「+イギリスのスコーンある」

.....

ほのか「わつ..... 私まだ泳いでるーーみんな先に食べててーー」

そこほの「待てや」「アーッ…お前も道連れじゃああ…」

逃げよつとしたがそこほにあえなく捕まる

ほのか「嫌だあつ…イギリスのスコーン食べぐるへりなら昼飯く
らいぬいてやるうつ…」

そこほの「ちよつとくらになら大丈夫だろ…」

ほのか「そこほのはヘタリアのことよく知らないからそんなこと言
えるんだよ…！あれは……あれは暗黒物質^{ダークマター}、いや殺人兵器なんだ
あああああ…！」

そこほの「落ち着け…！食べなきやいいだろ…」

ほのか「無理だ…！あのイギリスの笑顔を見たら食べなきやいけな
い気がするんだ…」

そこほの「お前のイギリス萌え的ななんだかは捨てろ…」

ほのか「私はイギリスより日本が好きなんだああああ…！」

そこほの「知るかああああ…！」

直後、腹部に激痛が走り私の意識はそこで途絶えた……

ほのか「…………はつ」

私が目を覚ました場所は砂浜の上、といつかさつき設置した自分達の休憩場所だった

私の顔を皆が覗き込んでいた

ほのか「…………「コハドコテスカ?」

苑子「テンゴクテース」

なつじ「ナグリマスヨー」

苑子「ジヤア、チキュウテース」

なつじ「プロシマスヨー」

苑子「ジヤア…………」

さいほの「もうこいやめれ」

私達のボケ合戦はさいほの仲裁で、ひとまず終了する

ほのか「んで、こいが砂浜の上だつてのは最初つからわかつてたけど」

なつじ「じゃあ聞くくな」

ほのか「いいじゅーん別にー。それよりなんで私はこいこいるの?」

確か海で泳いでた気がするんだけど…………」「

イタリア「俺、詳しい事はよく分かんないんだけど、この娘のちゃん
がぐつたりしたほのかちゃんを担いできたんだよー。びっくりした
よーーー！」

中国「ああ、皆には言つてなかつたあるな。いろいろあつてやこほのがほのかの腹を思いつきり殴つて氣絶させたある。」

日本「いきなり気絶されたので驚きました」

八
卷之三

なあ、ぬせどお

世のか「やーいー世ーのーひやーん?」

さいほの「私はなんも知らんよ」

ほのか「嘘つかなーー田撃者だつてちやんといるんだからなーー」

さいの「いやあ、やつてみたくて

ほのか「やつてみたくて じやねーもー。」~~絶する~~ ものやつが

やくほの「アーティス

ほのか「だああああつー！ムカツくうううー！」

苑子「落ち着けMEGANE」

ほのか「黙れ！…全然かつ」よくねーんだよーーつか今眼鏡かけて
ねーよつ！！」

フランス「そこですか」

日本「とりあえず落ち着いてください」……」

ほのか「うん」

なつじ「落ち着くのはやつーーー」

イギリス「ほのか、もう気分は大丈夫か？」

ほのか「うん！…大丈夫！…元気100%！…」

イギリス「じゃあ俺のスコーン食べるよな？」

イギリスが笑顔で真っ黒なスコーンを差し出す

ほのか「うめん、急に元気なくなつた。みんなで食べて」

ロシア「でもみんな先に食べちゃったよ?」

ドイツ「…………まあがんばれ」

全然気付かなかつたがみんなの顔色がかなり悪い

ホントにあの殺人兵器を食べたらしい

意識があるだけでもかなりす"」

苑子「私はさつきまで意識なかつたよ」

ほのか「やうなのー?いや、お腹いっぱいだから…………」

イギリス「あと一つだけなんだ。食べててくれるか?」

イギリスがさつきと変わらない笑顔で私の手の上に殺人兵器を置く

「……これを食べるの…………?」

ほのか「ちょっとトイレ…………」

アメリカ「逃がさないんだぞ」

逃げようとしたがアメリカに手を掴まれ引き戻される

ほのか「え…………えと…………」

なつじ「食べるよね?」

なつじが黒い笑顔で「うが！」の殺人兵器に比べたら怖くもなんともない

ほのか「あ…………え……」

全員「やあーーー！」

全員に言われる

ほのか「う…………うわあああああああーーー！」

私は叫びながら黒い物体を口にいた

その後の記憶がないのはいつまでもない

その17 海に行つたりまや泳げー（後書き）

イギリスのスコーンってどんな味がするんだろうーか？

一回食べてみたいです！

軽ーく次回予告

海で楽しく遊ぶ四人と枢軸・連合。

しかしその平和な時間はあいつらによつて破壊される……………

まあこじんなかんじですかね。

お楽しみにー

その18 眉毛の屍（前書き）

いや……俺死んでねえし……

b yイギリス

話が進まぬーぞコンチクショウ

宿題終わらねえぞコンチクショウ

さこほの「知るか」

その18 眉毛の尻

ほのか「うー……頭痛えー……」

さこほの「一田醉におじさんか君は」

私はイギリスのストーン（別名、殺人兵器）を食べて見事に氣絶し、さつき田が覚めた

ほのか「さこほのとかよくたえられたね……」

さいほの「もうすぐで意識が飛びそうだつたけどな」

ちなみに今、休憩場所には私とさいほのしかいない

みんな泳いでいる

ほのか「さこほのは泳がんの？」

さいほの「ちよつと休憩。疲れたからな」

さいほのはクーラーボックスからスピードリンクを取り出し口にふくむ

さこほの「黒須もちよつと飲んだら？」

そう言つて「一ツを手渡された

私はそれを飲む

ほのか「ううーー炭酸強めーー」

さこほの「蓋を開けた直後によく冷えた炭酸水って妙に炭酸強いよね」

ほのか「あーわかる」

こう話してると普通の女の子なんだけどなあ……

ほかの人から見たらまさかこのどこでモーいる女の子が世界を救う人間として命を狙われてるなんて思わないよねえ……

つかそんな設定、読者さん忘れてるよねー

ま、この世界に来てからたいした出来事何も起きてないし……

大丈夫だよね?

『ふつ、完全に油断してるな』

キリハがビーチパラソルの下でのんびりしている少女一人を見て言

つた

『これなら楽にできるわね』

キリカがニヤリと笑う

『うーん、そうはいかないかもね』

『どうこういとっ。』

『あの国の八人、なかなか強いよ。一部を除いて』

一部といつのは言つまでもない

『ドイツやアメリカは運動神経がいいからもうりん戦うのは強いはず。日本は剣術が得意。イギリスは……うん、あれだ。魔法的な何かでバーンと。中国は中国だからな。カンフー的な何かだ』

『ちょっと待つて。最後らへん適当すぎない?』

『氣にするな。まあイタリアはヘタレだからな。何も出来ないだろ。フランスは弱いかもしれないがそこそこ戦力にはなるはず』

『手強いわね……』

『でも一番氣をつけるのはあのバカ四人組だ。がむしゃらだがいろんな意味で強い』

『ええ、いろんな意味でね』

キリカとキリハは少し呆れ顔で言った

『しかしどうやつて殺すの?』

『「」は海だ。最高の殺人スポットだと思わないかい?』

キリハはとても嬉しそうに海で遊んでいたり休んでいたりする標的を見た

イギリス「…………ん?」

苑子「どしたの眉毛」

イギリス「んだと」「。さっきから嫌な予感がしてな…………」

なつじ「またまたあ、イギリスの嫌な予感ってのはあんま信用できないよねえ」

イギリス「うるせえ……」

アメリカ「イギリスーっ！……！」

イギリス「ふふおあ……」

突然、アメリカがイギリスに突っ込んできた

メタボ氣味のアメリカが上にのかつていてるため沈むイギリス

苑子「わああ！アメリカ！死んじゃうーイギリス死んじゃうよーー！」

アメリカ「え？」

苑子の叫びを聞いてイギリスを見るアメリカ

しかしイギリスはもう動かなくなつていた……

なつじ「わやああああー？イギリスうううーー！」

アメリカ「あ、ゴメンなんだぞ」

苑子「謝る氣全然ねーよ！」

イタリア「どうしたのー……つてわああああー？」

泳いできたイタリアが動かないでそのまま浮いているイギリスを見てかなり驚く

イタリア「うわああん！－－ドイツー！イギリスが死んでるよおおー！」

ドイツ「何ー？」

イタリアに呼ばれてドイツと日本達もやつてくる

イギリス「いや……俺死んでねえし……」

ほのか「どーかしたのー?」

休憩場所にいた私とほのりもその場に泳いできた

中国「こ、これは大変ある!すぐに人口呼吸を……!」

さいほの「誰がすんの? いつとくけど私達女子は断るね。いろいろあれだし」

ほのか「ここの小説は恋愛なしの方向だから」

苑子「イギリスと……」

なつじ「何照れてんの?苑子」

苑子は妄想ワールドに入ってる

フランス「じゃあ俺が!!--

ほのか「わーわー!!--ダメダメダメエッ!--恋愛はなしだけどB」
はあり、ってわけじゃないからあ!!--

フランスが人口呼吸をしようとしたところを私が必死にとめる

中国「でもこのままだとイギリス死ぬあるよ?」

フランス「別にいいよ?」

さこほの「お前は助けたいのか死なせたいのかビックちなんだ」

イギリス「だから俺大丈夫だつて…………」

イギリスの言葉は誰も聞いたやいない

ところづかイギリスの意識がある」ともみんな知らない

フランス「いやあ、別に死んでもいいんだけど人口呼吸、お兄さん
やってみたくて」

なつじ「ギャアアアア……！」に限りなく変態な最低男
がいるよおおおおお……！」

なつじの叫びで海水浴に来ていた人達がフランスに冷たい視線を浴
びせる

フランス「嘘嘘……だからやめて……お兄さん泣いちゃうから……」

苑子「勝手に泣いてるカス」

はい、ブラック苑子キター――――――――

久々の登場ですねー

苑子「つかやるならやれよ。早くしねえと大変だらづが」

なつじ「おお、ブラック苑子でもイギリスの心配はす」

苑子「ほら、早くしねえと。時間の無駄だから。読者飽きちゃうだ
ろおが」

思いやりもクソもないブラック苑子ちゃんなのでした

その18 置物の屍（後書き）

書き終わって気付いたこと

日本とロシアが空氣

w

今回、一度も喋つておしません。

このことに気付いたあなた、明日の運勢最高です。

嘘です。

その19 ペンチ襲来！？（前書き）

死んでねえって書いてんだがまあまあおおおーー！

b サイギリス

B 「下手なのに今回僕のやつとB一いつです。

ほんのちょっとですかりーー！

その19 ピンチ襲来！？

イギリス「…………はあ、はあ…………」

イギリスが疲れたように息をしてている隣には頭にたんじぶを作ったフランスが浮いていた

おっとこれでは状況がイマイチわからないと思つんで時間を少し戻します

ロシア「ねえ、早くしないとイギリスくん死んじゃうよ？」

ロシアが笑顔でフランスを見る

それに怖じけづいたフランスはイギリスに顔を近付けはじめた

ほのか「もう見てらんないいいいい！」

B「が嫌いな私はそこで田をつむつた

フランスの唇がイギリスに触れようとした瞬間！

イギリス「だ～～か～～う～～」

動かなかつたイギリスがフランスの顔を掴み

イギリス「死んでねえって言つてんだろおおおおおおおお……」

思いつきつフランスを殴つた

フランスは綺麗に田を舞い、海に落下した

そしてわざ今までのイギリスと同じ状態になつた

私達はただただ、その一人の様子を呆然と見ていた

そして今に至る

苑子「イギリス……生きてたの？」

イギリス「国がそう簡単に死んでたまるか」

ほのか「うん、でももしかしたらフランス簡単に死んじゃ「つかも」
中国「奴はゴキブリ並に生命力が高いある。ほつといても大丈夫あ
る」

中国の言葉に全員が納得した

『キリハ、あいつらバカなの?』

『今じろ気付いたの? そつ、あいつらは正真正銘の……』

キリハは間を開けて、きつぱつと言つた

『バカだ』

『きつぱり過ぎるわ』

苑子「ブエックショイ！！」

なつじ「うわっ、汚つ！」

ほのか「ひでえなオイ」

日本「風邪ですか？」

苑子「んー、たぶんちがつかなあ？」

さいほの「誰か敷崎の噂でもしてんじゃねえか？」

苑子「そうかなあ……」

バカの代表

『あの子が一番に反応したわ……』

『ああ、バカの代表だからじゃないか？』

『悲しきガルわね、あの子』

二人は苑子を可哀相な目で見た

見られている苑子はまたくしゃみをした

『なんか見ててつらくなつてきた、早くやつましょ』

『そんな理由でかよ』

キリハは手を前に出した

『まあ早くやらなきゃいけないのは変わりないけどね』

キリハの手が青くひかりだし、どんどん光を増していく

『何をするの?..』

『まあ見ればわかるって』

光は激しく光った後、消えた

『これで終わりだ』

そこまでの「あ、やつだ日本」

日本と話をしているとそこほのが私達のところに泳いできた

さいほの「実は…………ぬおつ……」

しかし突然沈んだ

ほのか「さいほの……? つてギャア……」

足に突然重みを感じ、私も水に沈んだ

足を見てみると重そうな鉄の玉がついている鎖が足についていた。
なんだ「レエ……?」

ほのか「ふはつ……」

私は頑張って顔を水面から出した

日本「ほのかさん……どうしました……?」

ほのか「足にいつの間にか重りがついてる……みんなも気をつけて!
!」

なつじ「何が……」

そんななつじの足にも突然重りが現れた

なつじ「わあ……!」

なつじは浮輪をしていたから浮輪に捕まりなんとか絶える

苑子「なつじー、大丈夫ー?」

なつじ「苑子も氣をつけて…」

苑子「だーいじょーつ…………」

苑子、笑顔で沈む

その場にいた全員がコイツバカだと思った

しかし私は絶えていたが限界になりまた沈む

やばつ！鼻に水入った！！ツーナンツするううううー頭いて
ええ！！

どんどん沈んでく私の手を誰かが握り、引き上げてくれた

ほのか「げほつ…げほつ…は…鼻が…」

日本「大丈夫ですか？」

助けてくれたのは日本だった。

ああ……大好きな日本に助けてもらえるなんて……

今なら死ねる……

つてダメだろ死んじゃ。つか今死にそうになつたし。まあそれどころじゃなくて、

ほのか「さいほのとなつじと苑子の近くにいる人（人じやないけど）は助けて……」

私は周りにいるイタリア達に呼び掛ける

さいほの「がぼがぼ……」

フランス「おい大丈夫か！？」

さいほの「ちつ、お前か……」

フランス「助けたのにひどくない……？」

フランスがさいほのを助けたが、さいほのめぢやくぢや嫌そり……
…。ドンマイフランス

なつじ「うう……もーダメ！」

浮輪を掴んでいたなつじは重さに絶えられなくなり、そのまま沈んでしまった

近くにいたロシアは急いで助ける

ロシア「危なかつたねー」

なつじ「ありがとー……」

なつじ危機一髪！

あとは苑子だけだ

苑子の近くにいたイギリスはなんとか顔を出して、この苑子に手をのばす

イギリス「苑子！手、出せ！」

苑子「……ボツ」

イギリス「何照れてんだお前！！バカか！！」

苑子 バカとはなんだ！！私だつて

しかし突然、大きな波が来て苑子をさらっていく。

波が消えたときには死子はどうにもいなかつた

なーし・死|^カも おもおもー!!!

イギリス「チツ」

イギリスは苑子を探しに水に潜つた

その19 ピンチ襲来！？（後書き）

なんとなく次回予告つ

なつじ「苑子が逝っちゃったんで次回は苑子のお葬式です」

苑子「勝手に殺すなー！」

ほのか「はい嘘です。眞面目にやつまーす。そこほのよみじく（<
- > ）ー」

そこほの「おう任せぬーー行方不明になつた數崎ーー數崎は無事な
のかーーそしてミス ルの運命はーー」

ほのか「おーい話がずれてるぞー」

強制終了。

その20 嫌な人達と再会（前書き）

どつかで……会いましたつけ？

ほほのか、さいほの、なつじ、苑子

今日は苑子視点

その20 嫌な人達と再会

…………あり？

私…………どうなつたんだつけ…………？

確かみんなで泳いでたら…………

ああ…………思い出した…………

なつじに殺されたんだ…………

いや違うな…………

つか絶対違うな…………

ん…………よく見たうじ一海の中だ…………

そうだ、確かに重りが…………

今ならまだチャンスはあるかも！

私はがんばって足を動かし泳げりつとした

まあ無理なわけで

最初っから泳げないしね

無意味な行動

ああーそろそろ島できなくつてきたあ

やばい、私死ぬかもしない

つか死ぬだろこれ、完全に

こんなとこで死ぬなんて……

せっかく一次元に来れたのに……

ま、死んだらなつじ呪つたりとりついたりして遊ぼうと……

私は遠くなつていく水面を見ながらまぶたを閉じようとした

そんな私の前に突然、金髪にエメラルドの瞳の人物が現れた

え、イギリス！？

イギリスは私の腕を掴み、水面へと泳いでいった

苑子「ぶはつ……げほつ……げほつ……」

私はやつと水面から顔を出し、酸素をめいっぱい吸った

ほのか「苑子……」

苑子「はー死ぬかと思ったー」

イギリス「俺が行かなかつたら確実に死んでたぞ」

苑子「あははつ、ありがとー」

イギリス「べつ、別にお前のためじゃないんだからなーーこれは……」

出たよシンデレ

めんどくせえ

ドイツ「とにかく陸に行くぞ。四人は今一緒にいる奴から手を絶対離すなよー」

ほのか「ほーい。日本、重いかもしないけどがんばってねー！」

イタリア「俺も手伝つよーー！」

日本「あ、ありがとうございます」

黒須はイタリアと日本に抱まつて泳いでいった

私はイギリスと中国に手伝つてもひつて陸まで泳いでいった

この一人と一緒に行けるなんて……！！

薮崎苑子、幸せすぎるぜー！

なつじ「で、ビースルーハーの重り」

みんなが無事に砂浜についた後になつじが自分の足に繫がれている
鎖とそれについている鉄の玉を見る

頑丈に繫がっていて簡単にはそれそつもない

んー、どーしたものか

しばらく考えてみて私はある」とをおもひつこた……じゃなくて思
いついた!!

苑子「そのままでいいんじゃない!？」

なつじ「キングオブバカは黙つていろ」

しかしなつじに冷たくつけはなされてしまふ

ほのか「このままじゃ歩くの大変だしねえ」

黒須は立つて歩こうとした

しかし一歩も進めず頭から前に倒れる。い、痛そつ……

れこほの「…………おい、大丈夫か?」

ほのか「この重り限りなく重たいよ……足があがんないもん!」

黒須は体を起して頭に出来たたんこぶを涙田でさすりながら言った

相当痛かつたんだろうな……

れこほの「なんか衝撃を『えて壊してみるのは?』

イタリア「壊れるかなー?」

イタリアは黒須の棒でべしべし叩いている

まあ壊れないわけで

中国「仕方ないあるな。我に任せあるーー。」

中国が中華なべを持つて私の前に立つ

苑子「えつ、ちよつ、私?つかそれ危なーー。」

中国「ほあちやああああああーー!」

苑子「ちよつと待つてええええーー。」

キンツー!!

甲高い音が辺りに響いた

中国「やつぱダメあるかーー。」

苑子「ジーナンつてきたああつーー。」

「つままでダメージがーー。」

日本「傷すらついてませんねーー。」

アメリカ「ビーなつてるんだいコレーー。」

『ふはははーー!苦戦してゐみたいだなー。』

全員「ーーーーーーーー?」

突然、空から声がした

上を見ると一人黒い人がいた

つか浮いとる！？

『久しぶりだな。よくここまで生きていたものだ』

片方の方が見下したように言つ

つか……

ほ・さ・な・そ「どつかで……会いましたっけ？」

『『…………』』

誰だあいつら？

『きつ……貴様ら忘れたのか！？』

ほのか「忘れたも何も会ったことないですよ」

さいほの「イタリア達知ってる？」

イタリア「ううん。知らないー」

ドイツ「俺もだ」

日本「私も覚えが……」

アメリカ「あんなのに会つたかい？イギリスはどうだい？」

イギリス「俺も会つてないな」

フランス「お兄さんも」

ロシア「僕もー」

中国「我もあんな奴ら知らないある」

全員知らないらしい

『忘れたのか！ほら、お前達四人を殺そうと……』

さこほの「殺そうと…………？」

『いちの世界に来る前に、ほら』

なつじ「ヘタリアの世界に来る前に…………」

四人「ああーーー！」

やつと思い出したーーー！

確か…………

苑子「キリヌキーーー！」

つて名前だったような

『違うわ！！俺の名前はキリハだ！』

『私はキリカよ…』

二人が必死に自分の名前を叫んでいる

ほのか「んで、私達になんか用？」

『決まってるだろ！！お前達を殺しに来たんだよ…』

さいほの「オーマイガー」

『あなた全然驚いてないでしょ』

さいほのはさほど驚いてない

『それよりあなた達の足についてるそれ。 そう簡単にはとれないわ
よ』

キリカが私達四人の足についてるのを指差して言つた

なつじ「えー、なんでー」

『その鎖には強力な魔法がかけられてる。 そつ簡単には外れな……』

ほのか「外れたけど？」

『…………』

イギリス「こんなの俺の魔術で外れるさ」

イギリスの魔術？魔法？のおかげで重りは簡単に外せた
あー、足が軽い

『ちひ、やっぱお前達みないな“国”がいると厄介だな』

キリハがイタリア達を見て怖い顔で言った

『やつぱり全員殺した方がいいんじゃない？』

『少し手間がかかるが仕方ない』

二人が話し合った後に私達の方を睨む

イタリア「ヴ……ドイツ……」

ドイツ「落ち着け、大丈夫だ」

ほのか「あ、なんかすゞく嫌な予感がする……」

うん、黒須に同感だ

なんか一人からてるオーラがハンパないし

どうしよう、このままじゃ死ぬかも

いやそんなおちゃめなもんじゃねーな

苑子「あわわわ……なんか出来ないの……」

日本「私に方法があります。合図をするので一斉にここから逃げますよ」

日本の言葉に全員が頷いた

辺りが静寂としている

そして日本が叫んだ

日本「今です……！」

日本が少し大きい玉を地面に叩きつけた

玉は叩きつけた瞬間に白い煙りを出して辺りを覆った

なつじ「すげえ……忍者だ！」

中国「早く逃げるあるー！」

私達は感動していなつじを引っ張つてその場から逃げた

その20 嫌な人達と再会（後書き）

なんかロシアとかあんまりしゃべってないよつな……

まあ次からがんばろー
がんばる」とじやない

その21　ただいま逃走中（前書き）

誰のせいだと思つてゐるあるかあああ……！――

b →中国

なんか今回、苑子とアメリカとロシアが眞面目^{まめい}す^そう^るの^のww

眞面目なキャラ^クト^レじやねーだろ^うの^の人達^{ひとだつ}ww

その21 ただいま逃走中

『げほつ……げほつ……あ、あいつらはーー?』

『ちひ、逃げられちゃったみたいね』

『変な道具使いやがつて……ーー。』

白い煙が消えたときにはもうキリハ達のターゲットは逃げていた

『くそつ、絶対に逃がすなーー。』

キリハとキリカは黒い煙となつて消えた

さこほの「はあ……はあ……ど、どじままで行くんだ……?」

フランス「バスに乗つて駅に行こう。ここから駅はかなり遠いから
な」

苑子「に、荷物はー?持つてきたー!?

ドイツ「そんなの取りに行く暇がなかつただろ?ーー。」

イタリア「ぱちり持つてきてるありますー。」

ドイツ「お前は.....」

全員分の荷物を持つて敬礼するイタリア

アメリカ「イタリアナイスなんだぞーー。」

イタリア「でももう限界.....」

イタリアは倒れた

ほのか「わやああああーーイタリアああー?」

イタリア「いっぱい.....走つたし.....全員分の荷物.....持つてたし
体力的に.....限界.....」

なつじ「なんかゴメン、イタリア」

中国「とつあえず荷物は持つある。だからがんばるある」

イタリア「も、もつ無理い.....」

イタリアは動いてない

走るのは無理そうだ

苑子「がんばれ！！でも私も限界！」

苑子もイタリアの隣で倒れた。

ほのか「苑子までええええ！？」

苑子：僕に食べた……イギリスのスニーソンで、お腹が痛くて……」

卷之三

突然
お腹が痛みたし

したたたたた！

「ジノ、僕は平気だよ？」

シテ恐れへし

あ
でせむよ」と顔色悪しからへんたゞ^シな

今立っているのは「シア」と作^フた張本人のイギリスだけ

イギリス　お三、　おい！　大丈夫か！！？

日本「い、一生の不覚」

なつじ「ハハ」おおおお……

イギリス「ちょっと待て！今なんとか……」

『見つけたわ……』

立ち止まっていたら突然キリカとキリハが現れた

『ちよこまかと逃げやがって！』

キリハが手からなんか玉みたいなものを飛ばしてきた

イ、イリュージョン！？

苑子「うわわわわ！」

玉は苑子の近くに落下し落とした場所には大きなくぼみができた。
ダメじゃん、道壊しちゃ

苑子「うわあ……」

つかあれ当たつたら死ぬよね。確実に逝っちゃうよね

ドイツ「バス停までもうすぐだー我慢しろー。」

そう言つあなたが我慢できませんぜ、隊長

無理しないでください

ドイツ「おいイタリア！…立て！」

イタリア「キュー……」

イタリア、見事に氣絶

疲れとお腹の痛みが一斉に来たもんだから無理ないな

ドイツ「つたぐ……ほら、行くぞ！走れ！…！」

イタリアを担いだドイツの後を私達はなんとか追いかけた
バス停に着いたときちょうどバスが来たから、急いで乗った
バスの中には誰ひとりいなくて静まり返っていた

やがて入口がしまり、バスは動きはじめた

窓を見るとキリカとキリハが悔しそうに顔を歪めていた

『ちつ、また逃げられたか！…』

『安心しなさいキリハ。あいつらは死ぬといつ運命から逃げられないので』

キリカがニヤリと笑つた

ほのか「よかつたあ、おいかけてこないよ
「

座席に座り、私はとりあえず安心する

ドイツ「ああ、なんとか逃げのびたみたいだ」

ドイツが氣絶していいるイタリアを座席に寝かせた

なつじ「あれつ、そつこえばお腹痛くないよ」

苑子「ホントだ

確かに

痛くない！！

さこほの「イギリスの魔術か？」

イギリス「ああ、逃げながら腹の痛みがなくなるように呪文を唱えていたんだ。」

なんかこの小説のイギリス、魔術とか使いまくってる気がする

ま、いつか

イタリアも腹の痛みがなくなつたせいか顔色がせつせつよくなつ
ていた

アメリカ「ああーもう災難だつたんだぞ!」

フランス「仕方ないだろ。俺達は世界を救うんだからあいつらに命
を狙われて当然さ」

イタリア「ウブュー……」

イタリアが目を覚ました

ドイツ「大丈夫か? イタリア」

イタリア「UGH……なんかくうくうするよ……」

さこほの「頭冷やす? 氷あるよ?」

イタリア「ありがとー…」

さこほのが袋に氷をいれてイタリアのおでこに当てる

イタリア「ちべたつ」

さこほの「氷だから当たり前でしょ」

ドイツ「すまないな」

さいほの「いいつて」とよ

さいほの、お母さんみたいなあ……

微笑ましい光景だよ……

苑子「…………ねーねー」

しばらく窓の外を眺めていた苑子が全員に声をかけた

ほのか「どしたの？」

苑子「お腹減った」

ほのか「殺すぞ」

苑子「ウソウソ！あのさ、さつきからおかしいと思ってたんだけど
…………」

苑子が自分なりに真面目な顔をつくつた

私達から見たら変顔にしか見えないが

苑子「なんか私達以外に人がいない気がする」

なつじ「え？ どーゆーこと？」

苑子「さつき私達が重りのせいで死にそうになつたやん？ 普通誰か

が溺れそうになつたら周りの人は助けに来るでしょ？」

私達は苑子の話を黙つて聞いている

苑子「でもイタリア達しか助けに来なかつたよね？私、変だと思つてイギリスと中国と陸に行こうとしてる時に周りを確認してみたの」

苑子にしてはめずらしく長々と眞面目に話をしている

苑子「でも周りにはいつのまにか私達以外誰もいなかつたの。キリハ達から逃げてる時、道路を走つて逃げてたでしょ？その時にも車が一台も走つてなかつたの」

日本「そりいえばそうですね…………。必死だったんで氣づきませんでした」

なつじ「苑子、よく気づいたね。苑子のくせに」

苑子「泣いていい？」

ほのか「よくわかつたね、苑子！」

苑子「えへへ でも問題はそこじゃないの」

イギリス「十分問題だろ」

苑子「だつてさ人もいないし、車も一台通つてないのにバスが走つてるなんておかしくない？」

ロシア「あ、確かに……」

苑子「しかもこのバスは私達が来るのを予測していたかのようにグッドタイミングに来たでしょ？このバスは一時間に一回しかここに来なくて毎時間30分ぐらに來てるの」

さこほの「よく知ってるね……」

苑子「さつきバスに乗る前に時刻表をちらりと見たらそういう書いてあったんだー」

苑子は照れたように笑った

ドイツ「今は16時10分だな……」

苑子「私達がこのバスに乗つたのは10分前だよね？」

ほのか「つてことはこのバスが来たのは16時つてこと…？」

めつちや遅い。卑いやん…！

苑子「そゆこと…」

苑子が元気よく囁つ

ロシア「とにかくとはこのバスは……」

苑子「そう、怪しこつてこと…」

イギリス「まさかあいつらの……」

全員「喂…」

全員が声をそろえて言つた瞬間にバスは全速力で走り始めた

なつじ「わやああああー?早つ!—!」

イタリア「ねーねードイツー……」

ドイツ「じつした!…!」

イタリアが運転席を指さす

イタリア「もういえばこのバス…………運転手いないよ。」

イタリアの言葉にロシア以外全員が顔を青ざめる

ホラーじゃんつ!—!

さこほの「じゃあこのバスどこに向かってるわけ!?」

苑子が窓を開けてどこに向かってるか確認する

このバスが向かってる先は…………

崖がけ
だつた

苑子「うーん、地獄かなつ」

普段冷静なさいほのがパニクつてるよ.....

つか普通パニクるよねこの状況。

なんでロシアそんなに落ち着いてられんのかな

ナニカアレルマジナ

イギリス「どうするつて言われたつて」

パークつてゐる内にじんじん崖は近づいて来る

アメリカ「早く降りるんだぞ！！」

アメリカがバスの入口を開けて言う

フランス「降りるつたつてこんな速さのバスから降りるのか！？危険だ！！」

アメリカ「でもこのままだと死んじゃうんだぞ！」

ドイツ「アメリカ」

アメリカがほかの人より冷静だ……

イタリア「でも……」

アメリカ「世界が滅びてもいいのかい！？」

イギリス「アメリカ…………お前…………」

アメリカ、いつもはあんなんだけじゃんと周囲のことを考へてるんだ……

ちょっと意外だ

ロシア「…………アメリカくんの血つとおりだねー」

中国「ロシア！？」

ロシア「こんなところで死んで敵の思い通りになりたくないからねー」

ロシアの言葉に全員言つ返すことがなかつた

つか言い返したら殺される…………

やがてドイツが口を開いた

ドイツ「俺は降つよ！」

イギリス「俺も降りるや……べつ、別にお前らのためじゃ……」
さいほの「私も降りる」

イギリスのシン『テ』、華麗にスルー

苑子「わっちも降りる——！酔つてきたし！」

なつじ「ヤニかよ。私も降りる」

ほのか「私も降りるー」

日本「私も降りさせていただきます」

中国「我也降りるあるー」

フランス「汚れるのは嫌だけど命の方が大切だからね……。お兄さんも降りるとするよ」

フランスはため息をついた

これで大体の人は降りることを決意した

あとは……

イタリア「…………ヴェ？」

全員の視線がイタリアに集中する

イタリア「えつー？え、えと……」

イタリアはしばらくなつていていたがやがて

イタリア「おっ、俺も降りるありますっーーー！」

なぜか涙目で大声で叫んだ

苑子「うー、すぐ終わるって思つたら楽に思えたけどなんか怖いな
あ……」

苑子が開いた入口から高速で流れの景色を眺めながらいつ

確かに怖い

下手したら死……

いやいや……そんなネガティブなこと考えちゃダメだ！

やるからには思つてきり行かなきや……

そこほの「……………で、誰から逝くの？」

そこほの、さりげなく不吉な漢字使わないで

アメリカ「ここのイタリアでー！」

イタリア「ヴェッ！？なななんで！？」

アメリカ「なんとなく…」

なんとなくかい

イタリア「やだやだやだやだあつ……痛いのやだよお……」

ディエツ「そんなことで泣くな…」

イギリス「おい、早くしりー屋、もつすぐセレーダモー。」

確かにもつすぐで屋だ

早くしないとぶつかひやけやばい

アメリカ「じゃ あイギリスが先に逝くんだぞ」

イギリス「なんでだよ！あと漢字ちげえよばかあ！」

イギリスがアメリカにつかみかかる

苑子「わあ！－暴れないでよ－落ちちゃうでしょ－」

開いた入口の一番近くにいる苑子が叫ぶ。イギリスとアメリカの争いは壮絶で周りを巻き込んでいく

苑子「ちょっと……だから暴れるなって……あ」

苑子がイギリスに押されたアメリカにぶつかってアメリカと一緒に

バスの外に飛び出す

しかも全員が一番前にいた苑子によつかかっていたから苑子が飛び出したことによつて全員バランスを崩して外に飛び出した

全員「…………あ」

全員がバスから降りた（といふか落ちた）後、誰もいなくなつたバスはすつと崖まで走つていきそのまま奈落の底へと落ちていつた

その21　ただいま逃走中（後書き）

こんなことがあつたら本氣で怖いと思つ書いた張本人……
（作
者）

その22 危機一髪？（前書き）

b
y
苑子

更新遅れました……

運動会の練習とか運動会の練習とか運動会の練習とかで忙しくて…

家に帰つて即爆睡だつたため全然執筆してませんでした！

反省してまーす
してねえ

その22 危機一髪？

なつじ「う、うーん……」

私は瞼を開けて、重い体を起こした

周りを見ると苑子達が倒れていた

なつじ「あー……何があつたんだっけ……？」

ガンガンする頭で何があつたか思い出す

あ、そういうえば全速力のバスからダイブ（落ちた） んだ！！

つかよく無傷でいられたな…………

ポタッ

安心している私からなんか赤い液体が落ちてきた

なんじやこじや？

私はおでこを触つてみる

なんかぬるっとしていた

触った手を見ると真っ赤になっていた

あー、うん……

なつじ「ぎやあああああーー？あ…………頭からああーー！ケチャップがあああああーー！」

なんだこれえええーー？

昼にあれかー？ケチャップいつぱいつけたフランクフルト食ったからかー？

ケチャップ食つただけで頭から出るんかああああーー？

なつじ「だれか助けてええええーー！」

ロシア「菜摘りやん落ち着いて」

なつじ「ぎやああああーー？ロシアアアアアーー？いたのおおおおーー？」

ロシア「聞いてなかつたの？落ち着いてつて言つたよね？」

ロシアに黒い笑顔を向けられて私は強引に自分を落ち着かせる

ロシア「あー、頭打つたんだね。血が出てるよー？」

なつじ「血じゃないよ！ケチャップだよ！」

ロシア「ホント一回落ち着いて」

平気な顔をしているロシアも所々擦り傷をつくっていた
なつじ「ロシアも大丈夫？所々ケチャップが出てるよ？」

ロシア「血とケチャップは全然違うからね？あとせつとき聞いてて思
つたんだけどケチャップ食べただけで体から出るわけないからね？」

パニクっていた時の私の間違いをロシアに冷静に訂正される

なつじ「つかみんな死んでないよね？」

ロシア「うん、さつき確認したけどちゃんと生きてたよ」

ロシアと話をしているとだんだん怖い話になってしまつのは氣のせ
いだろ？

死んだとか生きてたとか笑顔で……

さいほの「うー……」

さいほのがためき声をあげながら起きた

なつじ「チャオー さいほの大丈夫ー？」

なんとなくイタリアの口調を真似てさいほのに声をかける

さいほの「なんか体のあちこちが痛い……」

なつじ「ロシアよりは少ないけど擦り傷だらけだねー……一人ともあとで消毒しようかー」

どうよこのお姉さんぶりー！

これで誰も私のことをチビなんて呼ばなくなるーー！

さいほの「自分でできるから大丈夫だよー」

ロシア「こんくらこまつといても大丈夫だよー」

私を頼つてーーー！

なんか恥ずかしいよーーー！

アメリカ「いつつついにはどーだい？ていうか俺は誰だい？」

イギリス「ふざけるな」

アメリカ「いだつー！」

起きてさつそくボケたアメリカをイギリスが殴る

ほのか「う…………よかつた…………生きてたわ…………つてうわっーなつ
じ頭からケチャップが！」

ロシア「だから違うつてば」

日本「いたた…………腰うつた…………」

中国「あいやああああ…………体のあちこちが痛いある…………死んじやうある…………」

ドイツ「おいイタリア、大丈夫か？」

イタリア「全然大丈夫じゃないありますつーー！」

ドイツ「大丈夫だな」

フランス「うわー汚れちゃったよ…………」

みんなが次々に田を覚ます

よかつた、みんな対した怪我してないね…………

あとは…………

なつじ「苑子、起きないね」

さいほの「死んだんじゃね？」

ほのか「おい…………」

その時、苑子の指がかすかに動いた

そしてゆっくりと体を起こして苑子は立つた

苑子「いやー死ぬかと思ったわー」

全身血だらけの姿で

なつじ「今から死んでもおかしくねーからな」

ほのか「ほーっ、出来たでー」

ほのかが私の頭に包帯を巻いて仕上げに思いつきり私の頭を叩く
なつじ「いだつ……何すんだよー」

ほのか「いやあ、つい」

なつじ「お前後で覚えてるよ」

苑子「ふがふがふが」

苑子は全身に包帯を巻いているから何言ひてるかわかんない

なつじ「全身に包帯つて……そんなにひどい怪我だったの?」

よく生きてんな

さこほの「んー？いや怪我はあんましてなかつたよ？でもなんか血だらけだつたからとりあえず包帯ぐるぐる巻きにしてたつ！」

さこほのが満足した顔で親指をつきあげてグッジョップした

全然よくないよ…………

中国「それようこれかうじうあるあるか？」

ほのか「うーん、つか人が誰もいないのってなんで？」

なつじ「敵のせいなんじやないの？」

田本「菜摘さんの言ひとおりです」

「うだーす」いだらうーー褒めろ、讃える、ひやほづけえええーー

つて私はプロイセンか

田本「ここは敵が作り出した異次元の世界です。敵がこの世界を消さないかぎり私達はここから出られません」

苑子「な、なんだつてええええーーー？」

ホントーにフリアクシヨン、うぜえな

ロシア「じゃあ敵を捕まえて消してもうせーいんだよね

笑顔で言つてるとこが余計怖いよロシア

ドイツ「でも敵がどこにいるか……」

ロシア「いい加減出てきたりー？」

ロシアがドイツの声を遮って大声で言った

えつ、こらのーへビニビニー！？

そしたらビニからともなくあの一人が出てきた

『ふつ、氣づいていたか。さすが“國”だな』

キリハだとかいづやつが見下したように笑う

うざせ殴りてえ。いいよね？少しくらい問題ないよね？

とこうことで、

なつじ「なつじパンチ！…」

『ぐはあつーー。』

なつじパンチ、キリハの顔に炸裂だぜ

『キ、キリカああああーー。』

あ、姉の方だったわ。やべえ間違えた。まあ似てるから悪いんだよ
私はなんも悪くない

『貴様！キリカになんてことを……』

なつじ「いやあ、つい つかお前シスコン？』

『違う！！ただキリカが好きだけだ！』

セコモの「それをシスコンと云つのだよ」

ヒカルをまさかのシスコン発覚……

キモい……

ロシア「どうでもいいから僕達をここから戻してくれない？」

『戻すわけないだろ？……お前らはここで死ぬんだ！』

苑子「ねえ、キリハ達はどうしてそんなに私達を殺そうとしてんの？」

苑子がまた変顔、じゃなくて苑子なりの真面目な顔になつた

『それは上からの命令だからに決まつてるだろ？』

苑子「へー…………でもキリハ達、ホントはこんなことしたくないんじゃない？」

『『『……？』』』

苑子の言葉にキリハとキリカが言い返せなくなる

苑子「あ、図星？図星だよね？図星以外ありえないよね？」

ほのか「なんで嬉しそうなんだよ…………」

『お、お前らに話す必要はない！！行くぞキリカ！』

『あ、ああ…………』

イタリア「あ、ちょっと待つて……ここから出で…………」

突然、イタリアの横から高速で何かが一人に向かって飛んでいった

それは一人に直撃し、二人は地面に落下した

『いっつ……何を……』

ロシア「言つたよね？捕まえてここから出してもう一つて

ロシアは笑顔で地面にささつた水道管をぬいた

この笑顔の前ではキリハとキリカも従つしかなかつた

なんだかんだで気が付いたらさつきまで静かだったのに車の走る音
で「うるせくなつた

つまり戻ってきたわけだ

苑子「ありがと……ってあれ？」

あのバカ双子はまだどつかに消えちやつたし……

でもよかつたー、戻つてこれで

あのままあそこにいたらどうなつてたんだろう？

ロシア「異次元世界から出られなくなつてそのまま異次元に飲み込
まれちゃうんだよ」

なつじ「うん、勝手に心を読まないで」

エスパー？

やつぱロシア怖いわ……

私は空を見上げた

わざとまではオレンジ色だつた空が今は真っ黒になつていた

つまり夜だ

そこほの「いれからぢづかるの？」

イタリア「早く帰るよー！怖いよー！」

イタリアはドイツの肩を掴みぐわんぐわん揺らす

ドイツ「帰りたいのはやまやまなんだがな……」

ドイツは困った顔で呟く

ドイツ「もひ…………帰る電車がないんだ……」

苑子「…………は？」

ドイツ「…………はあまり電車が通らないんだ。一日三回くらいしか」

アメリカ「そんな…………」

ほのか「あ、じゃあバスはー？」

イギリス「あんなことがあつた後でよく乗りたいと思えるな…………。
あとバスも今田はもうやつてこないぞ」

ほのか「えー……」

なつじ「じゃあタクシーー！」

中国「どんだけ金かかるあるか。我は嫌ある。第一あの狭い車にこの人数が入れると思うあるか？」

…………思ひません。

じゃあ……私達野宿するしかないのかな……

日本「そんなこともあると思つて」周辺のホテルを調べてきました

日本が紙の束を出して笑顔で言った

日本が菩薩に見えた瞬間だった。

その22 危機一髪？（後書き）

感想お願いします！！

やのう 湯泉は涼ぐといひがやあつませる（前書き）

じゃあ俺はいつうちで寝

出しき変態

チャーチンス、そこほの

夏休み編を書きはじめて約一ヶ月……

わづーーー円やん！…秋やん！肌寒くなつしきりやんやん！…

と懇の方もこりひしゃると思こます。

しかし安心してくだれい

私の中ではまだ夏休みは続いているのです……

「あこせの「じりに安心すればここんだよ…………」

その23 温泉は泳ぐといひがんやあつません

紙を片手に道を進んでいく日本を私達は重い荷物を持ちながらついていった

ほのか「に、日本…………まだ…………？」

日本「申し訳ありません…………。先ほどまでいたところは人通りが少なくてホテルまではかなりの距離があることを言ひのを忘れていました…………」

まだ歩くつことか…………
正直つらいな…………

フランス「もう真つ暗だな…………」

ドイツ「早くしないとまたあいつらがやって来るかもしだれないな。
がんばろわ！」

イタリア「…………ヴエ、ヴエ…………」

さいほの「大丈夫か？荷物持とつか？」

イタリア「だ、大丈夫！－女子に重い荷物なんか持たせられないよー！」

なつじ「じゃあ私の荷物持つて

イタリア「え、」

やこせの「ウハ」

なつじ「あいたつ！」

完全に疲れているイタリアに荷物を持たせようとしたなつじをやこ
ほのはチヨップした

鬼か、なつじは

なつじ「鬼じゃない、ドジだ！！」

苑子「自分で言つなよ……」

つか自覚あんのかよ

しばらく歩いてくると辺りはだんだん騒がしくなつていき明かりも
増えた

中国「やつと都會っぽい所に来れたあるな……」

日本「たぶん」うちです

人が多いからみんなとはぐれないように日本についていく

やがてどでかい建物の前に到着した

苑子「え、まさか！」

日本「はい、そうです」

わこぼの「でかつ！…絶対宿泊料金高いだろーー！」

なつじ「ダメだよせいほの、そんな現実的な話はやめよーゼット！」

わこぼの「いや！」は読者も気にするといいんだが、「

ほのか「なんだかんだでどうにかなるもんなんだよ、金は」

わこぼの「世の中みんなに甘くねーよー。」

細かいことは気にしない

そしてまあなんだかんだでホテルの中へ

そして部屋へ中

部屋は10階で男と女でわかれて部屋に入った（隣同士の部屋）

わこぼの「おー、大きいー！」

なつじ「つかあっち一部屋で8人ー？せまくねー？」

フランス「じゃあ俺はこりちで寝」

わこぼの「出てけ変態」

ほのか「フランスは床で寝るから大丈夫じゃない?」

突如入ってきたフランスをせいほのが蹴りで廊下に追い出した後、私達はお風呂に行く準備をした

苑子「洋風なホテルなのに温泉があるなんてめずらしいねー」

せいほの「なんかいつも露天風呂入ってるからあんまり楽しみじゃないな……」

苑子「そつかい!? 私はワクワクすっ飛べー!」

なつじ「つぎこー」

苑子「ひどー…………」

ほのか「お、なんか棚に浴衣が入ってたよーー!」

せいほの「和風と洋風が見事にコラボってるホテルだな

苑子「じゃあご飯は中華かな!?」

なつじ「どうでもいいだろ、そんなん」

私達はこんなくつだらぬ話をしながら部屋を出た。
そして隣の部屋のドアをノックした

ほのか「おーい、温泉行ーー!」

『 ぬわあああ……やめんんだぞおおおお……』

れこほの「…………何が起きてるんだ中で」

なつじ「……まさかあいつらが来たんじゃない!？」

苑子「マジでか!/?よく!」だつてわかつたな……」

ほのか「と、とにかく助けなきや……」

私達はドアを開けて中にに入る

れこほの「お、おこ!……大丈夫、……か……」

中に入った途端、私達はその場に立ち尽くした

部屋に充满した何とも言えない臭い、そして部屋の隅っこでいがみ

合ひアメリカとイギリス
イギリスは黒い物体を手に持っている

アメリカ「だあからあーー君の料理なんて死んでもこららないんだ
ぞおおお……」

イギリス「な……お前がお腹空いたつていつもここからあげてや
るんだらうが……」

アメリカ「お腹は空いたとは言つたけど君の料理が食べたいなんて
一言も言つてないんだぞ!……ていうか死んでも言わないんだぞ!……」

イギリス「てめ……!……」

なつじ「なにせつてんだてめえらは
「

なつじが一人にチョップする

アメリカ「お腹が空いた、って言つたらイギリスが勝手に料理を差し出して来たんだぞ！！」

イギリス「腹が減つてるなら食えんだろ……。」

フランス「餓死寸前でも食べれないね、お兄さんは

苑子「私もだなー」

イギリス「てめえら……」

さこほの「はいはいそこまでー」

イギリスがキレる五秒前のところでさこほのが手を叩いてイギリスの前に立つた

さこほの「ふんつ……。」

そしてイギリスの腹を思いきり殴つた。

イギリスは白目を向いてそのまま床に倒れた。

お、オーマイガ—……

さこほの「ほれ、行くぞ。早く入りたい」

さいほのはぐつたりしたイギリスをドイツに渡し部屋をでた

か、かつこいい……………！のかな？

ほのか「うはあああ！…でかあああい！…」

温泉はすんごく大きかった。たぶん百人は余裕でいけるんじゃない
か！？

苑子「ダ―――イブ！…」

なつじ「すんな」

なつじは走つて温泉に飛び込もうとした苑子の足を自分の足にかけ
て転ばせた

苑子「ぬごつ！…」

苑子、頭から落下
痛そ……………

なつじ「まずはかけ湯だバカ」

さいほの「だからって普通」こまでするか？見て『』らん、綺麗な床
が赤い液体で汚れていくよ」

うわ！苑子出血しどるやん！…どんだけ出血すんだコイツーいつか
大量出血で死ぬんじやね！？

なつじ「あ、すいません。ホテルの人。」

ホテルの人かよ

苑子「う、うう……」

ほのか「大丈夫？」

苑子「うん！大丈夫っ！」

そう言う苑子は頭と鼻から大量に血を流している

全然大丈夫じゃないように見えるのは私だけだろうか

かけ湯をして私達は湯舟につかる

ほのか「ううううつ！！日焼けがヒリヒリするううーー！」

苑子「ほんとやね」

なつじ「苑子、日焼けしたん？」

元々苑子は肌が黒いからあんま焼けたようには見えない

苑子「焼けたでー？ほら水着の後がくつきり」

さいほの「ホントだwって私もだ」

なつじ「うわ、私も」

ほのか「私もだ！」

みんな日焼けした体にくつきりと水着のあとがついている

おかしくて私達は声をそろえて笑った

あいつらに監視されている」とに気付かずこ……

その23 温泉は泳ぐといひやあつません（後書き）

夏休み編は遅くても10月後半には終わらせたいです……

まあ私の中では夏休みはぎつと続く……

なつじ「しつじー」

やーかん

感想等、お願いします！

質問とかあつたらどんどん聞いてくださいー！

その24 浴衣DÉTÉーク（前書き）

じじいだ

立派なじじいだ

ぼやさいほの、苑子

最近肌寒くなつてきましたね……

風邪をひかないうつ氣をつけでください

その24 浴衣ロードーク

やっこほの「ふー、わっぱつしたあ…………」

やっこほのは濡れた髪をタオルでふきながら浴衣の袖に腕を通した
やっこほの「…………やうこえれば浴衣つてどうやって着るんだ?」

苑子「ああ?」

苑子がまぬけな顔で答える

なつじ「私もあんまわかんないな…………」

ふつふつふ…………

ほのか「いじはほのか様にお任せロー……」

なつじ「誰も頼んでないけどな」

なつじの毒舌が心にグサッときたけび、そんなじといの際氣にしな
い

()と言ひながら涙が出ちゃうのはなぜだらう(

苑子「黒須よく旅行とか行くもんねー」

ほのか「うむ!だから浴衣着るのは（たぶん）慣れてるよ……」

そこまでの「おおーよろしくお願ひします黒須先生！！」

せ、先生……………

なんていい響き……

よおし、私にどんどん聞きなさい！

なつじ「体重いくつですか先生」

ほのか「ぶつ殺すぞ」

それは聞くな

ほのか「まずい」「うさんだよー」

そこほの「先生、何がどうなのかわざりぱりわかりません」

ほのか「作者が浴衣の着方を詳しく知らないから仕方ないんだよ齊藤くん」

さこほの「やうなんですか先生」

ほのか「大人の事情なんだよ齊藤くん」

苑子「まだ作者は中学生のガキですよ先生」

ほのか「ノリだよ數崎くん」

なつじ「もうやめりそのやつとつ。ハザハザハ」

ちつ、なんか今日のなつじノリ悪いーな

苑子「でもさすが黒須！浴衣着れたよ！」

セイはの「」んな黒須にも頼れる所があるんだな」

そ、そんなに頼れないのか私は

なつじ「おおー」

ほのか「さ、行こうかー」

私達は女子風呂から出て置いてあつたマッサージチェアに座りイタリア達が出てくるのを待つた

卷之三

さいほのは思いつきり和んでいる

なつじ「肩」ひたんだよなあ……

苑子「ぐおー……」

苑子はいつの間にか口を開けて爆睡していた。

私はなるべく苑子とは他人のふりをしたが周りの冷たい視線は苑子だけじゃなく私にもふりかかる

苑子あとで覚えてろよ……………！

さいほの「つかあいつら遅いな。海の時もそつだつたがこいつこいつ時に女より男の方が遅」とはどういふことだ?」

なつじ「またフランスが覗いりとしてんじゃない?」

ほのか「それはないです」

ドイツ「その通りだ」

なつじ「冗談だったのに本当だったとはアンビリーバボー」

男湯からぞりぞりと男が出て来た

一名ボロボロだったが

そこほの「覗いりとしただけでなんぞうなるんだ」

アメリカ「そりは聞いちやいけないお約束なんだぞ……」

アメリカがH A H A H A と笑う

しかし今氣付いたけどみんな浴衣似合つてるなあ……

日本はもちろん外国人とかが着ても似合つんだな浴衣つて
まさにオールマイティアイテム! 」

つて何言つてるんだ私は

日本「まあ夕食の時間まで部屋でお話でもしましょつか」

こうこう時つて日本がいてくれて本氣で助かる

んで部屋。
(男の方の)

せつかくこのいう時なんだし聞けるもんは聞いとかないとー！

ヒーリングでスー

ほのか「質問」「——ナ——！——！」

苑子「いえ——い！！」

よかつた、苑子のつてくれた

安心するな苑子いると

なつじ「またくだらない……」

ほのか「べだらなくないよ……たして 県の センカウの質問ー」

セコボの「募集とかしてねーだろ

ほのか「まーまー、成り行きだよ成り行き。それよりこの「コーナーは今まで疑問に思っていた」とを質問しちゃえ つてこいつへありますたりな「コーナーだよ!」

イギリス「まんまだな

ほのか「つーことで質問つー!」

中国「言つた張本人からあるか……」

ほのか「日本つて爺つて言われてるけど何歳なのー?」

なつじ「黒須にしては普通の質問……。私も気になつてた

日本「そうですね……」

日本が顎に手を当つて考える

日本「忘れてしました……」

セコボの「じじいだ

苑子「立派なじじいだ

イタリア「に、日本……おじいちゃんみたいだよ……」

日本「だからもう爺さんですって」

さいほの「あ、次は私が質問していいか？」

ほのか「なになにー?」

さいほの「なんでイギリスの料理はまんざら」

ほのか「それ以上言うなああああああー！」

私はどうせにさいほの口をふさぐ

イギリス「ん?なんだ?」

ほのか いやいやなんでもない!! 気にしないで!!

さいほの ー んー！ んー！

もかくせいほのをおさえつけて笑顔でイギリスを見る

イギリス——そ、そ、うか……」

よか二た 感つかれなか二た

私はさしほのを解放して安心する

さいほの 一
で、なんでイギリスの料「……」

ほのか「だあああああああーーーーー！」

セリフが無いからやこせのせ飯繩をせりやいました

イギリス「な、なんなんだよ…………」

苑子「なんでもないよー。さいほの、イギリスの料理食べたいらしい
からあとでさじほのだけに食べてあげてね！いい？さいほのだけ
だからね！！」

イギリス「え、あ、ああ…………」

まあ、完全に失神しかやつたるやこせのはおじといて
ほのか「はい次のしつもーん！誰かいなーい？」

フランス「はいはーーー。お兄さんのが……」

ほのか「はい、ほかー」

フランス「えー？ なんでー？」

なつじ「お前が質問する」とは大体想像できんだよ変態

フランス「ち、違つ違つーー。お兄さんかやんとした質問するからー。」

苑子「ちつ、仕方ねーなあ。言わせてやるよ」

なつじ「おお、こきなり！ ブラック苑子」

フランス「ほいきたーー。すばりー君達四人のスリー・サイズ……」

ほ・な・そ「死ね」

」の後、フランスがどうなったかは言つまでもない

れこぼの「へ、うる……？あれ？」

ロシア「あ、れこぼのちゃん。おはよう」

れこぼの「お、おはよ。って……何があつたんだフランス」

れこぼのが起きてまづ田についたのはボロボロになつたフランスだ
つた

ドイツ「…………まあ自業自得だな…………」

れこぼの「ホント何があつたんだ……」

ほのか「私は女の敵を退治しただけだよ

苑子「ペツツ……」

れこぼの「や、そうか……」

ほのか「はいほかに質問ある人つ！」

ロシア「じゃあ僕いい?」

なつじ「ロシアか、なんか珍しいね」

ロシア「えっと……菜摘ちゃんって妹いるよね?」

なつじ「え? うん、こるよ」

ロシア「妹が自分の言ひとを聞かない時ついでにしたらいいのかな……」

なつじ「え、そうだなー……殴る?」

苑子「姉とはあるまじき答えだな」

ロシア「や、そつか……今度やつてみるよ……」

ほのか「いや、やんなくていいから」

ベラルーシのひとホントに困つてんだな
大変だなあ……

イタリア「うう……ドイツお腹すいたよ……」

イタリアはお腹をおもえてくる

ドイツ「もういじんな時間か」

時計は7時をさしていた

日本「夕食の時間ですね。行きましょうか」

苑子「いや、ほう……中華、中華……」

そこほの「だから中華と決まったわけじゃないってば」

中国「中華料理なら我が国が一番あるよ！」

ああもう中華料理の話に……

つか私、中華料理苦手なんだけど……

まあとにかく夕食、夕食ー

私達は部屋から出て食事の会場に向かった

その24 浴衣DEマーク（後書き）

感想お願いします！

その25 食事は計画的に（前書き）

「じつやーさん……」

b y 苑子

今日は普段立たないところのが語り&メイン（？）な話

そしてそこのが萌えに田覚めてしましますw

その25 食事は計画的に

私達はエレベーターに乗り3階にある食事の会場に向かつた

さつきからほとんどの人がテンション高すぎでついていけない

薮崎は中華中華うるさいし……

だから中華じゃないかもしけねえだろーが

いろいろな事を考えていると食事の会場について

会場についたとたん薮崎を含むほとんどの人達のテンションはMAXになつた……

苑子「いやつほ―――い――中華中華ああああああ――」

ほのか「肉うううううう――」

イタリア「パアスターアアアアアアア――」

アメリカ「ハンバーガ――――」

中国「ただ飯食い放題あるうううう――」

やめる叫ぶな恥ずかしすぎるし周りの人の視線が痛い

残つた私達は入口付近にいる人に自分達の人数を言い席を案内して
もらつた

(12人って言つたらかなりびっくりされたが)

どうやら夕食はバイキングらしい。席につくと様々な食べ物のいい匂いがただよってきて食欲をそそる
日本にさつき走つていった奴らを捕まえて来てもらひとりあえず全員を席に座らせる

私は一息ついて話しあじめた

さいほの「いいか? このホテルは私達だけじゃなくほかの人も宿泊してんの。だからはしゃぐのはわかるけどほかの人の迷惑になることは絶対にやらないこと、わかつた?」

さつきまで思いっきりほかの人に迷惑をかけていた奴らははーい、と小さく言つた

さいほの「うん、じゃあ行つてよし」

一部「いやほほーーーいーーー!」

おいコラ人の話聞いてたのか

私は話が終わつた途端突つ走つて行つた奴らを捕まえ、また説教しさすがにわかつたらしく次は静かに食べ物を取りに行つた

なんで私が疲れなきゃいかんのだ……

おぼんと皿を取り食べたい物を食べきれる量皿に乗せて席に戻つた
私が席についた時にはすでにドイツとイタリアとロシアは席に座っていた

つて……

れこぼの「イタリア、パスタだけかよーー。」

イタリア「えー? だ、だつて……」

れこぼの「だつてじやないーほかの物も取つてきなさいー。されば野菜ー。」

イタリア「は、はいい……」

イタリアは渋々皿を片手に席を立つてサラダコーナーに向かつた

ロシア「お母さんみたいだね」

ロシアが二口二口つて私を見る

れこぼの「またり前の」とだよ。ああ疲れた……

ドイツ「でも助かるな、ありがと」

れこぼの「そつか、いつも苦労してんのはドイツだもんな」

ドイツ「まあな……」

ドイツと話をしていると次々とみんなが戻ってきた

みんなが持つてきた料理を見るとイタリアのようにみんな栄養バラ
ンスが崩れまくっている

言いたいことはたくさんあるのだが今は疲れたしせつかくの旅行だ。

「んな」と嫌な思いはさせたくないから見て見ぬふりをしよう

全「いただきまーす」

みんな食べ物をつまんで食べはじめる
食べてるときだけ静かだな……

イタリアはやはりかわいそなうので特別にパスタだけ食べててもいい
ことを許可した

笑顔でパスタを頬張つている姿がなんとも微笑ましい

つて何考えてるんだ私！

私は一次元などには興味はないはずだー何ちょっとオタク的な田で
イタリア見てんだ私ー！

これじや黒須達と同類じやねえかああああーー

ほのか「ん? どしたのさこほの」

れこほの「な、なんでもない」

言えない、ちょっとだけイタリアに萌えてしまつていたなんてええ
……

齊藤ほのか、一生の不覚…………ー！

苑子「じつやーさんー！」

なつじ「早つーーあんないつぱいあつたのこ…………」

アメリカ「じあやつわまなんだぞー！」

イギリス「お前も早いな…………」

苑子とアメリカはもう食べ終わってテザートを取りに行つた

しかし……

セコモの「イギリス、お前料理まずいわつにはつやんとした物食べ
…………」

ほのか「わーわーわーわああああああ…………」

私のイギリスへの言葉は黒須によつて遮られる

さいほの「なんだよ黒須、私は…………」

ほのか「ほのかチヨップ…………」

セコモの「いだつ…………」

黒須の必殺技『ほのかチヨップ』が私の頭にヒットする。当たつた所がハンパなく痛い、それがほのかチヨップだ。

黒須を睨むと、黒須は私に小声で話しかけてきた

ほのか「いい！？イギリスは料理がまずいことがコンプレックスなんだからあんまりつっこんじゃダメなの…………わかった！？」

セコモの「あ、うん…………」

イギリス「なんだ？」

「ここはの「いや、なんでもない」

イギリスは気にしない様子で食事を再開した
私と黒須も食べ物を口に運ぶ

しまじくして全員食べ終わり食事の会場を出た

苑子「はあ……お腹いっぱい」

なつじ「」飯を三杯おかわりし、デザートにアイスを五個も食べり
や腹いっぱいにもなんだろ。普通

ほのか「苑子食べ過ぎだ……」

こつこつ黒須もアイスを七個たいらげている。
お前も例外じゃねーからな？

アメリカ「それよりさ、ゲーセン行かないかい！？」

アメリカがテンション高めで提案する

中国「ゲーセン？」

日本「なるほど……いいですね、ホテルにはゲーセンは定番です
からね」

フランス「ゲーセンは、ひとつ……3階にあるみたいだな」

フランスが壁に設置してある物を見て言つ

アメリカ「よーし、じゃあ行くんだぞーっ！」

アメリカは走り出した

イギリス「おいゲーセンならこっちだぞ

アメリカ「…………」

しかしそういふと、アメリカが進んだ方向はゲーセンとはまったく逆の方向。
やっぱこいつはバカだ

その25 食事は計画的に（後書き）

感想とかお願いします！

その26 ゲーセンではしゃぐのせん供だけ（前書き）

お前、ひちびつて言いたいだけだろ！！

ひよチビ……じゃなくてなつじ

すいません、結構間があいてしまいました；

その26 ゲーセンではなくしゃぐのせト供だけ

私達はゲーセンに向かつていた

ほのか「つかお金あんの?」

日本「そこは気にしない決まりです……」

気にしちゃダメなのか……

やがてゲーセンに到着してアメリカはかなり興奮している

アメリカ「す、」「いんだぞ!—日本のゲーセン!—」

フランス「来たことないのか?」

アメリカ「ゲーセン来る」と自体が始めてなんだぞ!—!

わこほの「やうなの!—?」

アメリカ「とりあえず遊びまくるんだぞ!—!」

アメリカはゲーセンの中を歩きまくり嬉しそうにゲーム機を見ている

子供^{ガキ}か。

アメリカ「日本ー!—これ壊てるんだぞー!—!」

日本「え？」

アメリカに呼ばれて私達はアメリカのもとに行く

アメリカはクレーンゲームのボタンを押しながら不安そうに日本に訴えた

アメリカ「ボタンを押してもうんともすんとも言わないんだよー…」

日本「あー……アメリカさん。ゲームセンターのゲーム機はすべてお金を入れないと動かないんですよ……」

アメリカ「な、なんだいそれ！？なんでゲームやるだけなのにお金をお払わないといけないんだい！？」

苑子「あ、それ私も思つー！」

なつじ「同情すると」「じゅねーだら」

なつじがハリセンでアメリカと苑子を叩く
つてハリセン！？ビックから出してきた！

苑子「いたい…………なんで！？なつじもそつ思つでしょ！？」

なつじ「そういう決まりなんだから仕方ないっしょ。黙つてお金投入しろ」

苑子「なんで私！？」

ほのか「一回くじこいいじゃんー」アメリカにやられたらあがよー。」

苑子「うー」

苑子は渋々財布から100円玉を取りだしクレーンゲームに入れる

アメリカ「…………？」

れいほの「いーか?欲しいものをボタンを押して取るの、やってみ?

れいほのに言われた通りにアメリカはボタンを押してクマのぬいぐるみを狙う

しかし初めてなのでクマのぬいぐるみを掴んだはいいがすぐ落ちてしまう

アメリカ「あ、落ちちゃったんだ!」

れいほの「あー、残念だな。終わりだ」

アメリカ「え!/?終わり!/?全然楽しめてないんだぞ!-?」

中国「やつこづゲームある」

アメリカ「なんだいなんだい!-!ぼったくりじゃないか!-!ぼったくりだあー!」

アメリカはクレーンゲームの透明なガラスを叩いたりするもんだか

「イギリスは急いでアメリカを止める

ほのか「レバコウだから取れたとき嬉しいんだよ」

苑子「こんな」と騒ぐなんて子供だね^{ガキ}』

アメリカ「なんだともつー?」

ディイツ「落ち着けアメリカ」

苑子「レバコウのせ「ジジがあるんだよ、つと……」

苑子はまた財布から100円を取りだし入れた

そしてボタンを押す

苑子「レバコウてえべつ」むかいつ……「レバコウ……」

なつじ「ボクシングか」

「いつもおでこるよついに見えてもかやんとぬいぐるみをがつちつと
キヤッキしている

アメリカ「おお……」

日本「上手ですね、苑子さん」

苑子「いやあ……」

ぬいぐるみはそのまま上に持ち上げられ出口へと移動していく

フランス「おおー、こけらんじやないかー？」

そして出口の真上にたどりつきましたが、みはゆくつと落として
を取りだしロリ……

いけなかつた。

ぬいぐるみは出口の近くにあつた人形の山につかり落ちてこな
かつた

.....

苑子「返せええええええーー私の幸せと時間と200円を全て返せえ
えええーー！」

わざの「お前は子供すねーー！」^{ガキ}

我を忘れクレーンゲーム機を吊きまくつたり蹴りまくつたりする苑
子をなつじと中国がなんとかおさえゐ

なつじ「落ち着いて苑子！あとでアイスをおいひあげるからーー！
ていうのは嘘だから！」

中国「何が言いたいあるか……」

苑子はよつやく落ち着いてきた

イタリア「？？何あれ？」

イタリアがそう言つて指差したのは誰もが知つてゐるゲーセンに必ずあるゲーム機、太鼓の 人だ。

日本「ああ、これはリズムに合わせて太鼓を叩くゲームですよ。このバチで太鼓を叩くんですよ」

イタリアに説明しながらバチを持たせる日本。

ほのか「よしつ！イタリアやろつ！」

イタリア「イエッサ――――！」

私は100円を入れて準備満タンだ

さいほの「…………イタリアの分も出してやれよ

ほのか「うつせこなつー出すよーーー！」

言われなくとも出すつつの

私はもう一枚100円を取りだし入れた

ゲームが始まり陽気な音楽が流れる

ほのか「イタリアは何の曲がいい?」

イタリア「俺は何でもいいよー」

ほのか「じゃあ私が決めるね、えーと……」

苑子「あ、黒須が好きな『凛として咲く花の如く』があるよーー。」

な、なんだとかーー?」

ほのか「よしあるかいタリアああー！」

イタリア「え、えー?」

私、この曲大好きなんだよおおおつーー

おっしゃあああ

本氣出すぞおおおつーー

そしてなんだかんだで終了。

イタリア「ヴェー……難しこねー……」

セーモの「覚えれば簡単だよ、もつ一曲できるからやつてみー。」

ほのか「なつじ、やるー。」

なつじ「なんで私?」

ほのか「え、だって部活でパークッシュンやってたから得意かな?
つて……」

なつじ「そんな理由かいな

私はなつじにバチを渡す

なつじ「なんの曲がいい?」

れこまの「ミス ルー...」

なつじ「前にね聞いてねー♪

イタリア「なるべく簡単で簡単な曲がいいなー

ロシア「わざわざの早口し難しかったよねー」

ほのか「うそ、私間違えまくった

れすが撫子ロジック

なつじ「じゃあこれね

そう言つてなつじが選んだのは早口めくへや難しそうな曲

全員『「こつくりだ……』

全員がそつくりた

中国「イタリア、とりあえず落ち着いて頑張るあるー。」

イタリア「う、うんー。」

曲が始まつてゲームが始まる

予想通り曲がめちゃめちゃ早いからめつも難しかった

なつじは無表情でそれを叩く
イタリアは最初の方は叩ける所はがんばっていたがだんだんついて
いけなくなり半泣きになる

イタリア「うわああーできないよおー。」

ドイツ「泣くな！がんばれー。」

苑子「つかなつじうまつーー！ チビなのー。」

ほのか「ホントだー！ チビなのー。」

さこ姉の「さすがパークッシュンーー！ チビなのー。」

なつじ「お前うちらつて言いたいだけだー。」

すげえ叩きながらつっこみだ、神だ

結局イタリアは何もできずに、なつじは一回も間違えずに曲が終わ
つた

なつじのあの勝ち誇つたような顔がムカつくのは私だけだろうか

イタリア「ドイツー難しいよー」

イタリアは泣きながらドイツのもとに行く

ドイツ「泣くな……たかがゲームだろ！」

さいほの「そのたかがゲームで素人に勝つて喜んでる奴がここにいるがな」

なつじ「んなつ……」

苑子「おとなげないよー」

なつじ「大人じゃないもーん」

そういう問題じゃねーだろ

中国「どうするあるか？もう一曲できるらしいあるよ」

ほのか「いいよー、やりたい人やつてもー」

アメリカ「じゃ俺が……」

さいほの「お前破壊しちだからダメ」

イギリス「じゃあ俺がやつてやる」

苑子「イギリスが太鼓……似合わなww」

イギリス「うるせえ黙れ」

さいほの「あと一人は？」

フランス「お兄さんやつていい？」

なつじ「フランスも似合わねえwww」

イギリス「ふつ、お前が相手か。絶対負けねえからな」

フランス「お兄さんも久々に本氣出しちゃおつかな」

イギリスとフランスの間に火花が散る

そんな火花散らすようなゲームじやないんだけど……

曲が始まった途端、おりやあああああ！…と一人が叫び声をあげ太

鼓を叩く

恥ずかしくないのかな、大人として

つか二人ともやる気あるくせに全然叩けてないし
なんてくだらない争いなんだ

見てらんないから二人を置いて私達は別のゲーム機を見る

苑子「あ、お菓子とるゲームだ。懐かしいなあ」

ほのか「昔よくやったわあ。私結構得意なんだよ？」

ロシア「面白そうだね、やってみていい？」

さこほの「こいケビ」れもわひせのクレーンゲームみたいにぼつた
くれるケースもあるよ?」

ロシア「僕はそんな」と氣にしないからこよ?子供じゃなししね

今の言葉、きっとアメリカと苑子の心に深く突き刺さつただひつ

そこほのから100円を受け取つゲームを始めるロシア。

ほのか「ロシアこれ初めてなの?」

ロシア「うそ、ロシアにはこんなのがない」

初めてのわりにはロシアはたくさんお菓子をとった

日本「上手ですねロシアさん」

ロシア「いいねこのゲーム。楽しいしお菓子も取れるし」

ロシアは「機嫌だ

よかつた、コルコル言わないで

あと勝負を終えたイギリスとフランスが帰ってきた

苑子「おかえりー、びーだった?」

イギリス「同点だった」

ほのか「びー同点ーー!?」

あのゲームで同点つて難しくね！？

ほのか「ど、どんだけ仲良いんだ……」

フランス「絶対お兄さんの方が叩けてたつて……」

なつじ「大人が必死になる」とじゃないでしょ！」

なつじが呆れ顔で肩をすくめる。

中国「…………」

私は中国の様子がおかしい」とに気付いた
辺りをキヨロキヨロと見渡している

ほのか「中国、どうしたの？」

中国「い、いや……」

中国は一回黙つてしまつたがやがて決意したよつて私に話しあじめた

中国「おかしいある……」

ほのか「おかしい？」

私と中国の様子に気付いたのかさいほの達も騒ぐのをやめ、黙る

中国「いや……気のせいかもしねえあるが……さつきまでいた人
がいつの間にかいなくなつてて……」

中国に言われて初めて気付く。

確かにさつきまで私達以外にもたくさん人がいて賑やかだった（私達だけで十分賑やかだが）のに今は私達しかいなくてゲーム機の音が室内に響いていた

さいほの「もう遅いからじゃないか？」

日本「いえ……まだそれほど遅い時間帯ではないですし……」

じやあなんで？

ま、まさか……

「久しづつ……いや、さつきぶりか？」

全員「……」

突然聞こえた声に全員が反応する

ゲーム機の音で「ひるねわい」のにその声だけははっきり聞こえた

なつじ「ま、またあいつら……」

「またとは失礼ね、私達だって好きであなたたちをつけてるんじゃないわ」

また声が聞こえる

私達はなるべく固まつてどこからあいつらが来ても「いよいよ」に警戒する

「わ、わよく生きてられたな、生命力はゴキブリ並か?」

苑子「ゴキブリじゃないもん!!」

なつじ「反応すると?...?」

「でも今度はゴキブリ並の生命力を持つあなたたちでもダメね」

突然、周りの景色が歪んだ

ゲームセンターから景色は変わり、私達は遊園地のような所にいた

そこほの「い、いせ.....」

「「ふうん、楽しに楽しにワンダーランドへ」」

空にはキリハとキリカが浮かんでいて私達を見下ろしながら座り笑っていた

その26 ゲーセンではしゃぐのはな供だけ（後書き）

次回から本題に入るかも……

つか今10月やん……
秋やん、寒いやん……

その27 変態には気をつけろー？（前書き）

何？思いやりつて

知らね

by苑子、たいほの

なんとか投稿できた……

その27 変態には気をつけ！？

「「よつこや、楽しさ楽しむワンダーランドへ」」

一人が声をそろえて言った。

なつじ「かつこうかでんじやねえよ、うせえ」

そんな一人になつじの毒舌がふりかかる

ずっと冷静にいた二人もなつじの毒舌には流石に傷ついたらしく
「な、そんなこと、わなくともいいじゃん……せつかくラスボスみ
たいに演じたのに……」

ほのか「うねせえよ下つ端

「下つ端だからこいつんな時くらいラスボスみたいにさせてくれな
い…？思いやりって言葉知ってる…？」

苑子「何？思いやりって

らね

だなお前ら…！」

かなんでこんな所に呼んだあるか。下つ端

「強調して言つなあああああ…！」

「落ち着きなさいキリハ」

うん、あれだな。キリハはガキだ

なつじ「で、なんで私達を呼んだの」

「よく聞いてくれたわね」

苑子「いや別に聞きたくて聞いたわけじゃねえし。何その待つてました！…って顔。バレバレだかんね」

苑子の言葉にキリカはピキッときたがいい加減もたもたしてるとダメなので我慢して話を続ける

「私とキリハはあなたたちの状況を監視させていただいたわ」

ドイツ「監視？」

「そ、あなたたちがあのホテルに入つてからずっとね

ほのか「うわ」の人達監視してたらしくわよ、やあねえ（小声）

さいほの「警察に通報した方がいいかしら。ほんと最近の若者は怖いわねえ、何するかわからないわ（小声）」

ヒソヒソ

「聞こえてんだよムカつくからやめる…」

フランス「いやほんとこれ犯罪だよ？自首すれば罪は軽くなるよ…」「うるせえよ黙つてる…」

なつじ「ん？ちょっと待つて……ずっと監視してた、つてことは……」

「？」

なつじ「お風呂入つてたときも監視してたつて」と？」

「は、はは……」

「まあ、女子風呂を…………少し…………」

二人は笑う

しかし

ほ・せ・な・そ「ぎやあああああああ……変態いいいいい……！」

私達女は笑える話じゃなかつた

地面に落ちてる石を一人に投げまくる。投げて投げて投げまくる。
ひたすら投げまくる

「ちょ、痛つ……やめ、いたたた……！」

「大丈夫……キリカ（一応男）は見てないから……いたた！」

さこほの「そういう問題じゃねーんだよクソアマああああああ……！」

ほのか「どうせ鼻血たらして微笑みながら見てたんだろうおおお……！」

「私にそんな趣味などないわボケえええ！…つかお前らタオル巻いてたろ？が！！タオル巻いたまま入浴するなって注意書きに書いてあつたのに平氣な顔して巻いてたろ？が…！」

苑子「あほおおおお…実はタオルの下には水着も装着してたんだよおおおお…！」

「知らねーよなら別にいいだろ？が…！」

ほ・や・な・そ「いいわけねーだろばかああああああ…！」

なつじ「最低野郎めが死ねえええ…！」

むつじ「ちが悪なんだかわかんなくなつてきたわ

「ていうかキリカ、なんで女湯なんだ？別に男湯でもよかつたんじやねーか？だつたらこんなにこちやこちや言われなかつたのに…」

…」

「…………それもそうだな。そしたらキリハも監視できだし

ロシア「その前に入浴を監視することがビツかと想つんだけビ

フランス「変態め…！」

イギリス「お前が言つなよ」

「ああもつーいちいぢけんをこ野郎共だな…とにかくつー…」

キリカは私達にビシッと指差す

苑子「ああー、人に指差しかやいけないんだよー」

「つるせえ！」

キリハが苑子を怒鳴り睨む

苑子も睨み返す。負けず嫌いめ、でもしかしあつぱり変顔にしか見えない

「お前らに…………」

キリカはゆつくつと口を開く

「決闘を申し込む」

その27 変態には気をつけろ！？（後書き）

本題に入る言つたくせに入つてねーじゃねえかあ！！

つーわけで軽ーく次回予告の巻

決闘を申し込んだキリカとキリハ。

その決闘の内容とは…………！？

ほのか達は決闘を受けるのか！？
そして彼女達の運命は！？

その28 決闘（前書き）

お前らが死ぬこと確定だな

b yなつじ

今回シリアスだと私は思つ。

その28 決闘

なつじ「決闘…………？」

苑子「それってどういふ？」

「そのままの意味だ」

キリカがぴしゃっと叫び

「私達にはお前らを殺せと命を取けていい。だからわれには従わなければならぬ」

そこほの「何回も失敗してゐるナビな

「誰のせいだと思つてんだ」

「しかしこつまでたつても命令に従えてないためボスはお怒りになつてこむ」

ほのか「ボスいたんだ！」

初耳！－

イギリス「単独で世界征服なんかくらむ馬鹿がどこのことなんだよ」

苑子「プーちゃん（プロイセン）ならやりかねない

全員「ああ……」

納得すんなー！プロイセン

ん？「おおび」からかプロイセンの声が……

『氣のせい』

アメリカ「決闘ついどじんなのだい！？」

「かくれんぼよ」

れこぼの「…………は？」

「かくれんぼよ」

ほのか「いや一回かわなくていいから」

日本「かくれんぼとは…………あの有名な遊びの」とですか？」

「その通り。ルールもほととじせ回」

「鬼はあなたたち全員。隠れるのは私とキリハよ」

ロシア「範囲せ」の遊園地全域、つて」とへ。」

「やうだよ」

キリハとキリカが笑う。いつもより自信があるようだ。ちょっとムカつく

キリハとキリカは私達の前まで来た。今気付いたけどキリカとキリハの顔、そこそこの整つてんなチクショウ

「ほんとどは遊びのかくれんぼと同じ。でも違うのはルール」

イタリア「え？さつきルールも同じって……」

「全部とは言つてないわ、一部だけよ。今から説明するわね」

キリカがどこからかホワイトボードを持つてきてペンのふたをとりいろいろ書きはじめた

「私とキリハ隠れる側はこの遊園地全域を使い隠れることができる。でも隠れる側は隠れる場所を変えることができる」

なつじ「え、なんかずるくね？」

「別にいいだろ。鬼はお前達12人、隠れる側は俺とキリカ2人だけなんだぞ？こんなくらいのハンデいいだろつ」

中国「んー、まあいいある。説明を続けるよろし」

中国は近くのベンチに座り腕くみをしている。「えらそうだな。その隣で日本がお茶をすすつてほつこつしている。爺みたいだな。あ、爺か

「隠れる側は見つかっても終わりじゃない。自分を見つけた鬼を倒せばヤーフとす」

「ドイツ」「倒す……ー？それはつまり……ー？」

「殺す、ってことだ」

「そこは」「やつぱりお前らの目的はそれか」

「さうよ、私達はかくれんぼで遊ぶことが目的じゃない。あなたたち全員を殺すことよ」

物騒だな……

「やして隠れる側は鬼を途中で殺してもよい」
…………
は？

「ほのか」「それって……自分が見つけられなくとも鬼を殺してもいい…………って」と？

「そうだ、言つただる。俺達は遊ぶのが目的じゃない。これは殺し合いなんだ」

じゃあかくれんぼの意味なくね？

「制限時間は2時間。それまでに私とキリハを見つけられなかつたらあなたたちの負け。逆に私とキリハを見つけられたら私達の負け」

「フランス」「…………負けた方は？」

キリカはためらいもなくその言葉を告げた

「死ぬ」

私は息をのむ。

あいつらが私達を殺さなければならぬのは前からわかつてゐる。
しかしそのボスの命令とやらのせいで自分が死ぬのはいいのかな、
怖くないのかな。私は絶対やだな。

あと苑子が前にキリハ達に聞いた言葉

「ホントはこんなことしたくないんじやない?」

あの言葉を聞いた途端二人は戸惑つていた。

じゃあこれだつて……

自分達がやりたくてやつてゐわけじゃないはずだ

「じゃあ始めるか」

キリカが静かに言つ

私は思い切つてさつとまでも思つてたことを聞いてみるとこした

ほのか「ねえ……」

なつじ「ボスの命令なのはわかるけど、それで一人が死ぬのっておかしくない?」

今まさに言おうとしたことをなつじに言われた。

「心読まれた……!?

なつじ「怖くないの?」

わあまるで私の語りがまるまる聞こえてたみたいに私の思ったことをすらすらと……

「怖くなど、ない」

キリカは聞かれて少々戸惑つたが落ち着いて答えた

「任務を成功できないということはボスの命令に従えないと同等のこと。つまりこのゲームに俺達が負けた際には罰を受けるのだ。それは当たり前のことだ」

キリハは表情変えずに言つ

なつじ「へえ、そつか。じゃあ……」

なつじは一人を睨む

なつじ「お前らが死ぬこと確定だな

そして突き放すように言った。

私達は信じられない顔でなつじを見た。

だつてあのチビで毒舌でドレアホななつじがこんなにカッコイイこと言つてるのだ。

明日は雪降んじゃねえか？

なつじ「ほのか後で殺すからな」

聞こえてたらしい

「ふ、いい度胸だ。では始めよつ」

キリカが指をパチンと鳴らした

その瞬間キリハとキリカの後にブラックホールのような穴が現れた。

「今から30分後にゲームスタートだ。それまでに作戦でもたてておけ馬鹿共」

苑子「んだと『リカラツ！』

苑子を無視して二人はブラックホールのようなものの中に消えていき、ブラックホールのようなものも消えた

その28 決闘（後書き）

後書き書くことないんでこれからはキャラ達に反省会でもやらせようかと思つます

* * * * *

そこほの「率直に言おひ。なつじと黒須、シリアス似合わなすぞ」

ほ・な「ホントに率直だなオイ」

苑子「うん、似合わない」

なつじ「お前に言われたくなーよ」

そこほの「いや、なんか藪崎シリアス以外と似合つてゐるから問題ナッシング」

ほのか「ありすぎだよーなんで苑子似合ひやがうんだよー」

苑子「ふふ、それは私が天才だよー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0341t/>

friend and world!!

2011年10月14日06時55分発行